
力への無限の欲望 ーI need more power!!ー

観察者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

力への無限の欲望 I I need more power!
!

【Nコード】

N7660K

【作者名】

観察者

【あらすじ】

魔剣士は力を求め恐怖の土台を復活させた。しかし赤い狩人に敗れ奈落に堕ちた。
無限の欲望は魔剣士の力を、魔剣士は無限の欲望を利用し力を求める。
立ち向かうは夜天に集いし星と雷と小さな希望、命を与えられし死者達。

エピローグ、そしてプロローグへ（前書き）

さてさて同時連載で、しかも思いつきで書いてみようと考えて投稿してみました

十中八九投稿は毎回遅くなると思いますがよろしくお願いします！

エピソード、そしてプロログへ

「ドクター、センサーが微弱な次元震を探知しました」

様々な機械が点滅しているなか、一人の女性がディスプレイの画面を見ながら淡々と後ろにいる男にそう報告する。女性の報告を聞いた男はチラリと女性の手元の画面に目をやると、確かに次元震が発生した時のメーターが微弱に震えていた。

「確かに……一体何処の世界だい？」

だんだん興味が湧いてきたらしく男は女性に位置を訪ねると女性は手早くキーを叩き、場所を確かめる。

「第21管理外世界、アメリカ合衆国の路地裏、となっていますが……」

路地裏、と聞いて男はさも面白そうな顔をする。人の目の届きにくい所は不穩の種が育ちやすい。それは多種多様にある世界の中で希少な共通項の一つであると男は考えている。

「ますます興味が湧いたよ。画面に出してくれ、ウーノ」

「はい」

ウーノと呼ばれた女性は再びキーを叩いてその場所を映した画面を男の前に出す。

「これはまた……すごいな……」

男の目線の先には、月の光を受け夜の闇を割らんばかりにそびえ立つ巨大な塔があった。よく見ると塔の麓にこれまた巨大な鯨のような物が堕ちている。

そんな奇怪な光景に男が見入っていると隣でモニターを見ていたウーノが若干驚きながら報告してくる。

「信じられません。あの塔から溢れる魔力量……軽くSSSオーバーです……」

「素晴らしい。第21管理外世界なんて辺境を言うからあまり期待はしていなかったが、嬉しい誤算だよ。ところで、あの光は？」

男が気になったもの、それは塔の最上階から天に向かって伸びる一筋の光だった。ウーノはすぐに画面を光に寄せデータを見て確認する。

「どうやらあの光の奥で次元震が起きかけているようです」

「ではその次元震の発生源が見たい。出来るかな？」

「ドクターが望むならば」

そう言ってウーノが手元の機械を操作すると画面が切り替わる。そこは水が奈落へと通じるような大穴に向かって落ちている場所だった。そして、そんな不安定な場所で二人の男が対峙していた。

「どうやらあの二人が原因のようだな」

「しかしドクター、人間がロストロギア無しで次元震を起こせるでしょうか？」

ロストロギア。数在る世界の中で他の世界を超越したオーバーテクノロジーの為、世界を滅ぼす事が出来る程の力を秘めた古代遺産封印指定危険物の総称。

男がこれから集める“古い結晶”と呼ばれる物もロストログアに認定される代物である。

「それは見ていれば分かるだろう。我々はしばし静観しようじゃないか」

この二人がどうやって次元震を起こすかにも興味が湧いた男は椅子に深く腰掛け画面を凝視し始めた。

「俺達が受け継ぐべきなのは力だけじゃない！もっと大切な……誇り高き魂だ！！」

俺とダンテは互いの剣を離して距離を取ると、そこから睨み合いになる。

「その魂が叫んでる、あんたをとめろってな！！」
「ハハハ、残念だが俺の魂はこう叫んでる。……もっと力を」

俺の言葉を聞いたダンテは諦めたような悲しんでいるような表情になる。だがそれは俺も同じだ。

何故コイツはそんな簡単な事が分からないんだ。この世は力こそが全て。力が無くては自分の意志も通せないし……大事な人も守れない。

だから俺は求める。何を犠牲にしようと、例えば俺の体が俺以外の物になろうと求める。人を越え、悪魔を越え、魔帝を越え、伝説の^親父

魔剣士すらも超えた、この世で並ぶ者のいない絶対無比の“力”を……

「いつから違っただろうな……双子なのに」

「さあな。だが生憎と口で語れる事などたかが知れている」

これ以上語る事など無いという意味を込めて、俺は右肩のフォーエッジに手を掛ける。ダンテもリベリオンに手を掛ける。

そう、俺達は伝説の魔剣士の息子。言葉を発する以外で語るには剣が必要な不器用な血族。ならば俺達には始めから話し合いなど無意味だったんじゃないか、ダンテ？

「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「はあああああああ！！！！！！！！！！」

そして俺達は斬り合う。いつ、この狭間の世界が魔界に巻き込まれて消えるかも判らない状況で。己の全力を賭けて相手の考えを否定するために。

「ズアアッ！！」

「ふんッ！！」

ダンテが高速で接近した勢いを乗せたりベリオンの刺突を、俺も同速度で接近した勢いを乗せたフォーエッジの刺突をぶつける。互いの剣が火花を散らしながら逸れて頭を狙うが、僅かな動きでそれを交しつつ相手の後ろで体を止めた瞬間、振り返り様に剣を降るかぶり鍔迫り合いになる。

だが直ぐにダンテの力に押されて後ろに下がる。魔人になれるようになったのは、つい数時間前のはずなのに俺と同じぐらい、いや若干コイツの方が力は上のようなのだ。

だがあくまで腕力的な話だ。剣の腕では俺の方が遥かに上だし魔力の運用も俺の方が上手い。

離れたと同時にフォースエッジを仕舞うと左手に持った閻魔刀やまとを居合いの型で構え、神速の早さで三回振り抜く。そんな俺の構えを見たダンテが横に転がる。そこを空間を裂いた斬撃が襲い、水飛沫が飛ぶ。

“閻魔刀が斬るのは物では無く次元”と、この剣を貰う時親父が言っていた通り俺が今斬ったのは目の前の空間。その斬撃がダンテのいる次元まで届いた結果がさっきの一撃。

続けて二、三と斬撃がダンテを襲うが、横に転がってかわすとは何処からか巨大なバズーカを取り出して構える。それがリヴァイアサンが堕ちた場所にいた女が背負っていたバズーカだと気付いた時、ダンテは既に引き金を引いていた。

迫り来る爆熱を秘めた弾頭。だが長大な弾の分かやしやうい。アイツはそんなことも判らずに撃ってきたのか？

その考えに至った時、弾が眼前で爆発した。煙が俺の周りを覆い視界を奪う。このままではマズいと感じた俺は煙幕を割って出る事にした。が、普通に出てはアイツに追撃されかねないので俺の移動スキルを使う。

「Trick up」

瞬時に爆煙の上に移動して下を見るがダンテの影も形もない。

「何処に行った……」

「ここだ！バージル！！」

「何ッ!？」

声を辿って上を向くと、そこには真紅に閃くロングコートを纏って落下してくるダンテが……

「H e l m b r e a k e r ! !」

リベリオンを俺の頭目掛けて振り落とすダンテ。だがそのまま喰らうほど俺も甘くはない。

脳裏に思い描くは青き魔人。体に満ち始めるは俺の魔力。細胞の一つ一つが魔力にあてられ悪魔のそれにな変わっていく。そして完全に変化が終わるとダンテの剣を素手で受け止める。焦るダンテを余所に俺は体を捻って逆にダンテを地面に叩きつける。だが俺には確かに見えた。地面に当たる瞬間アイツの体を赤い魔力が覆ったのを。俺が着地すると同時に足下の水を割りながら赤い魔人となったダンテが突っ込んで来る。俺とダンテがぶつかり激しく水が飛ぶが、その瞬間吹き荒ぶ一歩も譲らない剣撃の嵐。宙を舞う水飛沫、下を走る水流すら断ち切るように剣がぶつかる。だがそこで奇妙な事が起きた。

急に目の前のダンテが消えたかと思うと全身に魔人化の回復速度を超えた斬撃を喰らい俺の魔人化が解ける。が、ダンテも荒い息を吐きながら魔人化を解いていた。

「ハアッ、ハアッ……なるほど……クイックシルバーか……ハアッ……」

「ハアッ、ハアッ……アンタを止めるなら……これぐらい、しないと……な……」

この塔に親父によって封じられていた上級悪魔の内にゲリュオンと言う悪魔がいたはず。奴の一番の特徴に魔力を消費して一定時間、自分以外の時の流れを遅くできる能力がある。どうやらダンテはゲリュオンを何らかの方法で屈服させてその能力を得たようだ。

だが魔人化しながらクイックシルバーを使うという事は膨大な魔力が必要になる。コイツは俺と戦いながらそんな事をやってのけた

のか？

「立てよ！アンタの実力はそんなもんじゃないだろ！！」

「……ぬうううううああああ！！！！」

ダンテに言われた事が勘に触ったので、動かない体を無理矢理動かして立ち上がると最後の力を振り絞って俺はフォースエッジを振り上げダンテに走り寄る。ダンテもリベリオンを横に構えて走る。

そして交差する刹那、煌めく銀光と共に俺の体をリベリオンが走る。一拍遅れて吹き出る血が水に流されて奈落へと落ちていく。その血と一緒に胸元からこぼれ落ちる赤い結晶――

「！！！！」

それを見た時、薄れかけていた俺の意識は急覚醒し、それを掴み取る。コレは無くしてはならない。スパイダの力の真の継承者が持つべき、亡き母さんがくれたアミュレット。

俺は足に活を入れてフラフラと立ち上がると後ろに下がりながらアミュレットを握り締める。

「これは俺の物だ。誰にも渡さない……」

「！？待て、バージル！！」

俺の異変に気づいたらしくダンテが近寄ろうとするが、閻魔刀を突き出して遮る。困惑の表情を浮かべるダンテに俺は話しかける。

「もうすぐ人界に通じる道が閉じる。お前も魔界に吞まれたくはなからう」

そう言っている間にも先程は気にならない程だった揺れが地鳴り

のような物が聞こえるまでになっていく。

「俺は此処に残る……親父が生まれ育ち愛した魔界に……」

すぐ後ろは魔界に通じる奈落。俺は喋りながら自然に後ろ歩くとそこから身を投げる。

ダンテが手を伸ばしてくる。だがこの体勢で掴めば二人共々魔界に堕ちる事になる。そうなたら誰が人界を守るんだ？お前はこっちに来るべきではない。

そうならないように俺は手にした閻魔刀でその手に浅く斬りつける。そして、そのまま重力に身を任せた。最後に目にしたのは俺に斬りつけられた手のひらを握りしめるアイツの姿だった……

『すまない、少しよろしいかな？』

これから行く魔界について考えていると突然俺の隣にモニターが現れて男が話しかけてくるが、今はそんな意味の分からん奴と話すほど元気が有るわけではないのであしらう事にする。

「黙れ、失せろ」

『おいおい随分な言い種じゃないか。もっと社交的な挨拶は出来ないものかね？』

ダンテならいざ知らず俺はベラベラ喋るのは好きではない。よって隣のコイツは無視する。

すると男が苦笑する。

『冷徹無比で冷静沈着、目的の為なら手段を選ばず仲間すら問答無用で斬り捨てる。常人ではそんな事は考えても実行できない。まさに悪魔のようー』

あまりベラベラと耳障りな事を列べるので閻魔刀で真っ二つにするが、すぐに新しいモニターが現れる。

『案外君も気が短いんだね。ならば単刀直入に言おう。……もつと力が欲しくないかい？』

「何……？」

この男は今“力が欲しいか”と聞いてきた。何故この男がそんな事を聞いてくるのかは知らないが、アミュレットが離れ離れになりフォースエッジもダンテが持っているのでは最早テメンニグルの封印を解くのは不可能に近い。

『私が考えた方法ならば恐らく膨大な魔力を手に入れられるはずなのだが……』

ならばこの男の口車に乗って力を手に入れるのもまた一興。俺が調べたテメンニグルの封印解除以外で強大な力を手にする方法が在るならば試してみたいし、駄目ならコイツを斬ってまた探すのみ。

「……いいだろう。ならばその話、詳しく聞かせろ」

『了解した』

男との通信が終わると落下する俺の目の前に次元の歪みが現れ、俺はそれに飲み込まれた。

辺りに眩い光が満ちると中から細身の刀を携え、青いロングコートを羽織った銀髪の男が現れた。

いきなり転送された男は危険がないか注意深く辺りを見回していると、手を叩きながら白衣を着た紫色の髪が特徴的な男とウーノがやって来る。

「来てすぐにその場の危険把握とは、君は全く以て戦士だね」
「貴様か。早く用件を言え。どうすれば俺は力を得られる？」

男がその場で氷のように冷たい目で白衣の男を見ていると白衣の男は笑って答える。

「ハハハ、君はせっかちだね。まずは自己紹介が先だろう？ 私はジェイル。ジェイル・スカリエッティだ。こちらは私の助手兼秘書の「ウーノです。以後よろしくお願い致します」
「……バージルだ……」

スカリエッティとウーノが名乗るとバージルもぶっきらぼうにそう呟く。

「では自己紹介も終わったところでー」
「その前に聞きたいことがある」

そう言うとバージルが手を翳す。するとバージルの真上と後ろか

ら驚愕の音がするが構わずに言う。

「そこにいる二人。今すぐ武装を解除しろ。さもなくばそれが全身を貫くぞ」

「クッ……」

「わかった。解除するからそちらも解除してくれ。我々に敵意はない」

声と共に上から紫色の髪の女性が、後ろからバージルと同じ銀髪の少女が現れる。だが二人の周りにはそれぞれを囲むように薄い水色に光る剣が配置されていた。

「そんな事知らん。敵意が有るか無いかは自分で決める。敵意が無いと分かればそれは消してやる」

バージルがそう言って二人から目を離すとスカリエッティに話を進行を促す。

「私は自分達の都合で命を弄び、自分達の為にしかそれを使おうとしない管理局に鉄槌を下そうと思っている。その為にこの子たち戦闘機人を生み出したのだ。だが、まだ戦闘機人のデータは揃わず、数も五番までしか稼動していない。だから君には来たる日に我々の援軍として参加してほしいのだ」

真剣な表情で話すスカリエッティとは逆に、バージルはつまらなそうな表情で彼の話を聞いている。

「今の話を聞く限りだと俺には全く関係ないように思えるんだが？」

自分のメリットがまるで無いのでバージルは乗り気ではなかった。

だが彼の言葉を聞いたスカリエッティは不敵な笑みを浮かべる。

「君のさっきまでいた世界と、この世界には魔力の概念はある。だがその実、中身は全くと言っていいほど違う。この世界の魔法ならば人の命を蘇らせる事も出来る。……無論君の求める力を得る事も可能だ」

力、と聞いてバージルが僅かに反応したのでスカリエッティは話を続ける。

「私はこれから更に戦闘機人を造り、悲願を達成する。君にはそれを手伝ってほしい。無論私の悲願が達成した暁には君の願いが叶うように全力で支援しよう。どうかね？君にとっても悪い話ではないはずだが？」

スカリエッティは怪しく笑ってそう言った。

「貴様の悲願とやらが叶うまでに何年かかる？」

スカリエッティの言っていた事が気になった俺は、どれぐらい時間があるのか聞いてみた。

するとスカリエッティはしばし考え込み顔を上げる。

「恐らく十年プラスマイナス一年ぐらいだろう」

……ハッキリ言って長すぎる。やることがあるこいつにしてみれば十年など一瞬だが俺にしてみれば長すぎる。さて、どうしたものか……

「その十年の間に何人揃えるつもりだ？」

ふと壁にあるポッドを見ていて閃いた俺が尋ねると、スカリエツティは「可能ならば」と前振りを付けて答える。

「ナンバー十二まで造るつもりだが……」

「俺を元いた世界に戻す事は出来るか？」

「それは問題ないが」

「ならば出来るかもしれない……最後だ。魔力を帯びた武器を戦闘機人と分子レベルで融合出来るか？」

「生態研究は私の十八番だからね、やれないこともないと思うが、一体どうしたんだい？」

スカリエツティが興味深そうに俺に聞いてくる。俺は少し考えて計画を纏めると俺を元いた世界に戻すように言う。

「ある程度出来たら言うが、上手くいけば戦闘機人と互角以上に渡り合える亜流品を造れるかもしれん。その為に俺を元いた世界に帰してほしいんだが」

俺が提案するとスカリエツティは、ほうと驚き頷く。

「わかった。面白そうだから手伝おう。では君を元の世界に戻すにさしあたって私からのプレゼントだ、ありがたく受け取ってくれ」

そう言うとうーノが俺にイヤホンを渡してくる。別に変わったと

ころの無い普通のイヤホンだと思っているとスカリエッティが補足してきた。

「それは次元を超えて私と会話できるイヤホンだ。この世界では当たり前前の技術だが君は初めてだろう？次元移動が必要になったら連絡してくれ、すぐ此処に戻そう。ではウーノ、やってくれ」
「わかりました」

スカリエッティに言われてウーノがキーを弄ると、来た時と同じように俺の体を光が包み意識が飛んだ。

バージルがいなくなるとトーレとチンクを囲んでいた薄い水色の剣も砕けて消えた。ようやく動けるようになって安心して二人にスカリエッティが労いの言葉をかける。

「トーレ、チンク。彼の見張りご苦労様」

「いえいえ、これも私達の仕事です」

「しかし随分な殺気でしたね？私も少しあてられて足が竦んでしまいました」

チンクが落ち込んだように（実際落ち込んでいるが）俯くのでスカリエッティは慰める。

「まあチンクは稼動してまだ間もない。トーレぐらいにならないとまだ難しいだろうね」

チンクが悔しそうに歯噛みしているとトーレが提案する。

「チンク、そんなに悔しかったら奴が帰ってきた時に模擬戦でもしたらどうだ？ 私達戦闘機人は戦えば戦うだけ強くなるんだ、今のうちにああいう奴とも戦っておいて損はないだろう？」

チンクがトーレの顔を見ると真面目な、しかし少し赤い表情でいた。恐らく姉らしい事など滅多にした事がなかったから内心とても恥ずかしいのだろう。

そんなトーレの思いを察したチンクは彼女に抱きつく小さく「ありがとうございます」と言って離れる。

トーレはいきなり抱きついてきた小さな妹に戸惑いながらもチンクが離れると、この場から歩いていく。

「チンク、何をしている。奴が帰ってくるまで私と模擬戦だ。早く来い！」

「！了解した、姉上！！」

トーレに続いてチンクもいなくなるとウーノがスカリエッティに尋ねる。

「しかしドクター。なぜあの男に嘘の目的を教えたんですか？」

スカリエッティはフツと笑うとウーノの問いに答える。

「彼は見た感じだと私のような科学者タイプの人間ではない。だから“聖王のゆりかご”や“レリック”と言っても対して興味は湧かなそうだったからね、ああいった戦闘目的を教えた方が乗り気になるかな、って思ったんだよ」

スカリエッツィの考えにウーノは納得する。

確かに彼は物事を深く考えて行動するように見えたが、その奥に巨大な闘争心を秘めているようにも見えた。

「それに、もし自分が騙されたと知って襲ってきても戦闘機人がある程度いれば事足りるだろう」

「しかしドクター？先程から彼の魔力を計っていたんですが………
…SSSオーバーです」

ウーノが言いにくそうにその事を伝える。少なくとも今彼に反逆されたら確実に全員殺される。戦闘向きがトーレとチンクだけではやはり心許ない。

「やはり追加の戦闘機人を造らなくては……」

「そうだね。では私達はクアットロの所に行こうか」

「はい」

そして二人もこの場からいなくなった。

エピソード、そしてプロローグへ（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

ハンターズバサラと全く違う書き方をしますがどうでしたか？
おもしろいと思ってくれたら嬉しいです

l F o u r a n d C a n c e l l a t i o n l 四つの魔具と抹殺指令（前

予想外に好感触で良かったです！

早速の感想もありがありがとうございました

でも明らかにもう一つの作品の更新が遅れてるんですよ

まあ愚痴はこれぐらいにして第二話、お楽しみください

1 Four and Cancellation 四つの魔具と抹殺指令

何もなかった路地裏。そこに突然光が溢れると中からバージルが現れた。しばしその場で辺りを見渡し自分の位置を確認するが何故かどこかで見た事がある建物ばかりだった。

『パトロール、こちらH Q。応答されたし、どーぞー』

「……貴様ふざけているのか？」

『いやいや、こちらは至って真面目だ。ただ、ちゃんと通じているか確かめたくてね。何分、通信環境が劣悪なもので』

バージルの隣に現れたモニター越しにスカリエッティが話している。この世界にくる前に彼が言っていた通信装置の確認をしているらしい。意表を突いたやり取りに出鼻を挫かれたバージルだが、気になっていた事を尋ねてみた。

「ところで俺の気のせいかも知れんが、此処には一度来た事がある気がするのだが？」

バージルの言葉を聞いたスカリエッティは満足そうに頷いて語る。

『それはそうさ。其処は君がさっきまでいた世界の少し後の世界だからね』

「つまり次元を越えるついでに時間も超えたわけか」

『そう言う事だ。私が改良した次元移動の機械は従来の機械が出来なかった事を簡単にやってのけたのだ。これも単に私が天才だからなせたのだよ』

「……そうか。こちらからは以上だ、通信を終わる」

自分に惚れるように言うスカリエッティにバージルは若干眉をかめるが気にせず強制的にモニターを閉じた。

通信が終わると辺りの地形を確かめるようにバージルは歩き出す。だがしばらく歩いて路地裏が入り組んだ迷路のように出来ている事に気が付くと、バージルは溜め息を吐いて目を閉じ神経を集中する。すると周りの音が全く聞こえなくなり、変わりに体に僅かな魔力を感じるようになった。そのままバージルは目を瞑りながら僅かに感じる魔力を頼りに路地裏を歩いていった。

「此処か……」

僅かにしか感じられなかった魔力を辿ってやってきたのは、夜になればとても目立ちそうなネオンサインが掲げられた石造りの建物。

「Devil May Cry」悪魔も泣き出すか、奴らしい名前だな」

ネオンサインを読んだバージルは自嘲気味に笑うとドアを開けて中に入る。

中に入ると目の前に机があり、左を見るとビリヤード台が置いてあった。壁に目をやればヘルププライドと呼ばれる悪魔が縫い付けられ、机の後ろには三本のヌンチャクに二本の双剣、紫色のギターに仄かに光る籠手が架けられていた。その内の一つに見覚えがある物があったのでバージルは光る籠手を手にはめた。

「ベオウルフか。無くしたと思っていたが、まさか奴が持っていたとはな。ではこれらはテメンニグルにいた悪魔のなれの果て。恐らくダンテの力に惚れて魔具になった、というところか……」

冷静にそう考えたバージルはベオウルフを着けたまま次の魔具に手を伸ばそうとした時、双剣の柄にある頭が光り喋り出した。

「盗人よ、我らを浅知恵から盗もうとするのはやめよ！」

「我ら兄弟ただの双剣に非ず！我らを使いたくば己が力を見せつけよ！」

「主を越える力を見せれば我ら兄弟！」

「貴様の力になろう！いざ……」

「「参る！！」」

そう言うのと双剣が動き出し、近くに赤色と青色の首無し悪魔が現れる。一方バージルはやる気の悪魔相手に仕方無いといった風に溜め息を吐くと闇魔刀を構えた。

俺が僅かに闇魔刀を構えると二体の悪魔は俺を挟むように別れてそれぞれ剣を構える。こんな狭い空間で果たしていつも通り動けるだろうか。俺がそんな事を考えていると赤い悪魔が動いた。

こちらに向かって走り込むと右手の剣を交差させるように振り抜く。俺がサイドステップで軽くかわすとそれを見越したように上から青い悪魔が左手の剣を突き刺してくる。それを更にバックステップでかわすとお返しとばかりに闇魔刀の素速い一閃を繰り出す。だ

が振り切ることは出来たが二体とも剣でガードしてきた。

とりあえずガードされるのを覚悟で閻魔刀の斬撃を赤い悪魔に集中させる。この悪魔のガードは確かに堅いが、たまにガード仕切れず崩れる。そこに威力を乗せた閻魔刀の斬撃を叩き込む。

俺の戦法は意外に正解だったらしく赤い悪魔の動きがだんだん鈍くなってきたのが分かる。だが赤い悪魔に集中するあまり青い悪魔を失念していた。

「ガッ……!!」

後ろから風を纏った斬り上げが背中に入り、吹き飛ばされる。風を纏っていた為剣の威力が上がっていたようで予想外に傷口から血が溢れている。だが前を見ると赤い悪魔の剣から三本の炎が放たれ俺に向かってくる。

赤い悪魔が放った炎は真っ直ぐにバールに迫りその身を喰らう。炎が燃え盛る中、青い悪魔が赤い悪魔に話しかける。

「終わったな……」

「あの男は主ほど力が無かったという事か、兄者？」

「この様子を見る限りそのようだ。さあまた眠るぞ」

「了解し……」

青い悪魔が最後まで言い終わる前に一陣の風が吹くと共に青い悪魔の体に鋭い光を放つ日本刀が生える。

「グアアアアッ！！！！！！」

持っていた剣を落とした青い悪魔は断末魔の悲鳴を上げて霧散した。いきなりの事に狼狽する赤い悪魔だったが殺気を感じて剣の上に構えるとそこに重い衝撃が走る。

「貴様ッ！我が炎に直接焼かれたのに何故生きている！？」

「……ああ、貴様の炎は確かに熱い。だが熱だろうと強大な力の前には何者も屈する」

そう言ってバージルは両手のベオウルフを構える。それを見た赤い悪魔は何が起きたかを悟った。

（なるほど、我が炎が当たる瞬間にその籠手でこちらより強い一撃を与えて威力を激減させたのだな）

「だが貴様だけが強くなると思うなよ？」

赤い悪魔が左手を上を翳すと、そこに床に落ちていた青い剣が収まり赤い悪魔が二刀流になる。

「我ら兄弟の真髄はこの二刀状態なり！もう貴様に勝ち目はない！」

「そうか、ならばこちらもし本気を出そう……C'mon」

バージルは右手を前に突き出すと指をクイクイと動かす。馬鹿にされて怒った赤い悪魔は走って両手の剣を交差させる。剣から発せられた炎は同じく発せられた風の力を受けて巨大な焰ほむらとなって襲う。

「Zodiac！！」

バージルは右手を引いて溜めた光の玉を真っ正面からそれにぶつ

ける。

焰はメラメラと燃え、光玉は全てを貫くように光って互いに潰し合うが、徐々に光玉が圧していき焰をかき消して赤い悪魔に迫る。

赤い悪魔は驚きながらも横に飛んで光玉をやり過ぎそうとする。そこに光玉が爆発した時に起きた煙を割ってバージルが上から蹴りを食らわせる。

「流星脚！」

蒼い流星となって繰り出されたバージルの蹴りは赤い悪魔に当たるが凄まじい威力が有ったはずにも関わらず、怯まず赤い悪魔は二刀の柄を合わせて頭上で振り回す。その回転速度に凄まじい竜巻が巻き起こりバージルを中心に閉じ込める。

竜巻の中の空気は急激に燃焼され、バージルは頭を押さえる。明らかに酸素が足りず、このままでは酸欠状態になると予想したバージルは一か八か竜巻の中心目掛けて右手を振り下ろす。

「Volcano!!」

バージルの打ったボルケイノは双剣に当たって吹き飛ばす。そして赤い悪魔が焦った隙についてバージルのスキル、ダークスレイヤーで一気に懐に入り込むと最大パワーでアッパーをがら空きの胴体にぶち込む。

「Real Impact!!!」

赤い悪魔の体ごと宙に持っていたバージルはさらにそこから床目掛けて両手で叩き付ける。轟音と共に床に叩きつけられた赤い悪魔の体はボウツと発火すると消えて無くなり、その場には剣だけが残った。バージルはその剣を拾い上げると柄にある二つの頭に話し

かける。

「これでお前たちは俺の物だ。文句はないな？」

バージルが問いかけると赤い悪魔が逆に聞いてきた。

「貴様、何者だ？ただの人間では我らに勝てるはずがない。まさか悪魔か？」

悪魔か？という問いにバージルは言い淀み無く答える。

「そうだ、俺は悪魔だ」

力を求めて自分は魔道に堕ちた。ならば自分は人間だ、と言う資格は無い。だが非力な人間を超えるためならば人外になるしかない。その考えがバージルに即答する事を許した。

二体の悪魔は互いに頷くとバージルに名前を聞いてくる。

「俺はバージル。いずれ伝説の魔剣士を超える男だ」

バージルが真剣に言うのと手に持った双剣以外にも机の後ろにかけてあるヌンチャクとギターから笑い声が聞こえてくる。バージルが怪訝な顔をしているとギターが紫電を放ちながら女性に変わっていく。赤いロングヘアーに上半身裸の女性がバージルに絡み付くように抱きつく耳元で囁く。

「坊やがスパイダを超えるって言ったかい？その根拠はあるのかい？彼は全ての悪魔を相手に孤軍奮闘し、さらには魔帝ムンドウスを封じたらしいじゃないか。まさか坊やも同じ事をしようってのかい？」

女性がおちよくるように言うのとバージルは真剣そのものといった表情で女性に呟く。

「それで親父に追い付ければ既にやっている」

この言葉に冷ややかに笑っていた四体の悪魔は笑うのを止めてバージルを見つめる。次にヌンチャクが薄い青色に輝きバージルの前に氷に覆われた三首の狼が上半身だけ現れる。

「貴様はあのスパイダの息子か。では貴様ならばスパイダを超えられるというのか？」

三首の狼が尋ねるとバージルは断言する。

「俺は親父を超える。その為に俺は力を求めている。その為にはお前たちの力がある。俺にお前たち上級悪魔の力を貸せ」

バージルの言葉に力強い意志を感じ取った四体は満足そうに頷くとバージルに手を翳す。

「我が名はアグニ！」

「我が名はルドラ！」

「「我らが炎風、主と共に！！」」

手に持った双剣、アグニとルドラがハモって名乗る。

「私はネヴァン。坊やの言葉楽しみにしてるよ！」

ネヴァンは再び紫電を放ちながら光球に変わるとバージルの背中

で紫のギターに変わって収まる。

「我が名はケルベロス！我が氷が貴様の剣となり盾となろう」

最後にケルベロスが青色の光となってバージルの懷に収まった。

「こちらバージル、応答しろスカリエッティ」

やる事が終わったバージルはスカリエッティから貰った機械を弄ってモニターを出す。するとすぐにスカリエッティが出てくるが、何かあったようで彼の奥ではウーノが忙しそうにキーを叩いて指示を出していた。

『ああ、君か。実は少々面倒くさい事が起きてね』

少々、とは言ったがバージルと通信しながらも休むことなくキーを叩くスカリエッティ。どうやら何か不具合が生じたようだ。

「スカリエッティ、何があった？」

バージルが聞くとスカリエッティは苦笑して答える。

『少し厄介なことに戦闘機人プラントの一つに地上本部の査察隊が入り込んでしまっただね、今トールとチンクが対処に追われている、と言ったところかな。出来れば早急に君の手も借りたいのだが』

「構わん。俺の用事も片付いた、すぐに転送しろ」

バージルが言い放つとスカリエッティがキーを弄ってバージルのプラントに転送した。

俺が目を開けるとスカリエッティとウーノ、眼鏡を架け髪を二つ結びにした少女が忙しそうにしていた。やはり事態はあまりよくないようだ。

「スカリエッティ、俺だ。俺は何をすればいい？」

「やっと来たか……。まあいい。今トーレが一番ゲートで、チンクが二番ゲートにいる」

スカリエッティの出したモニターにはN.O. 3とN.O. 5と表示されたマップ。その隣に二人のモニターがある。

二人とも杖から魔力弾を撃って攻撃する武装集団相手に余裕の立ち回りをしている。トーレには特にその傾向が見られる。敵の弾幕をかいくぐって一気に接近すると手足に付いたブレードのようなものでなぎ倒している。

「やるな……」

「トーレの事かい？ 彼女は戦いに費やした時間がチンクより長いから的確な判断が出来るんだ。それよりこれを見てほしい」

スカリエッティが俺に見せてきたモニターには群青色の髪をした女が倒れたピンク髪的女を庇って妙な機械と戦っていた。

「彼女達は深部に一番近かったから私が開発した機械を送り込んだんだが五十機でやっと一人倒したただけなんだ。あれは強いが造るのが難しくて数があまり無い」

「だから代わりに俺がコイツを始末しろって事か？」

スカリエッティは手を叩いて拍手する。皆まで言わずに理解した事に対してだろうが、あまり良い気分ではないな。こいつの人を見下した態度は。

「場所はどこだ？」

「此処を出てある程度歩いた第五ラボの近くにいます。細かいことはこちらで指示を出そう」

話が纏まると俺はきびすを返すとターゲットを目指して部屋を後にした。

「ハア、ハア……ハア、ハア……クッ！」

荒い呼吸を落ち着けるためその場に座り込んだのはいいものの、先程の機械達の攻撃によって傷付いた右腕がズキズキと痛み私は顔をしかめる。

自分の体術“シューティングアーツ”を使うのに問題は無いが早く応急処置をしないとそれも時間の問題である。だが通信しようにもジャミングが酷く、他の部隊や隊長達からも連絡がない。

今日の昼、ゼスト隊長とレジアス中将が話しているのを同僚のメガーヌと聞いていた私はその後「今夜発つ」というゼスト隊長の指示を受けて準備した。

だが待ち受けていたのは多くの生体ポッドとアンノウン……

二人で何とか切り抜けたが不意をつかれて。

「メガーヌ……私は何て謝ればいいの……」

隣で眠るように横になっているメガーヌ・アルピーノの頬を撫でていると私の頬を温かいものが伝って床に落ちる。私がコンビネーションをずらしてしまった為にメガーヌが私を庇って死んでしまった。確か彼女には一人娘がいたはず。私は彼女の娘も悲しませてしまふ。

ならば少しでも罪滅ぼしする為にこの事件は私の手で解決してみせる。

「メガーヌ、向こうで見ててね……。私絶対このプラントを使っている黒幕を捕まえてみせるからね」

「そうか、それは残念だったな。お前はここで死ぬぞ？」

「ッ!？」

私が顔を上げて前を見ると、銀髪をオールバックにした蒼い服が特徴的な男性がいた。さっきまでアンノウンがうようよいた場所に突然現れた彼に即座にシューティングアーツの構えをとるが、目の前の男性は構えもせずただ立っていた。

「こちらは管理局地上本部査察隊ナイト分隊副隊長のクイント・ナカジマです。貴方はここで何をしているのですか？」

私が尋ねるが、彼は氷のような冷たく鋭い視線で私を見つめている。あまりにも無言なので再び尋ねてみた。

「質問に答えてください！貴方の名前は？どうしてここにいるんですか？さっきのはどういう意味ですか!？」

私が矢継ぎ早に質問すると彼はウンザリした顔で私に話しかけてきた。

「少し落ち着け。そんな事ではー」

言い終わる前に彼は左手に持った剣を抜刀すると私が防御する間もなく振り切った。

「ー簡単に命を落とすぞ」

――後日談――

便利屋“Devil May Cry”を立ち上げてから数ヶ月経った。バージルとあの勘違いしたアホが起こしたあの事件は、これから何をすべきか俺に教えてくれた。

あの事件の時も名前をどうするか考えていた俺の店は表向きは便利屋、裏では悪魔の被害者の駆け込み屋となった。今日も合い言葉有りの依頼を受けて帰ってきたのだが……

「……チョイ待て。何でこんなに荒れてんだ？」

いつもの如く勢い良くドアを蹴り飛ばしたら我が目を疑ったぜ。なんせ所々焦げてるわ、一部床がへこんでるわ……

そして何より一番の変化は……

「おいエンツォ、お前俺の店に勝手に魔具引き取りに来たろ？……
……何？馬鹿言うんじゃないやねえ、俺んどこに置いてあった魔具が四つ無くなってんだよ！……お前なあ、コッチだって金が無えーんだよ。早くハカねえと……なるほどな。待ってろ、今テメエの尻に鉛弾ぶち込みに行つてやるよ！」

乱暴に受話器を叩きつけると、俺はきびすを返してスラム街に出て行った。

Contrariness 時には冷たく、時には甘く（前書き）

全然なのは達と絡めない……

ほんとにこの小説はなのはと絡めてんのか！と言われても不思議じゃないですな

でもそんな事は気にしたら負けさ！
という訳で第三話お楽しみください

Contrariness 時には冷たく、時には甘く

銀の太刀筋となって見えるほど速く鋭い一閃。その一閃が見えた時、私は何をされたのかまるで分からなかった。

だが不思議なことに体に痛みはなく、よく見ると纏っているバリアジャケットには血はおろか傷すら付いていなかった。その代わりに後ろからボンツという小さな爆発音がした。

すぐに後ろを向くとさっきのアンノウンが背後で真ん中から縦に真っ二つにされて壊れていた。

「だから言っただろう。命を落とすと……」

彼はいかにも退屈といった感じに言うが、私には彼が何をしたのか全然わからなかった。

彼はさっき確実に私を斬ったはず。なのに私に傷はなく、代わりに後ろにいたアンノウンが真っ二つ……

「貴方は一体……」

「俺の事はどうでもいい。それより質問に答えろ。お前の仲間は何人で、何故この場所が分かった？」

彼の不遜な態度と妙な刀を警戒した私は数歩下がると、次に何が起きてもいいようにシューティングアーツの構えをとって呼びかける。

「貴方を危険分子と見なし、身柄を拘束します」

命を助けたのにいきなり拘束すると言われたバージルだが、その表情は全く変わっていなかった。

先程、閻魔刀の次元斬で着ている服のスレスレを狙いつつ後ろにいる機械を真っ二つにしたバージルだが、クイントは全く分かっていなかったらしい。しかも彼の身柄を拘束すると言ってきた。

「お前は相当な馬鹿のようだな……」

小さく呟いて溜め息を吐くと鞘から閻魔刀を抜き、スッと刀身をクイントに向けて最終警告をする。

「三度は言わんぞ？ お前の部隊の数と此処に来れた理由を聞かせろ」

その問いにクイントは小さく笑って答える。

「貴方は敵の質問に素直に答えますか？」

「……なるほどな。ならば当初の目的を果たすまでだ」

突き出していた閻魔刀を鞘にしまうとバージルは腰を落として一気に距離を詰め、居合い切りをする。

横一線に振るわれた目にも留まらぬ斬撃を、クイントは刃が反射する光を頼りに後ろに下がってかわす。だがバージルは更に距離を詰めると上段から閻魔刀を振り下ろす。それも銀光を頼りに横に跳んでかわし更に一步下がる。

しかしたった二回攻撃をかわしただけで気付いてしまった。

(この人には……勝てない……)

バージルの闇魔刀をクイントがかわす。たったそれだけで解ってしまうほど彼の攻撃は力強く、速い。そして何よりも相手を全力で排除しようとする殺気が二つの要因を更に強くしている。

相手を確保しようとする事と相手を殺そうとする事。どちらが簡単かは言わずもがな。

だがクイントは負けられなかった。死んで逝った友のためにも必ず黒幕を捕まえる。そのためにはこの男を突破しなくてはならない。

「悪いですけど、負けるわけにはいかないのです!!」

自分を奮い立たせるため悟られないように虚勢を張ると、今度はクイントがバージルに突っ込む。

クイントは走って速さを付けた後、両足で踏み切ると空中で足を揃え、盛大なドロップキックをかます。てっきり両手に着いているガントレットで殴ってくると思っていたバージルは僅かに反応が遅れ、仕方なく両手を交差させてドロップキックを受け止める。

「ッ!!」

だが予想外に威力が乗っていたドロップキックにバージルは驚き、好機と見たクイントは床に落ちると、しゃがんだ体勢から胴体に向けて鋭い蹴りを食らわせる。

ドスツと鈍い音がしてバージルの体が少し後ろに下がるが、反撃とばかりにクイントの足を持って壁に投げつける。壁に当たったクイントは小さく呻くが、そこにいきなり現れたバージルが闇魔刀の柄を鳩尾にぶつけた。

「ゲホッ!ゲホッ、ゴホッ……」

胃にある物を全て吐き出そうとしてしまうが、中に何もなかった
ので代わりに胃液が逆流してくる。

威力の乗った柄の一撃はクイントの体力を大きく削った。だがま
だ彼女の目には火が灯っていた。その証拠にクイントは壁伝いにズ
ルズルと立ち上がると再び構える。

「ほう、立ち上がるか……」

「言っただでしょう？ 負けるわけにはいかないって……！！」

バージルの嘲りにクイントは不敵に笑うと右手を後ろに引き、

「リボルバーシュート！！」

掛け声と共に前に撃ち出す。紫色の魔力弾がバージル目掛けて襲
いかかる。だがそんな紫の魔力弾をバージルは手にした閻魔刀で斬
り捨てる。

しかしそれでも構わずガンガン撃ってくる。またそれを斬る、と
同じ事が繰り返される。

撃つ、斬る、撃つ、斬る、撃つ、斬る、撃つ、斬る、撃つ、斬る、
撃つ、斬る、撃つ、斬る、撃つ、斬る……

「ッー！！」

クイントが撃った魔力弾をバージルが斬り捨てる、その行為を繰
り返していると突然目の前にクイントが現れた。

（なるほど、単調な弾幕に紛れて接近してきたか……）

バージルが悠長に考えている間に懐に入り込んだクイントは右手

を素速く引くと、同じ速さでバージルの胴体を殴りつける。

ドンツとさっきよりも鈍い音がしてクイントの右手に衝撃が伝わる。

確実に極まった。そう思って後ろに下がろうとするが、彼女の右手は全く動かなかった。

「終わったと思ったか？」

胸に当てられた右手を左手で掴みながらバージルは、ただ真っ直ぐにクイントの瞳を覗きこむ^{のぞ}。彼の目を見ていて、飲み込まれそうな深い闇を視ている錯覚を覚えたクイントにバージルは低い声で囁きかける。

「だとしたらやはりお前は甘いな……」

そのままバージルは右手に持ち変えていた闇魔刀の柄を持って下に向ける。鞘はカランと乾いた音を立てて床に落ちるが、バージルは気にした様子もなくクイントの首に闇魔刀を添えて続ける。

「どうだ、敵に生殺与奪を握られた気分はー」

「ー死ぬのは恐いだろう？」

バージルがクイントを見ていて一番感じた事。大切な友が死んだ上に敵地で孤立無援、おまけに自分が殺そうとしているのに、どんなになろうと彼女の眼は死なない。

策があるわけでも、ましてや力が有るわけでもないのに彼女の眼の灯火は消えない。その理由が知りたい。もしかしたら自分の糧となるかもしれない。

だが帰ってきたのはバージルの予想していたのとは違った答えだった。

「ー死ぬのは恐いです。でも私には隊長やメガース、この人達がありますから」

左手でポケットからロケットを取り出したクイントは中身をバージルに見せて言った。

中にはクイントと白髪の男性、その前にクイントとよく似た少女が二人、朗らかに笑っていた。その写真を見ると、バージルの脳裏に懐かしき時代が蘇ってきた。

まだ小さかった頃の俺の日課はスクールから帰ってくると、すぐにダンテと一緒に庭で親父相手の剣の稽古だった。父親なのに、ましてや伝説の魔剣士と言われるまでに強かったはずなのに、全く手加減しようとせずに毎日バカスカぶっ叩かれてた。

お袋には剣ではなく勉強を教えられた。俺やダンテが全く解らない（ダンテは論外）問題をスラスラ解くほど頭が良く、俺達は偉大な親を持っていたと思う。

それ故に悪魔にお袋を殺された時ダンテは泣き叫び、俺はしばらくかなり荒んでいた……

「死ぬのが恐くない人はいません。でもだからこそ私は何度負けようと立ち上がれるんです」

嘘偽りなどない心からのクイントの言葉を聞いたバージルは床に落ちた鞘を拾うと右手の閻魔刀を納める。そして左手で保持していたクイントの右手を自分の頬に誘導すると自分で軽く殴る。

バージルの行動の意味が分からないクイント。そこでバージルは目を瞑って呟く。

「どうやら敵に殴られたせいで意識が無くなりかけているようだ。訳の分からない事を口走ってしまうかもしれない」

クイントが何かを言う前にバージルは言葉を紡ぐ。

「このまま真っ直ぐ行つた突き当たりをどちらに行つても敵がいるらしい。早く排除しなくてはな……」

バージルの言い回しに気が付いたクイントは驚いた顔をしてバージルを見ていた。バージルはヨロヨロとフラつき壁を背にして座り込む。

そんなバージルを見ていたクイントは彼を一瞥するとそのまま走つていった。

（俺もあいつの事を言えないな……）

去つて行くクイントを見送りながらバージルは自嘲気味に笑う。するとバージルの隣にモニターが現れスカリエッティが話しかけてくる。

『おかしいな。君にはそこにいた侵入者を排除するようにお願いしたはずだが？』

「……失敗した」

バージルの言葉を聞いたスカリエッティは愉快そうに笑う。

『ほう、それは大変だったね……顔を殴られて、さぞ痛かつたろう？』

核心を突いたようにニヤニヤするスカリエッティに、バージルはポーカーフェイスで答える。

「代わりの仕事をくれ」

『わかった。ならば……四番ゲートに魔導士が大量に集まっている。

質は低いが、いかにせん数が多くてね。私の発明品だけでは突破されそうなのだよ』

「道のりを教えろ、すぐに増援に行く」

立ち上がったバージルのモニターにスカリエッティが地図を転送する。地図にはNo. 3とNo. 5、離れた場所にSとNo. 1、No. 4と表示されたアイコンがあった。

次に四番ゲートを確認すると幸いな事に近くにあったので、バージルはゆったりとした歩調で歩いていった。

「撃てえー!!！」

四番ゲート付近ではスカリエッティの開発した機械と地上本部の魔導士が競り合っていた。

機械は特殊なバリアを展開して魔導士の力を弱めているが、それでも数人で集中放火すれば倒せないほどではない。その証拠にゲートを守っている機械はあと二十機にも満たない。

「散らばるなー！集中放火で確実に倒していくぞー!!！」

「おおおお!!！」

隊長らしき男が指揮を取って味方を鼓舞すると、それに応えるように魔力の弾幕が厚くなる。その弾幕の前に連続して五機が壊れて

動かなくなる。

このままいけば確実に圧しきれる。魔導士達がそう思った時、突如として残りの機体が爆発して動かなくなる。そして困惑する魔導士達の前に闇の魔剣士が立ちはだかる。

「その君！危険だから今すぐ此方に気なさい！」

隊長が呼びかけるが、バージルがそんな事を聞くはずもなく彼は右手を上上げる。すると彼の周りに何かを待っているかのように薄い水色の剣が配置される。

その行動に危機感を感じた隊長は「全員構えろ！！」と呼びかける。

だがそんな事は関係ない。バージルは断頭台の刃のように右手を振り下ろした。

「急襲幻影剣―Blistering Swords―」

バージルの言葉を皮切りに待機していた幻影剣は一斉に魔導士の団に突き刺さる。辺りには手や足を刺されて呻く声が聞こえるが、それに負けじと魔導士達も魔力弾を撃ってくる。

だがそんなぬるい弾が当たるバージルではない。その場で闇魔刀を構えると何度も抜刀して目の前の空間を滅多斬りにする。

「次元斬―Judgement Cut―……」

そして目の前の空間の亀裂はその奥、魔導士達のいる所で爆ぜた。急襲幻影剣で既に半数以上が戦闘不能になった団に次元斬が襲いかかる。

「うわあああ！腕があああ！！」

「俺の足が、俺の足がああ!!」

次元斬は魔導士達の体を斬りつけ次々に手や足を落としていく。幻影剣と次元斬の嵐が荒れ狂い、あまりの地獄絵図に逃げ出そうとした魔導士は即座にピンポイントの次元斬によってその命を吹き散らす。

あっという間に隊長らしき男を残して部隊は壊滅した。男は、あまりのありえなさに呆けた顔で周りに臥せる部下を見渡し、声を張り上げる。

「き、君は一体何なんだ!?!何をしたんだ!?!」

そんな男を一瞥すると突然バージルが消えて男の後ろに現れた。

「貴様程度では何一つ分かるまい。現に今も気付いていないではないか……」

「何だと……」

男が振り返るとちょうどバージルが刀身を鞘に納めるところだった。

徐々に銀に光る刀身が鞘に吸い込まれるように滑っていき、全てが納まると男は右肩から左に向けて袈裟掛けに血を吹き出して倒れた。

「T o o e a s y . . .」

つまらないと言った感じで溜め息を吐くとスカリエッティに通信を入れる。

しばらくは何もなかったが、すぐにモニターにウーノが現れる。だがその表情はさっき見た冷静なものではなく、焦りを感じさせる

ものだった。

「ああ、貴方ですか。どうやら任務は終わったようですね」

「……何があった？俺のイメージとずいぶん違うんだが？」

バージルが指摘するとウーノは自分の顔を触る。どうやら表情が顔に出ていたのが気に食わなかったらしい。だがすぐに気を取り直したらしく、そうなった原因を話す。

「……No. 5、チンクがSランクの騎士と戦いました」

「で、結果は？」

バージルの言葉にウーノは顔を俯かせて答える。

「独りでフルパワーの状態相手に戦い、見事に勝ちました。……代償に右目を失いましたが……」

ウーノはとても残念そうに呟いた。

バージルとしても、その結果には不満だったらしくウーノに愚痴る。

「Sランクの騎士、と言うのがどれほどの強さを持っていたのかは知らんが勝ったとしても体の一部を失うならば、その戦いは無駄だったな。しかも目ならばなおさらだ」

冷徹に言うバージルの言葉にウーノは静かに怒っていた。

確かに妹は片目になってしまったが、これで自分達の有用性が証明された。チンクが片目になったしまった事に意味はあるのだ。なのにそれを無駄だったの言葉で片付けるとは……。

「……チンクはトーレと一緒にいます。場所はモニターを見れば分かります」

それだけ言うと通信が強制的に閉じられた。だがバージルはそれを気にした様子もなくモニターのNo. 5目指して歩いていった。

バージルがNo. 5とNo. 3と表示された場所に着くと辺りは凄まじい破壊の跡でいっぱいだった。

床や壁は黒く焦げ爆撃でもあったかのように抉れている。所々爆発とは別の、刃物で切り裂いた所もある。

バージルがよくここまで壊したものだ、と感心しながら見渡していると銀色の髪が目に入った。近付いてみると茶髪をツォーテールにした女性とトーレ、そして壁にもたれるようにして座り込んでいるチンクがいた。

三人もバージルに気付いたらしく、トーレが両手のインパルスブレードを構える。チンクも構えようとするが顔をしかめて小さく呻いた。

「貴様！ 一体何をしにきた？！」

トーレが一步前にでて怒鳴るが、バージルは気にした様子もなくチンクに歩み寄る。

「Sランクの騎士を倒したらしいな」

「代わりに眼を失ってしまったがな……」

バージルの問いにチンクは自嘲気味に答えた。右目を失ったのが精神的にきているようで、その顔には憂いが見える。

するとバージルが更にチンクに近寄って彼女に手を伸ばす。だがそこでトーレが動いた。バージルの左手を掴むと空いた手を彼の首に当てる。

「私の愚妹に何をする気だ？返答次第では……」

グツと両手の力を込めてきたトーレに目を向けるとバージルはダークスレイヤーのスキルでチンクの隣に立つ。

掴んでいた手からすり抜けるように消えたバージルを見てトーレは驚いているが、バージルは無視してチンクの側にしゃがみ込む。

「な、何だ？」

彼の行動の意図が分からずチンクが困惑していると、バージルは懷からハンカチを取り出してチンクの右目に当て、更にそのままチンクを抱えて立ち上がる。

その抱き方が所謂お姫様だっこだと解り始めるとチンクは顔が熱くなっていくのを感じた。

「な、何をしているんだ！？こここんな……お姫様だっこなど……」

最後の方はごにごによと小さくなってしまったが、チンクはバージルの顔を直視することが出来ず視線を下にしてしまう。

「先に戻っているぞ……」

バージルはそれだけ言うのとチンクを連れてそのまま歩いていった。その後ろ姿を見ながらトーレは神妙な顔で、ツーテールの女性クアットロはクスクスと笑っていた。

ドクターのラボに戻る道すがら私はとても困惑していた。

初めて会った時はいきなり殺されかけた。……まあ、あれはこちらが先に構えていたからおあいこだが。

しかし二回目はどうだろう？ 急に来たと思ったらハンカチを貸してくるわ、いきなり……その……お姫様だっこをしてくるわ……！！

「もう死にたい……」

「何か言ったか？」

「い、いや！ 別に何も……」

小さく呟いたはずだが聞こえていたらしく彼が私に視線を落とす。そういえば私はまだ彼の名前を知らなかった。

「あ、あの……」

「何だ？」

「何でもない……」

勇気を出して聞こうとしたが再び無言の空間になってしまった。

……ダメだ。彼と話そうとすると頭の中がいっぱいになってしまふ。何なんだ、この気持ちは！！

心臓が普段は考えられないぐらいバクバクしている。さっきの騎

士と戦っていてもここまで緊張はしなかったのに。

深呼吸して気持ちを落ち着けようとしたが、ふと視線を上にとげると彼の顔で釘付けになってしまう。彫りの深い整った顔立ち、全てを射抜くほど鋭く蒼い眼、そして自分と同じ銀色の柔らかそうな髪。

（なぜだ……コイツから目が離せない……）

だがどうやら凝視しすぎたらしく彼が再び私に尋ねてくる。

「さっきから俺の顔を見ているが……どうした？」

だが今回は意図せずにスルリと言葉が漏れた。

「名前……」

「何？」

「名前……教えてくれないか」

彼の怪訝な顔を見ていて、自分が何を言ったのか気付いた私は慌てて全否定する。

「ち、違う！！何でもない！今のは何でもー」

「バージルだ」

だが彼が予想外に簡単に答えてくれたので私も拍子抜けしてしまった。だが彼の名前を知ったと解ってくると、体中に得も知れぬ温かさが広がった。

今なら死んでもいい。そんな気持ちになっていると彼が急に足を止めた。何かあるかと周りを見ると多くの魔導士の遺体が転がっていた。

そしてその中の一つに彼は近付いていった。

バージルが近付いた魔導士の遺体の一つは群青色の髪をしていた。それを見てバージルはそれが誰か予想できてしまった。そして近寄ってみるとそれが確信になった。

「やはりな……」

バージルがしゃがみ込んでチンクを下ろすと、その魔導士の上半身を起こす。その魔導士は死んでいるにも関わらず穏やかな顔で目を瞑っていた。

それはバージルが一度命を与えた魔導士、クイントだった。あの時は確かに疲労していたが魔力はまだあった。しかし今こうして息を引き取っている。

ではやはりクイントは自分の甘さ故に命を落としたのだろう。

「……だから甘いと言ったんだ」

「な、何がだ？」

「いや……何でもない。気にするな」

そのまま立ち上がろうとするとクイントの胸元からロケットが滑り落ちて蓋が開いた。中で幸せそうに笑う四人。この四人はもうこうやって笑うことはないのだろうと想像してバージルはそのロケットを懐のポケットに滑り込ませた。

その様子を見ていたチンクは不思議そうにバージルを見ていたが、

すぐにまたお姫様だっこされてスカリエッティのラボに向かって行った。

「四番ゲートの魔導師殲滅任務、完了した」

戻ってくるなりバージルはそう言い放つと抱いていたチンクを優しく下ろしてスカリエッティに向き直る。

その報告を聞いたスカリエッティは満足気に頷いた。

「ご苦労様。チンク、よく頑張ってくれたね。しばらくゆっくりするといい」

「はい。ありがとうございます」

バージルから下ろされたチンクはスカリエッティにぺこりと挨拶をする。と一度だけバージルを見やった後ラボを後にした。そんなチンクを嬉しそうに見るとスカリエッティがバージルに握手を求めた。

「ありがとう。君のおかげで彼女は誰かを慕う心というものを理解しだした」

「いや俺にそんなつもりは無いのだが……。それより何故今回のような事が起きたんだ？」

いきなり管理局の査察という名の蹂躪が始まった事にバージルは初めから疑問を抱いていた。

この男の事だから何らかのプロテクトは張っていると会って間も

ないバージルは思っていたのだが、見事に今回の事態に発展してしまった。

この中に内通者がいるのでは、と考えてはみたが彼女達はスカリエッティの事を親のように慕っているためそんな事はしないとすぐに否定できた。

考えども答えが出なかったのだがスカリエッティはケロッと答えた。

「その事なんだが……実は管理局が査察に来ることは此方で既知だったのだよ」

「何？」

「管理局からの情報提供としてレジアス・ゲイズという男がいるんだが、その男から近々部下達が此方に来るかもしれないと示唆されていたのだよ。……こんなに早いとは予想していなかったがね」

自分の知らない事が水面下で動いていたことに少なからず驚くバージルだったが、すぐにスカリエッティを睨み付けた。

来ると分かっていたのなら、この男は予め何らかの対策を打つべきだったのに何もしなかった。結果貴重な人材に傷を付けてしまったのだ、これは果たして正しい判断だったのだろうか？

そのバージルに睨まれたスカリエッティはおどけて反論する。

「君が怒っているのだとしたらそれは筋だよ？ 私だって貴重な戦力をわざわざ危険に晒したりはしないよ。運悪くSランク騎士が部隊にいた。ただそれだけのことだよ」

確かにスカリエッティの反論は勿論だが、それでも納得がいかない自分はやはりまだ冷徹になりきれしていないのだろうか、と考えていると逆に彼がバージルに尋ねた。

「君の方こそ何で殺してほしいと言ったのに彼女は生きていたんだい？ 私は確かに殺してほしいと言ったはずだが？」

スカリエッティに確信を突かれたバージルは少し黙考した後、徐おもむろに口を開いた。

「純粹に何処まで行けるか興味がわいたからだ」

「なるほど……まさかとは思うが情けを掛けた、なんて事は無いだろうね？」

スカリエッティの言葉にバージルは自嘲して小さく呟く。

「もしかしたら……そうかもしれないな」

「何だって？」

「いや何でもない」

この話はもうしないという意思を込めてスカリエッティを睨んでいると彼は思い出したようにバージルに話しかけた。

「そういえば君は出ていってから何をしていたんだい？」

「？ という意味だ？」

「君が出ていってから戻ってくるまでに此方では三日もかかっていただんだが」

スカリエッティの言葉にバージルは顔をしかめた。

彼が元の世界に行ってから魔具を取ってくるまでにそんなに時間はかからなかったはず。

ならば何か時間的な狂いが生じたのかもしれない。

「特に何もしていない。少し出歩いて戻ってきただけだ」

「そうか……では一体何がー」
「ドクター！侵入者です！」

何故こうなったのかスカリエッティが考えようとした矢先にウーノが緊迫した声を上げる。

バージルとスカリエッティはすぐにウーノの下に走るとモニターを覗き込む。

そこには黒い鎧に身を包み、同じく黒いマントを靡かせながら手にした大剣で防衛システムを斬り伏せる人の姿が映し出されていた。

「なんだ……こいつは……」

「推定魔力値SSランク……恐らく管理局とは関係のないものだと思います」

バージルの疑問に忙しなく指を動かしながらウーノが答える。

確かに管理局に關係のある人物だったらさっきの戦闘に参加していても不思議ではない。

だが何であれ、このままではこの人物がすぐ近くの部屋に行きつく事に違いは無い。そしてそこには現在待機中のトーレやチンク、まだ稼動していない戦闘機人がいる。

「バージル、すぐにこいつを止めにー」

スカリエッティが隣にいるはずのバージルに話しかけると彼は既にその場にいなかった。

Contrariness 時には冷たく、時には甘く（後書き）

タイトルの意味がさっぱりわかりませんね

書いている僕自身も分かりません（おい）

しかも今回出てきた人は明らかに時世が……

もう指の動くままに頑張りますか！

この小説を読んで少しでも時間を潰せたら幸いです

1 Sequence to Encounter 連なる時間、邂逅の蒼と青（前

放置乙！ 危うく1ヶ月放置になるところだった。危ない危ない

さて、今回でとりあえず過去編は無理やり一区切りつけて、現代も
といStSに辿り着きます。詳しい時世は次回に回しましょう。

それでは第四話、お楽しみください！

Sequence to Encounter 連なる時間、邂逅の蒼と青

ドクターに言われて戻った私は何時もの待機場所に直行した。

この部屋にはまだ稼動していない、将来妹になるであろう戦闘機人が何体も生体ポッドに入れられて安置されている。そして私は一人の時に毎回行っていることがある。

「気分はどうだ？ 毎日生体ポッドの中を漂っていてつまらないだろう？」

手近にあったポッドに今日もまた話しかける。姉上達にはやめた方がいいと言われているが返答がないとはいえ、こうして独白しているだけで、その日あった出来事を整理できるから今までこうしてきた。

「なあ、私はどうしてしまっただろうな……」

目の前にあるポッドの中には赤いショートヘアーの戦闘機人がいる。そのポッドに手を添えて私は目を閉じる。

頭の中には今日闘った数々の魔導師、Sランクの騎士の姿、姉上達、バージル……。

「うああああ！！ 違う！ 私は奴なんて気にならない！！」

頭をポッドにガンガン当てて落ち着こうとしたが、その甲斐なく、ただ頭が痛くなっただけだった。

「ううつ、痛い……」

「何をしているんだ……？」

私が呻いてうずくまっていると、近くから声が聞こえたので頭を上げてみれば、そこにはトーレ姉上がいた。

「い、いや、別になんでもないです」

さっきまでの言動を見られたと思うと恥ずかしくて顔から火を噴きそうだ。

トーレ姉上も気になったように私に尋ねてくる。

「チンク貴様、何があった？いつもよりおかしいぞ？」

トーレ姉上は私をよく見ていたらしくすぐに気が付いたようだが私とて何故このような言動をとっているのかさっぱり解らない。ただバージルの事を考えると……。

「うああああ!!」

「チンク!？」

また恥ずかしくなってきた頭を打つ。トーレ姉上はきっと私を好奇と驚愕の目で見ていることだろう。

「チ、チンク……本当に大丈夫か？」

「わかりません……ただバージルの事を考えるとボーッとなってポワッとなって」

姉上が困惑している。いや言っている私も訳が分からない。

この感情のせいで困惑しているが、不思議と嫌な気はしない。

「本当に何なんだろうな……」

溜め息を吐いて呆れていると通信が入った。
出てみると緊迫した表情のウーノ姉上だった。

「どうしたんですかウーノ姉上？」

「トーレ、チンク。今すぐそこから離れなさい！」

「ウーノ、何かあったのですか？」

「いいから早く逃げなさい！でないとー」

トーレ姉上がウーノ姉上に尋ねるが、ウーノ姉上は忙しそうにキ
ーを叩きながら声を荒げる。

だが突然視界の端から何かが接近してきた。とっさに気付いて横
に転がり来た方を見ると、そこには黒い鎧に身を包み同色のマント
を靡かせて佇む人物がいた。

「間に合わなかった……」

ウーノ姉上が息を飲んでいいる。どうやら相当まずい相手のようだ。
トーレ姉上も私も武器を構えて応戦の準備をする。

「貴様、何者だ！！」

チンクが言い放った刹那、黒い人物ーネロ・アンジェロは右手
に持った大剣の切っ先を彼女に向け突きを繰り出す。

速く鋭い突きは的確にチンクの心臓を狙ってきたが、間一髪しやがむことで回避した。そしてその体制から手に固有武装スティンガーを持つと、がら空きの胴めがけて数本投擲する。

乾いた音を立てて数本が弾かれ数本が鎧の隙間に刺さるが、ネロ・アンジェロは気にした様子もなく手にした大剣を真下に向けて振り下ろす。それを後ろに跳躍してかわすとチンクは能力を使う。

「IS、ランブルデトネイター！」

チンクが叫んだ瞬間、先程彼女が投擲したスティンガーが次々に爆発し、ネロ・アンジェロを包み込む。

爆風が辺りを駆け抜け、チンクの髪を撫でる。ランブルデトネイターによって炸裂した爆発は完全に敵を吹き飛ばした。チンクがそう思った時トーレの声が響いた。

「チンク、後ろだ！！」

「なっ！？」

驚いてチンクが後ろを向くのと大剣がチンクに振り下ろされるのは殆ど同時だった。

危うく大剣に真っ二つにされるところをギリギリで両手に持ったスティンガーで受けるが、

「ぐああっ！！」

ネロ・アンジェロの剣圧に堪えきれずスティンガーが粉々になり、返す刀で横薙に振るわれる。避けようとするが完全に避けきれずボディースーツに線が入る。

（くっ、速い。だがそれ以上に……）

そう言ってチンクは自分の右目に触れる。そこには先程着けた黒い眼帯があった。

S級の騎士にやられてからまだ間もないにも関わらずチンクは予想以上に動いている。だがやはり片目では距離感がわかりにくいため、前より僅かに反応速度が落ちている。そこを狙われては流石にキツイ。

何より相手の実力は未知数。どんな手札があるのかも分からないのでは話にならない。

だが悠長に待ってくれるほど相手は優しくはなかった。

「ハッ！」

急に青色の淡い光に包まれて消えたかと思うとチンクの頭上に現れて気合いの声とともに落下してくる。

「クッ……」

横によけて逃げるが、執拗に消えては斬り消えては斬りのヒットアンドアウェイで体力ばかり削られていく。

しかも慣れない片目で命を賭けた闘いで疲れが溜まったのか、急に左目も霞が掛かったように見にくくなった。

「くそ、こんな時に！」

チンクが左目を擦って目を開けると前にはネロ・アンジェロはいなく、後ろから痛いほどの殺気が感じられた。

（あ……これは詰んだ……）

不意に感じられた死の予感。それは逃げる事を許さないように彼女の感覚を絡めとっていった。

そして接近する死の気配。チンクに防ぎようはなく、そのまま体が袈裟掛けに真つ二つ……になるはずだった。

気が付くとチンクの視界には大剣を床に打ちつけたネロ・アンジエロが目に入った。

「IS、ライドインパルス」

チンクを小脇に抱えたトーレは彼女を床におろすとネロ・アンジエロを睨みつける。

「トーレ姉上、申し訳ー」

「チンク。貴様は黙ってろ」

チンクが礼を言おうとしたが、トーレはそれを一蹴すると両手の固有武装インパルスブレードを構えて呟く。

「貴様は片目になってまだ時間が経っていない。ここは私に任せて休んでいろ」

「しかしトーレ姉上！一人では危険です！私も加勢しなくては……」

「舐めるなよ？それでも実戦経験は一番豊富なんだからな。もう一度言う。貴様は黙って休んでいろ」

トーレの有無を言わさない口調にチンクは黙り込み、それを確認したトーレはネロ・アンジエロの前まで歩み寄る。

「貴様に言葉がわかるか知らんが、わざわざ待っていてくれるとは余程の自信があるようだな。だがあまり私たちを舐めるなよ……」

戦闘機人

トーレが低い声で言った。そして次の瞬間、彼女は一瞬で間合いを詰めると右手のインパルスブレードを振り上げる。

刃はネロ・アンジェロの鎧に縦一閃の傷をつけ、驚いたのかネロ・アンジェロは後ろに消えてトーレの様子を見だした。

しかし、そこで手を止めるトーレではない。再びライドインパルスを発動、今度は後ろに回り込んで斬りかかる。刃が背中を切り裂くーはずだった。

ネロ・アンジェロは後ろも見ないで、ただ手にした大剣を後ろに回して攻撃を受け止め、そのまま反転と同時に横薙に振るう。

「はあああ!!!」

迫り来る大剣に真っ向からぶつかり力勝負となる。

だが見た目通り力が強くトーレはだんだん押されていく。

「くっ、ライドインパルス!!!」

パワー勝負を捨ててスピード勝負にしようと後ろに回り込み斬ろうとするが、ネロ・アンジェロも一瞬で消えるとトーレの後ろに張り付いてくる。そこからはスピード勝負になった。

トーレのIS、ライドインパルスは速さを底上げするスキル。

ネロ・アンジェロの移動法、ダークスレイヤーは一瞬で移動する事が出来るスキル。

どちらも移動系スキルだがネロ・アンジェロの方が若干有利だった。それでも負けずに二人は高速の闘いを繰り広げる。

トーレに休んでいると言われたが、サポートぐらいはしようと考えていたチンクだったが、闘いが速すぎるため手の出しようがなかった。

お互いが高速を前提に攻撃や防御、回避が行われるのでチンクは指をくわえて見ているしかなかった。

(トーレ姉上、頑張ってください……！)

チンクがそう願うが現実は逆を起こした。

「ぐはっ……」

トーレは壁に叩きつけられ力無く崩れ落ちた。

荒い息のまま上を向けば、手に黒い魔力を溜めるネロ・アンジェロ。恐らくこの距離で今の魔力を食らえば即死するだろう。

(まさかここまでとは……コイツは何だったんだろうな……)

自嘲気味に笑ったのを合図にネロ・アンジェロは魔力を解き放った。

ネロ・アンジェロほどの腕の持ち主ならば外そうとしても外しやうがない距離での魔力弾が放たれるが、その魔力弾はいとも簡単に外された。いや正確には一瞬でただの魔力の塊になるまでバラバラにされていた。

ネロ・アンジェロは怪訝そうに目の前のトーレから視線を外して周りを見ようとした時、突然魔力によって強化されていた黒鎧に鋭い裂傷が走り、そこから血の代わりの黒い魔力が溢れ出す。

「ウオオオオオオ」

ネロ・アンジェロは驚愕の声を上げて後ろに瞬間移動して今いた場所を視界に収める。

そこには座り込むトーレと、その隣に愛すべき魔刀を手には握る蒼魔の剣士。

「……どうやら、少し間に合わなかったようだな」

静かに呟いた彼は鋭い眼で、対峙する黒鎧の剣士を睨みつける。そこに一分の温情も無く、在るのはひたすらに相手を斬り捨てる意志のみだった。

「遅くなったな。立てるか？」

「アイツにも言ったがあまり私たちを舐めるな」

体はネロ・アンジェロに向けたまま目だけをトーレに向けて話しかけるバージルに、トーレは壁を伝って立ち上がる。そこには自分の意地を通したいという思いが感じられた。

「そうか。ならばもう尋ねん。それより早く離れろ」

その言葉の後に彼女はバージルから発せられる、肌に突き刺さり内側を切り刻むような殺気を感じて何も言えなくなった。

ネロ・アンジェロもそれを感じ取ったのか、纏う雰囲気は急激に変わっていった。侮っていた相手が倒すべき対象と分かったのだろう。大剣を油断無く構え、かろうじて見える目からは勝利への渴望は感じられず、ただ平然と敵を倒す殺人機械のように思える。

張り詰めた両者の間の空気が、急激に膨張していく。少しの異変で体が即座に動けるように二人とも脱力する。

そして何の前触れもなく二人は消え、突如として火花と甲高い金属音の二重奏が始まる。

右に火花が散ったと思いきや金属音は左上から鳴り響く。それと同時に幻影剣が飛び交い始める。

互いに高速で動き回り息の根を止めようと剣を振るう。

そして突然二人が現れると今度は消えないで走り込んで剣を動かす。

二人の剣は縦横無尽に動き回り、それぞれが別の動きで相手の動きを止める。それでも止まない剣戟のコンサート。そのコンサートの音はだんだんと激しさを含んでいく。

鏑迫り合いになり、互いの息がかかる距離にまで相手が近くにいる。バージルからは相手の真意が見えない。

しかし闘っていて彼は妙な感覚に陥った。

（この剣の型、どこかで見たことが……）

それは本当に些細な違和感。しかしバージルの心を揺らすには十分だった。

そんな彼の気持ちを知らずにネロ・アンジェロは戦い方を変えてきた。

魔力によって底上げされた力によるごり押しで鏑迫り合いの膠着状態から脱すると、剣を床に突き刺してバージルに近寄り左のボディブローを放つ。威力の乗ったボディブローが迫る。

危機感を感じたバージルはトーレを抱きかかえるとチンクのいる所まで下がって彼女を下ろす。

「おい！アイツの攻撃方法が変わったが大丈夫なのか？」

背の低いチンクに肩を預けるようにして立つトーレはネロ・アンジェロを見ながら尋ねる。確かに相手の攻撃方法は変わった。しかしその事はバージルにはさして意味はない。

それを裏付けるように彼は小さく、だがニヒルに笑うと閻魔刀を床に置いてファイティングポーズの構えをする。

「相手が剣に飽きて肉弾戦で闘いたいと言うなら此方も同じ土俵で蹴散らしてやる」

そう言う彼の手に淡い光が集うと、それは暴力的な光を伴って獣の頭部と脚部を象る武器に変わった。バージルはその場でトントんと爪先で床を叩いて体を慣れさせている。

そして準備が出来たのか下半身に力を込めると一気に爆発させてネロ・アンジェロに肉迫する。

バージルの右ストレートとネロ・アンジェロの右ストレートが激突し激しい風を生む。拳に宿る暴力的な光と闇は互いに消しあい相手を潰そうと躍起になる。

次も二人はほぼ同じタイミングで左の回し蹴りを繰り出す。衝撃が足を通して体に伝わるが、互いにそれを無視して始まる殴る蹴るの応酬。バージルの魔力はベオウルフを、ネロ・アンジェロの魔力は鎧を通してその力を遺憾なく発揮している。

体捌きは流麗に。殴打は激烈に。本人にしか解らない僅かな攻撃のパターンがそれを助長するが共に決定打にならない。

（何故だ？この動きは俺が死ぬ気で会得した“俺だけの”動きのはず。それを何故こいつが使える……）

相手が自分と同じ攻撃というのはなかなか精神をすり減らす。それが隙を生んだ。

「ハアッ」

ボールを蹴るような要領でネロ・アンジェロの爪先がバージルの腹にめり込む。

「！！ ゲッホ、ゴホッ」

魔力を込めた会心の蹴りは見事に腹に入りバージルは床に手をつけて痛みに堪える。彼の経験上、今のでアバラの何本かはイッた。

立ち上がろうとするが体が言う事を聞かない。

（これは、マズいな……）

無様に手をつくバージルに向けてネロ・アンジェロは魔力弾を形成し、その手を彼に翳す。このまま解放すれば確実にバージルの頭は吹き飛ぶ。闇魔刀はチンクとトーレの下にある。

かなり危険な状態。しかし彼は諦めない。諦めるという事は即ち彼の母が殺された時の無力さを再び味合わなくてはならなくなる。そんな事は嫌だ。

（俺は決めたんだ。もう二度とあの無力さに、あの悲しみに囚われないと……!!）

例えば体が負けて果てようと魂だけは負けない。その意志を込めてネロ・アンジェロを睨みつける。

だが彼は冷酷に手をつく眼前の敵目掛けて魔力弾を撃ち――

「IS、ライドインパルス!! チンク!!」

「はい！解っております!!」

初めの声が聞こえた時バージルは体が浮く感触を覚えた。見ればトーレがバージルを抱えて闇魔刀がある所まで移動していた。

「お前は……」

「いいから早く刀を取れ。私の愚妹だけでは削りきれん」

その言葉を聞いてバージルがネロ・アンジェロを見ると、そこには彼が入れた傷跡にステインガーを刺し連ねたチンクが。

一瞬こちらを見た彼女の顔はひどく寂しげで、まるで命を賭けた

特攻を行うようない

「！！ 待て、チンクー」

「IS、ランブルデトネーター！！！！」

バージルが気付いた時には既に遅く、鎧の隙間に刺さり込んだステインガーは次々に爆発し二人を包み込んだ。爆風が二人を包み黒煙が立ち込める。

「チンク……………！！」

バージルが彼女の名を呟くと煙を割って小さな体が歩いてきて崩れ落ちた。彼が走り寄って抱きしめると、銀髪の少女は彼の腕の中で弱々しい笑みを浮かべた。

「バー、ジル……………見たか……………一本、取って、来たぞ……………」

次に煙を割って出てきた黒い魔剣士の鎧は見るも無惨に壊れていた。

「……………ああ。お前のおかげだ」

「そう、か……………それは、よかつ、た……………」

彼の言葉を聞いてチンクは安堵の溜め息を吐いて目を閉じた。バージルは彼女をトーレに渡すと首にかけたアミュレットを目を瞑って握りしめ、しばらくしてから闇魔刀を手に取ると目を開く。

そこにある深い蒼色の瞳は静かなる感情によって燃えていた。

俺が弱いからチンクはここまで傷ついた。

俺に力が無いからここまで苦戦した。スカリエッティに何も言わずに飛び出した割に力が足りないから何もかも護れていない。

護るためにはない。単純かつ純粹に力が欲しい。力があればずっと全てを護れる。自分も、親しい人も、愛する人も。

だからこそ……。

「I need more power!」

力を欲する俺という存在全てで吼える。思いの全て、その奥底にある魂の全てで俺は吼える。それに呼応するように体に満ちる、今まで操るどころか感じたこともなかった魔力。

全てを込めて内に眠る悪魔の引き金を引く。

溢れ出す濃密な魔力。それは魔力を使ったことがない人間ならば、蒸せかえるような禍々しい気に当てられて失神するほどの障気を伴ったものだった。

デビルトリガー

内に眠る魔を起こして己が身の一部として使い、その姿形は人それぞれ。バージルの場合は蒼く猛々しい魔人へと変異する、はずだった。だが今の彼は全く違った。

黒い鎧が体を覆い、人目を引く銀の髪は雄々しく伸びた角をあし

らった兜の下に隠れて、その顔には三つの目。そして何より目を引くのは背中から生える黒い翼。その姿を知る者は世界広しといえど多くはいない。

嘗て魔帝の腹心として数多の敵を斬り捨て、ある日人間のために反旗を翻して数多の同朋と主を地の底に閉じ込め、人に英雄として崇められた一人の剣士の姿に今のバージルは酷似していた。

トーレは間近でその姿、魔力を感じ取って戦慄した。

（何だ、この魔力！！ 本当にこれが人の身に許された力なのか！？）

彼女は知らない。バージルが伝説の魔剣士の息子の一人にして彼の剣技を受け継いでいる事を。

「貴様に絶対の死をくれてやろう」

呟いた彼が一瞬で消えた。そして消えたと同時にネロ・アンジェロの鎧が派手に砕け散った。

（今の移動、全く魔力が使われていない。純粹な脚部の力……）

彼が消えた時は大概魔力が感じられた。だが今のは尋常ならざる身体能力によるものだと思ったときトーレは得体の知れない震えが走った。そしてネロ・アンジェロを見れば、剣で応戦してはいるが明らかに傷の方が多くなっていた。

「ハアッ」

ネロ・アンジェロは大剣でバージルに斬りかかるが、バージルは闇魔刀で大剣を上にあしらうと鋭い蹴りを食らわせる。

「グオオッ！」

ネロ・アンジェロは床を転がり、地に伏して荒い息のままバージルを見上げる。バージルは考えが読めない目を黒鎧の魔剣士に向けると、容赦なく振り下ろす。だがそれがネロ・アンジェロに当たることはなかった。

ネロ・アンジェロは何かにつ張られるように後ろに跳ぶ。そこに空間の裂け目が現れ、ネロ・アンジェロはその中に消えていった。だがバージルは臆することなくネロ・アンジェロを追ってその中に飛び込み、ちょうどその時を待っていたかのように裂け目はあつと言う間に塞がれた。

俺の前をあの剣士は走っていく。いや走る、という表現はここでは正しいのだろうか。

足場は無く、ただ足を出した場所が置き場となって歩を進められる。この場所は普通の人間には非常に危険だ。だが俺には心地よくどこか懐かしさを感じさせた。しかしそれがまずかった。

気が付くと目の前を走っていた黒鎧の魔剣士の姿は見受けられなかった。

「「チッ、逃がしたか……」」

猛っていた闘志が収まると俺は今の体を維持する事が出来ず魔人化を解いた。

その途端どつと疲れが襲ってきた。剣を握る事はおろか、立つ事さえままならず俺はその場に座り込んだ。全く、俺も馬鹿だな。何処に繋がるかも確認せずに飛び込むとは、ダンテじゃあるまいし……。

「フゥ」

溜まっていた何かを吐き出そうと息を吐いてふと横を見ると、そこには赤い短髪の少年が金髪の少女相手に竹刀でコテンパンにされている情景が映っていた。傍目から見ても少年と少女の力量は歴然であり今のままでは絶対に勝てないと確信できた。

「全く。そこはもう少し脇を締めて構えないと……言わんことない」

案の定、少年は見事に面を食らって倒れた。だがすぐに立ち上がって再び竹刀を構える。その様子は実に真剣で、まるで勝てるかもしれないと思っただけに親父に食らいつく幼き自分を見ているようだった。

さらに隣を見ればそこには……一番見たくない光景が広がっていた。

倒れた金髪の女性の下に駆け寄る二人の子供。それぞれが泣きながら体を揺するが、その顔に生気は感じられなかった。

それは紛れもなく幼少の頃の俺とダンテだった。あの光景は二度と見たくないのに第三者視点から見せられるとは……。

「全く以て不愉快だ……」

バージルがそう言って立ち上がると、突然上から先程の剣士がカブト割りを食らわしてきた。気配で気付いていた俺は大剣と閻魔刀が交差する瞬間に一閃し、相手の兜を割った。

そして見た先には整った顔立ちに見事な銀髪のオールバック。見たことがある、なんてレベルではない。その顔はまさに、

「俺……だと……」

相手が自分だと理解したとき、視界が揺れ体が先の倦怠感を感じて動かなかった。

「くそっ、こんな時に……!」

必死に意識を繋ぎ止めようとするが接近してきた剣士の縦回転蹴りを食らって俺は体も意識も堕ちていった……。

「それじゃあ早朝訓練始めるね。朝早いけどハードにいくからみんな、しっかり着いてきてね」

『ハイ!』

朝靄に包まれる街並み。そこに集うは少年少女計五人と一匹、そして妙齢の女性が一人。いずれも動きやすさを重視した服を着て、手に手に武器を持って立っている。

その中の女性が、整列する四人の少女達に話している。

「じゃあ今日はかなり実戦に近い訓練をしてみようか」
『ハイ!』

「なのはがこう言うんだ。今朝の訓練は半端ねーぞ?」

赤い髪をツインテールにした幼女、もとい少女の言葉に『うへえ』と苦笑する四人。

「もうヴィータちゃん！私だって鬼じゃないんだから朝からそこまですハードにはやんないよ」

「いや、絶対やる。なのはなら絶対やる」

なのはと呼ばれた女性は心外そうに言うが、ヴィータと呼ばれた少女は首を振って呆れる。何事も本気でやる彼女だからこそ、部下の訓練も手を抜かないとヴィータは知っているからだ。

（まあ、そこがなのはの良い所なんだけどな）

一人で納得したヴィータは「うっし！」と気合いを入れると手にハンマー型デバイス、グラーフアイゼンを構えて数回振りその先端を四人に向ける。

「今日はあたしとなのはのツートップで行くか？」

「そうだね。今のフォワードメンバーなら、それぐらい相手に出来るだろうし……なら今朝の訓練は私とヴィータ副隊長を墜としたら終わって事で」

『ハイ！』

元氣よく返事をした四人はその場を去っていった。

「今回のなのはさんとヴィータ副隊長、どんな戦術で来るんだろうね」

「そうですね。なのはさんの事だから……ヴィータ副隊長を囚にした砲撃魔法とか？」

「それはヴィータ副隊長が可哀想……」

「て言うか訓練でそこまでやらないでしょう、普通」

開けた場所にやってきた四人はストレッチをして体を伸ばしつつ、作戦会議を開いていた。

青髪のボーイッシュな少女、スバルと赤髪の少年、エリオは互いに背中を押して足を伸ばしている。その隣では屈伸運動をするピンク髪の少女、キャロと腕の関節を確かめるオレンジ髪をツートールにした少女、ティアナが話していた。

「そうかな？　なのはさんなら普通にやってくるかもよ？　少し……頭冷やそうか……とか言いながらさ！」

スバルが咽の調子を変えて出来るだけ彼女の声色に似せながら言う。そのセリフを聞いてティアナは反射的に周りを見てしまう。

「あはは！　ティアったら臆病なんだから」

「このバカスバル！　あんたはなのはさんの砲撃を直接食らった事がないからそんな事言えんのよ！　あのせいで、あたしはしばらくトラウマになったのよ！？」

憤慨するティアナをまあまあ、とエリオとキャロが諫める。

「とにかく！　相手がどんな手で来るか解らない以上迂闊に攻勢に出られないわね」

センターガード
司令塔の指示に三人は頷いてその時を待つことにした。
そしてその時は意外に早く訪れた。

「うりゃああああっ!!!」

建物の間を抜けるようにして飛んできたヴィータがいきなり手に魔力で作った鋼鉄の玉を作ると、

「シュワルベフリーゲン!!!」

容赦なくグラーフアイゼンで撃ってくる。

ギリギリで先に反応できたティアナの「散開!」の合図で四人ともバラバラの方向に散っていった。

「チッ、メンドクセーな……」

そうボヤいたヴィータはとりあえずスバルを追うことにした。

『ティア! ヴィータ副隊長、コッチに来た!』

『わかったわ。じゃあスバルはヴィータ副隊長を。後の三人でなのはさんを押さえるわよ!』

『了解（分かりました）!』

スバルが念話を終わらせると、足元から彼女の行く先にのみ道が現れる水色の道、ウィングロードを展開し近くの建物の屋上に降り立つ。

「ヴィータ副隊長はまだ見えない、か」

辺りを注意深く身ながらスバルは片膝をついてその場に座る。と、急に彼女の腹部からキュ〜という可愛い音が響く。

「あはは。やっぱり朝早いからお腹空いた〜。……早くなのはさん達を倒せたら、早く朝ご飯になるかな？」

などと呑気な事を言っていると空から空気を切り裂く音が聞こえてきた。何かと思い上を向くと、蒼い服に身を包んだ男がスバル目掛けて落ちてきた。

急な事に驚くスバルをあざ笑うかのように男はスバルにのし掛かるようにして落ちてきた。

「ぐむむ、重い……」

ようやく男をどけたスバルはその男を見回した。銀のオールバックに彫りの深い顔。蒼いマントが非常に印象深い。そして何より手に持った刀が目立った。

「これって、デバイス……じゃないよね？」

「ハイ。デバイスというより寧ろ質量兵器かと思われます」

自分のデバイス、マッハキャリバーに言われてスバルは何気なしに男の持っている刀を手にした。

「これ、重、い……」

フラフラしながら鞘から刀身を抜いたスバルだったがその直後、妙な倦怠感に襲われた。まるで魔力を吸い取られているような……。

「て言うかこれ実際魔力吸われてない!？」

慌てて手放すと刀と鞘はガシャンという音を立てて屋上の床に倒れた。

その音を聞いたのだろう。パツと目を覚ました男は、飛び起きると同時に右手を刀、左手を鞘におき鋭い眼光でスバルを射抜く。

「誰だ。貴様は……」

）ある炎魔の回想）

今日の陛下は随分と変わっておられた。

先日陛下に単身で挑んできた我らの共通の敵、あの憎きスパイダの息子を倒し気まぐれで創られ、その後行方不明になっていた黒い天使、ネロ・アンジェロが帰ってきた。だがその身に纏っていた鎧は無惨に碎け散り、満身創痍であった。

最近の陛下は魔界をその手中に納めてから何もやる気が起きていないようで、その目に魔界を統一せんとしていた時の活力がお見受けできなかった。

しかしご自身が創られた暇つぶしの“玩具”が半壊で帰ってきた時陛下は喜んでおられた。

曰わく、ネロ・アンジェロをもっと強化して長年考えていた人界侵攻を決行する、と。

恐らくご自身が創られた玩具がボロボロになって帰ってきたのが、くすぶっていた陛下の野心に火を着けたのだろう。

きつとこれから陛下の腹心を魔界全土から喚んで人界を攻撃する事になるだろう。グリフォンや最近炎獄を統べたベリアルという悪魔も呼ばれるかもしれない。その時はこのファントムも陛下の手となり足となって働いてみせよう。

ただ気がかりがあるとすれば、魔界に未だ存在する陛下の反抗勢力。目下霸王アルゴサクスが一番の障害となるだろう。

先日の謁見時も、魔帝と称される陛下の前で自ら霸王と名乗るとは彼の者の胆力は計り知れない。気を付けなければ……。

l M o v i n g G e a r l 対峙する魔剣士と魔王（前書き）

「鬼ごっこ？別に構わないけどね……」
スバル

「ふむ、少し遊んでやろう」
バージル

「上！」
ティアナ

Moving Gear 対峙する魔剣士と魔王

急に何かに叩きつけられたと感じたバージルはうつすらと目を開けた。幸いそこまで痛くはなかったが、手にしていた閻魔刀の感触が無くなっていた。

（閻魔刀が……無い………何！？）

自分の考えていた事をようやく頭が理解した時バージルは内心かなり焦った。

「て言うか実際魔力吸われてない!？」

その時、頭の上から慌てた声が聞こえてきた。バージルが見あげると、ヨロヨロと閻魔刀を持った少女が狼狽している。そしてそれを床に落とした。

自分の閻魔刀を何故少女が持っているか知らないが、父から受け継いだ刀をぞんざいに扱われるのはあまり良い気分はしない。そんな思いを隠そうとせず、バージルは彼女が落とした閻魔刀を拾い上げると右手を柄に、左手を鞘に置き殺気で威圧する。

「誰だ。貴様は……」

バージルを見て驚く少女を尻目に彼はすぐに少女を観察し始めた。少年のように切られた青色の髪。パツチリと見開かれた緑の瞳には優しい雰囲気の中に芯の通った強さが見受けられる。

次にバージルは視線を顔から体に移した。無骨な光を放つローラーブーツと右手のガントレットが、この年頃の少女には不似合いに見える。活発的な印象を与える半ズボンと白い鉢巻。そして体を力

バーするように着ている白い服。……余談だが、彼女の白い服を見ていて何故か悪魔や魔王といった単語がバージルの頭をよぎった。

「あの、あなた誰ですか？　と言うより何でこんな所にいるんですか？」

だがバージルが殺気で威圧しているにも関わらず、少女は別に気にした様子もなく彼に話しかけてきた。バージルにしてみれば四割ぐらい本気で圧を掛けていたのだが、目の前の少女には効果がないと判ると威圧するのをやめた。

「人に名を聞く前にまず自分が名乗るべきではないか？」

長い刀を美しく鞘に収めたバージルは少女に向き直る。少女は彼の納刀動作に見惚れていたが、バージルに言われて思い出したように慌てる。

「す、すいません！　えつとですね、コホン……。時空管理局古代遺失物管理部機動六課、スターズ分隊所属スバル・ナカジマ二等陸士です！」

「随分長い役職名だな……」

「あははは。私もつい最近やっと噛まないで言えるようになったばかりなんですよ……」

スバルが苦笑する。余程何かあったのか、その瞳は遠い所を見ていた。

「あっ、待ってください！　私は教えたから、あなたも教えてくださいね？」

面倒くさい事になると考えたバージルは背を向け、そろそろ逃げようとするがスバルに気付かれた。彼を引き留めようと後ろから肩に置かれた手には少女にあるまじき力が込められている。

（これは逃げられんな……）

大人しく諦めたバージルは仕方なくスバルに向き直り、それを見たスバルは満足したようで手を離す。

「……それで？ 一体何が聞きたいんだ？」

「とりあえず名前、それから何で空から此処に落ちてきたのか教えてください」

さっきまで明るい少女だったスバルは急に真面目な表情をしてバージルに聞いてくる。そういう所がしっかりしているあたり彼女の上司は礼儀に厳しいのだろう、と考えさせられたバージルだった。とりあえず相手が名乗った以上こちらも名乗らなくては失礼という考えに至ったバージルだが、特に自分を表現する冠詞も無いので名前とだけ言う事にした。

時空管理局古代遺失物管理部機動六課なんて長い役職名、普通無いだろ？

「バージルだ」

「じゃあバージルさん。どうしてこんな所に、しかも落ちてきたんですか？」

スバルが二つ目の答えを求めるが、バージルにしてみればこれが一番答えにくい。何せ何処から来たのかも分からない、どういう原理で来たかも分からない、此処が何処かも分からないというないな

い付くし。その状態で答えろと言われて答えられる奴を見てみたい、なんて考えていた。

いつの間にか軽く現実逃避していたバージルだったが、スバルに不思議な物を見るような目で見られている事に気付くと、とりあえずある程度伏せて答えることにした。

「悪いが答えられん。俺自身、此処が何処で何処から来たかも分からないのだからな」

「えっ！じゃあもしかしてバージルさんって次元漂流者ですか！？」

スバルが急に慌てるが、サッパリ話が分からないバージルは何も言えなかった。一方のスバルはいそいそと右手のガントレットを弄りだす。

「とりあえずなのはさんに連絡しないと……」

だが連絡、と聞いてバージルは待ったをかける。

「待て。そのなのは、という奴はお前達の所謂リーダーか？」

「えーっと。私達のリーダー、と言うと若干違いますけど今この近くにいる局員の中で一番階級が高いです」

何故そんな質問をするのか分からないスバルは首を傾げている。

「その人物には連絡しないでくれ」

「えっ？何ですか？」

バージルとしては一刻も早くこの場を去りたかった。これ以上長く留まれば絶対、厄介事に巻き込まれると彼の第六感が叫んでいた。

「今すぐこの場を去る。それでいいだろう？お前は誰とも会ってないし誰とも話していない。OK？」

バージルの要望に難色を示すスバル。彼女にしてもバージルを逃がしたくなかった。

（だって逃がしたらなのはさんに頭冷やされる……！！）

先程ティアナに軽口を叩いていたスバルだったが、実際彼女が撃墜された時のなのはの眼はありえないほど暗く淀んでいた。その時の怖さは隣にいたスバルもありありと感じていた。

それはなんと云えばいいのか。例えて言うならばこの世のすべての悪、黄泉の国より来た魔王……。

（こんな事、考えてるだけでも怖いよ～！）

それほどまでにキレた時の彼女は怖く、一部の魔導師や局員からは“リーサルウェポン最終兵器”、“管理局の生ける封印指定危険物”といったあだ名が付けられた事もある。しかし何故か、その名を口にした人は皆管理局を辞職している。

とにかくスバルはバージルを逃がすわけにはいかないのだ。

「お願いします！私を助けると思っ……て！」

スバルが鬼気迫る表情でじりじりと彼に迫るがバージルとしても、やはりわざわざ面倒事に巻き込まれたくはない。

「……すまん」

「そんな～」

スバルはがっかりしてうなだれる。顔を落として相当落ち込んでいるーと思いきや、急に右手で殴りかかって来た。

いきなりの攻撃。だがバージルは慌てず左手で受け止める。バシッと鋭い音が響く。

「いきなり殴りかかってくるとは、貴様本当に役人か？ 仮にも局員なんだろう？」

ギリギリと音を立てて握り合い、膠着状態のままバージルが問うとスバルは笑って答えた。

「私、気付きました。相手の事情は後回しにして、取りあえず殴って気絶させちゃえばいいって。こういうのってやったもん勝ちなんですよね♪」

スバルは可愛い顔でとても物騒な事を言う。しかもその眼は若干イっているような輝きを放っている。

これは本格的に面倒くさい事になってきたな……。とりあえずここから退くか。

右足の蹴りを腹に食らわせる。鋭い蹴りがスバルの腹に吸い込まれるように入るが、彼女は左手で受け止めた。相当体重を乗せた蹴りだったのだが容易く受け止められたのだ。それだけでも彼女が何か体術の心得があると見受けられた。

更にバージルは一本残った左足でスバルの右わき腹を打ち抜く。

「かはっ……」

痛みにスバルが呻き、その拍子に拘束が緩みバージルは屋上の床

に落ちる。だが受け身を取って立ち上がると、その隙に後ろに跳んで距離を稼ぐ。スバルはユラユラと体勢を立て直すとバージル目掛けて走ってくる。

だがバージルは、これ以上やりあうのは時間の無駄という考えに至ると、スバルに背を向けて屋上から身を投げる。

バージルの後を追ってスバルが下を覗くと、バージルは問題無さそうに着地して走り出した。

「鬼ごっこ？別に構わないけどね……」

その様子を見ながらスバルは小さく呟いた。

その時スバルの背後からヴィータがグラーフアイゼンを片手に持って近付いた。

「おい、スバル。お前何してんだよ。今は訓練中だぞ？」

「……ヴィータ副隊長。この近くに次元漂流者がいます」

「何っ！？ホントか、スバル！」

次元漂流者と聞いてヴィータも慌てるが、スバルは淡々と状況を報告する。

「はい。ついさっきまで此処にいたんですけど逃げられてしまいました」

「逃げる？何でそいつは逃げたんだ？」

スバルの言った逃げる、が引かかったヴィータだったが、その事も補足する。

「彼の持っていた武器が多分質量兵器だと思われます。だから逃げたんじゃないですか？」

「なるほど……。わかった。今なのはに訊いてみる」

そう言うとき、ヴィータはグラフアイゼンに付いているデバイス間の通信を行い始めた。

なのはがティアナ、エリオ、キャロとやり合っていると突然モニターが割り込んできた。

『なのは、ヴィータだ。一旦戦闘を終了してくれ』

「ヴィータちゃん？」

突然のヴィータの申し出に困惑するのはだったが、とりあえず言われたとおり戦闘を中止した。

「で？どうしたの、ヴィータちゃん。何かあったの？」

なのはの質問にヴィータは首を縦に振って頷く。

『おおアリだ。何でもこの近くに次元漂流者がいるらしい。スバルが遭遇したが逃げられた』

「えっ！？何でこんな場所に次元漂流者が……」

『詳しいことはわからねーが、どうやらそいつ質量兵器を持ってるらしい』

質量兵器。

魔法を必要としない殺傷武器の総称であり、魔法技術を利用したデバイスとは逆で魔法を一切使わず一度完成すれば子供でも使えて、しかも簡単に命を奪えることからミッドチルダでは禁止されている。そんな武器を持ち歩いた人が彷徨っていては管理局としては色々マズい。

「わかった。みんな！聞いてるよね？」

『はい！』

「今日の早朝訓練の内容変更。次元漂流者の確保、及び所持している質量兵器の押収。出来るよね？」

『はい！』

「じゃあ行くよ！ヴィータちゃん。その人の特徴は？」

『ああ。特徴はー』

バージルはスバルの下を去ってからずっと歩いていた。だが不思議なことにまだ一度も人と会っていない。そんなゴーストタウンの道路の中心をバージルは歩いているのだが、辺りがなまじ近代的な設備の建物だらけなだけに、とてもシユールに見えた。

「おかしい……」

無論バージルもこの異変に疑問を感じていた。彼の鋭敏な感覚を以てしても五キロ範囲内にたった六つしか人の気配を感じられなかった。

周りの建物もそうだ。先刻試しにと閻魔刀で建物を斬ってみたが、

斬れはしたものの普通の建物より若干硬度があった。まるで訓練中に下手に壊れないように硬くしたような。

「しかし答えが分からない問題を考えるというのは、どこか禅問答染みているな……」

等と周りを注意して見ていると急に今まで感じていた気配に動きがあった。

それぞれがバラバラに動き出したのだ。まるで何かを探しているように。

「チツ、さっきの奴がバラしたか。あそこで気絶させておけばよかったか……」

「その人！止まってください！」

今来た道の方角をバージルが睨んでいると横から幼い声が聞こえてきた。見れば赤髪の少年と珍しいピンク色の髪の少女と竜（？）が立っていた。

「貴方がバージルさんですか？」

「……だったら何だ？」

バージルが少々威圧して言うと、いきなり槍を向けてきた。

「管理局古代遺失物管理部機動六課ライトニング分隊所属エリオ・モンディアル三等陸士です」

「同じくキャロ・ル・ルシエ三等陸士。こっちはフリードリヒ」

「キュークー」

それぞれが自己紹介をするとエリオと名乗った少年はバージルに

呼びかける。

「貴方を次元漂流者と判断し、身柄をこちらで預かります。僕達と来てください」

「断る、と言ったら？」

「無理やりにでも一緒に来てください」

キャラもエリオと並んでバージルを説得しようとする。

だがスバルにも言った通り、

「だが断る。さらに面倒くさいから撤退させてもらう」

その場を凄まじい速さで走り去った。

呆気にとられた二人と一匹だが、すぐにキャラが言葉を紡ぎ、

「竜魂召喚！白銀の飛竜、フリードリヒ！」

フリードが巨大化して現れる。その背中にエリオとキャラが乗って彼を追いかける。

俺は走る、風の如く。魔人化すればさらに速く走れるが、いちいち魔人化しては魔力を盛大に持っていかれるので普通、と言っても常人からすれば十分な速度でダッシュしているわけだが……。後ろから白い竜が追ってきている。まさかとは思うがさっきまで小さかった竜が巨大化したのか？

「フリード、ブラストレイ……シュート!!」

僅かに聞こえた声で、あれが先程の竜と理解できたが、その竜が口に炎を溜めたと思うと一気に吐き出してきた。当たるのもあれなので横にかわしてさらに速度を上げる。

竜は何度も撃ってくるが、それをかわしていくうちにどんどん距離が出来てきた。このまま行けばいつか引き離せると思った時、横から魔力弾が飛来する。咄嗟にジャンプして地面を滑り止まる。

「新手か……」

見ればオレンジ色の髪の少女と……ナカジマ、とか言った少女がいた。

「ティアナさん！」

折角開きかけていた距離が無くなり竜達にも追いつかれた。

「コラッ！ちびっこ共、勝手に行動するなって言われたでしょ！」

「すいません、ティアナさん」

ルシエと思われる声が謝り、ティアナと呼ばれた少女が「で？」と俺にハンドガンの銃口を向けてくる。

「あんたがスバルの言ってた次元漂流者ね？」

……またか。俺がその次元漂流者だったら何なんだ。

「武器を置いて投降してください。もし断るなら強制的に連行しま

す」

急に言われても此方としては困るばかりだ。だが、そろそろ逃げる事にも飽きてきた。

「ふむ、少し遊んでやろう」

「ふむ、少し遊んでやろう」

そう言ったバージルは不敵に笑い、手にした刀を抜く。銀色に輝く刀身が朝日を受けて煌めく。

ティアナとスバルが戦闘態勢を取るとバージルが一気に距離を詰めて抜刀からの一閃。銀光がティアナを襲うが前に出たスバルによって受け止められる。彼は思わず感嘆の意を込めてスバルを見る。

（こんな華奢な体で閻魔刀の一撃を受け止めるとは。しっかり体が鍛えられているな）

「うおおおおああああ！！！！！！！！」

ギリギリと嫌な音が響く中スバルの気合の声が響き、バージルを弾き飛ばす。そしてバージルが着地した所を狙ってエリオが接近し、槍の連続突きを繰り返す。スバルほど重くは無いが速い一撃が彼を襲うが、バージルはそれを右に左にと巧みに捌く。

（ふむ。確かに速いが……）

「そこだ！」

右手に持った剣の柄をエリオに思い切り打ちつける。咄嗟に槍型デバイス、ストラダーで受け止めるが体が軽いため大きく吹き飛ばされる。

「キャロ！」

「はい！ブラストレイ！」

エリオが飛ばされた時を待っていたティアナが魔力弾で、キャロがフリードのブラストレイでバージルを狙う。

先に飛来したティアナの魔力弾がバージルの動きを阻害し、動きづらくなったところで本命の火球が飛来する。

（見事な連携だが）

「まだ甘い」

飛来する火球を見つめバージルは閻魔刀を振る。その斬撃は彼を焼きつくそうとした火球を横に真っ二つにし、火球は彼の横に着地してアスファルトを粉々にする。

「くっ、あの人がかなり強い……」

「まだまだ！ガンガンいくよ、ティアア！エリオ！」

「はい！」

ティアナが愚痴るが、スバルは全くめげずにバージルに一直線に、エリオは逆に横から突き進む。それを後ろからティアナとキャロが援護する。

バージルは閻魔刀で魔力弾と炎、全てをその場で斬り裂いてかわ

す。そして、そこに突っ込んだエリオが速さを乗せた突きをバージル目掛けて突きだす。だがエリオの動きを見ていたバージルは右手の閻魔刀でティアナ達の魔力弾を斬りつつ、左手でストラダーダの柄を持ってエリオの突きを受け止める。

「Too easy. . .」

「それはどうでしょうか？」

だがそんな状態でニヤツと笑ったエリオを見て何かを忘れている気がしたバージルに、スバルが腰のスイングを加えた右足の回し蹴りを繰り出す。

ドゴツと、もろに回し蹴りが入りバージルが呻く。当然右手も動きが止まったので魔力弾もバージルに当たる。

「エリオ、離れて！マッハキャリバー、カートリッジロード！」

数回ガシャンと音が鳴って弾丸が捨てられる。そしてダメ押しとばかりにスバルは両手で魔力を作って左手で安定さると、

「ディバイーーン……」

エリオが急いで後ろに下がり、それを確認したスバルは右手で安定させた魔力を打ち抜く。

「バスターー！ー！！！」

バージルの幻影剣の色に似た魔力の激流が彼を飲み込む。爆発の余波が辺りを包み、全員がその場から一步下がって成り行きを見守る。と、急に爆煙が晴れた。だがそこには誰もいなかった。

「なっ!？」

「いない!？」

「一体どこに!？」

スバル、エリオ、キャロが慌てている中ティアナだけは冷静だった。だからこそそれに気付けた。

「上！」

叫ぶと同時に両手にクロスミラージュを持つと上から迫る無数の幻影剣を狙い撃つ。フリードがいる位置よりもさらに上から降り注ぐ幻影剣を正確に撃ち抜くティアナ。彼女の射撃技術は良いセンスをしていた。だからこそ、

「貴様を真っ先に潰しておかなくてはならないようだ」

文字道理一瞬で現れたバージルは右手でティアナの首をつかんで宙に持ち上げる。口を開閉させ、ティアナは苦しそうに足をバタつかせるが全くふりほどけそうにない。

「ティア！」

幻影剣はバージルが現れたら消えたので上を心配する必要がなくなったスバルはバージルに走り寄り、殴ってティアナを助けようとするが簡単に受け止められ、逆に万力のような力でスバルの右手も締め上げられる。

「うああ……」

「ティ……ア、放してよ……ティアを……放してよ……」

ティアナが小さく呻き、スバルが痛みにも耐えながらもティアナを開放するようにいうがバージルはまるで聞く耳を持たず冷やかな眼で二人を見つめる。あとの二人もどうしていいか分からず動けなかった。

遂にティアナの手からクロスミラージュが滑り落ちる。

「ティアアアアア！！！！！！！」

スバルの悲痛な叫びが辺りに響く。

「アクセルシューート！！！！！！」

叫び声に混じって聞こえたかけ声。それはその場にいた四人にとつて、まさに救いの声だった。

バージルを的確に狙ったピンクの魔力弾が彼を襲い、当たるわけにはいかないのでバージルは二人を放して後ろに下がりとつづつ闇魔刀で斬り捨てる。一方の二人はその場に座り込んで、荒い息のまま上空から二人を守るように降り立った人物の背中を見る。

『なのはさん！！』

降り立ったエースオブエース、高町なのははエリオとキャロを見、次いで後ろにいる満身創痍のスバル、ティアナを見て微笑む。

「よく頑張ったね、偉いよ。後は私に任せてね？」

なのはと話しているだけで力強さを感じた二人は頷いて事の成り行きを見守ることにした。

「ずいぶん私の部下達がお世話になったみたいですね？」

「何、気にするな。羨がなっていない犬にはお仕置きが必要だから」

バージルはなのはと呼ばれた人物を観察する。

別段変わったところはない妙齡の女性だ。しかし何故だ？纏っている雰囲気が悪魔と似ているのは俺の気のせいなのか？しかも……。

なのはも油断なくバージルを観察する。

蒼い服に銀髪って凄い目立つね。それに報告にあった通りの質量兵器……日本刀の類かな？それにしても……。

凄まじい魔力量だな（だね）。

「貴様がなのはか」

「どうして私の名前を知ってるんですか？」

バージルは険しい顔で、なのはは逆に不自然すぎる笑顔で互いに見合う。

「何、そこにいるナカジマに聞いただけだ」

「そっか。じゃあどうして私達が貴方を捜しているのか、解りますよね？」

「次元漂流者とかって奴のことだろう？だが生憎と俺は忙しくてな。気が向いたら自主的に行くから気にするな」

飄々と捉え所のない口調で話すバージルになのはは悲しそうに俯く。そして下を向いたままバージルに眩きかける。

「……最後に言います。私は貴方に任意同行を求めます……」

「何度も言わせてもらうが、その要望を拒否させてもらう」

此処が何処かなどを確かめるため、バージルはあくまで面倒事には巻き込まれたくない姿勢を貫く。実際もう十分すぎるぐらい面倒事に巻き込まれているのだが。

「そっか……じゃあしょうがないね……。任意同行はやめて強制連行にします。」

「やれるものならな……」

なのはがデバイス、レイジングハートを構え、バージルが閻魔刀の柄に手をかける。

そして走り出そうとした刹那、二人の間に紅色の物体が割り込んだ。

「なのは、ストップ!!」

「ヴィータちゃん!？」

現れたのはヴィータだった。彼女は二人の間に立ち、互いの動きを牽制するとバージルに向かって話しかける。

「オイ、お前!! バージルって言ったか? 何で任意同行に応じねんだ?」

ヴィータが疑問を投げかけるとバージルは構えたまま答えた。

「面倒事に巻き込まれたくないからだ」

「お前の頭が良いなら少し考えやがれ。今の状態が十分面倒だろう」

が！」

ヴィータに言われバージルは考え込んだ。確かに面倒事を避けようとした結果、より面倒な事に巻き込まれているのだが。

「お前が六課に来れば身元確認やこの世界の事も教えてやる!!」

逡巡するバージルにヴィータがトドメを指す。これが彼の結論を導き出した。

「……いいだろう。確かに貴様の言う事にも一理ある。一時、其方に身を寄せよう」

構えを解いたバージルを見て、なのはもレイジングハートを待機状態に戻す。

ヴィータもふう、とため息を吐くとバージルに歩み寄り睨む。ただし百九十程もあるバージルを見上げながらだが。

「何だ？」

「アタシにはヴィータって名前があんだよ。貴様じゃねえ」

先程はバージルを説得させるほど聡い意見を言いながら、自分の名前についていちいち訂正するとは……。

「あん？何笑ってやがんだよ？」

「いや。気にするな。此方の話だ」

気が付いたら少し笑っていたらしく顔に手を当ててみれば、なるほど確かに口角が僅かに上がっていた。

俺はまだ笑えたんだな……。

バージルは手で顔を隠し、それを見ていたヴィータは不思議そうな顔をしていた。

「Moving Gear」 対峙する魔剣士と魔王（後書き）

――反省会――

作者「やらかした〜」

バージル「どうした？何をやらかした？テストでやらかしたか？」

作者「いや確かにテストでやらかしたのは事実だけど、この際どうでもいいんだ。そんな事より重要なのはキャラ崩壊だ！！」

バージル「ああ。そう言うことか。恐らくナカジマの事だろう？」

作者「そうなんです。スバルが若干病んでたり、なのはがマジで魔王だったり……バージルの口調が違ったりしなかったり……」

バージル「まあ確かにアニメでは流してしまうが、実際文にしてみるとキャラの口調などは意外に難題だからな」

作者「射命丸射命丸」

バージル「あや、ではなくぶんだ。とりあえず貴様は黙って沈んでいろ」

作者「ちょ、闇魔刀を振り回すな！幻影剣を撃つな！魔人化すん、ひでぶっ！！」

バージル「作者を黙らせてしまったので俺が言うが、PVが15596、ユニークが2500に達していた。俺から礼を言わせてくれ。

ありがとう」

作者「か、感想もありがとうございます……」

バージル「次元斬!!」

作者「ぶふおああ……」

「Flux」 漂う魔の香り（前書き）

「ならば我が剣、一つためしてみるか？」
シグナム

「やめんかい！！」
はやて

「あなたはおかしい」
フェイト

「It's begin...」
バージル

Ⅰ Flux Ⅰ 漂う魔の香り

機動六課隊長室。はやてはそこで報告にあった次元漂流者が来るのを待っていた。

確かに最近小規模な次元震が観測されていると報告にはあったが、はやては特に何をするともせず日々デスクワークに追われていた。

無理もない。六課設立にも関係し、最近ようやく落ち着きを見せたジェイル・スカリエッティを首謀者とする事件、通称J・S事件を完結へと導いたのは他ならぬ八神はやて率いる機動六課の戦力が大きかったからだ。

事件解決直後はいろいろあって六課のメンバーは忙しく、特にレジアス中将が死んだことが分かったときは三提督まで動いた。そのため今となってはやることが殆どなかった。そこに今回の次元漂流者である。

はやてとしても今回の次元漂流者の件が終わったら六課を解散しようと思っていた。ちょうど良い頃合いでもあった。

一年前は初々しい雰囲気醸し出していたフォワードメンバーも、なのはの教導と様々な事件のお陰で一人前のストライカーになった。もうどこに出しても立派にやってくれるだろうと思うと、はやても鼻が高い。

『はやて。今六課のエントランスに着いた』

「そっか。ほんなら私の部屋に通してかまへんよ」

『わかった』

いつの間にか物思いに耽っていたため気が付くとヴィータからの通信が入っていた。モニターを開いてヴィータに通すよう告げるとはやてはモニターを消した。

「さて、一体どんな人物なんだろうな？そのバージルっていうのは……」

ヴィータに連れられてやってきた俺はある一室の前で止められた。どうやらここが目当ての部屋らしい。

「はやて。入るよ？」

ヴィータが訊くと中から「かまへんよ」と聞こえ、ヴィータに続いて俺も部屋の中に入った。

部屋には正面にデスクが二つあり、一角にあったソファに座るところになった。すると正面のデスクにいた少女が俺に挨拶してきた。

「初めまして。管理局機動六課部隊長の八神はやてです。よろしく」「バージルだ」

八神が手を出して握手を求めてくるが俺は完全にスルーして、そのままソファに座ると深く腰を掛け足を組む。俺としては早いところ本題に入ってほしいからな。

ヴィータが何か言いたそうな顔をしているが関係ない。八神は苦笑すると俺の前のソファに座り、俺を凝視してくる。だが一向に話をしようとせずただ此方の事を見ているだけだった。

「……なんだ？」

「いや、エライカッコいい顔してんなーて思っただけや。気にせんで」

ほう。臆面もなく初対面の人間に感情を吐露できるあたり、相当の政治的修羅場を潜り抜けてきたのだろう。
と、話がズレたな。早く話を進めろ。

「八神、話はまだか？」

「ちよつと待ってや。六課の分隊長がもうすぐ来る頃や。その前にちよこつと自己紹介でもしとく？」

「もう殆どの奴と会話はした。後は……」

言葉を切ってその人物を目だけで見る。俺の視線を追った八神もああ、と納得する。

「さっきから俺のことを敵意丸だしの目で睨んでくる女だけだ」

俺の視線の先にいる、ピンクの髪を一つに縛った女は俺がこの部屋に入ったときから油断なく見ていた。話題に出された女はツカツカと歩いてくると俺の近くに来了。

「すまん。だが生憎と、初対面でこれだけ傍若無人な奴は初めてなのでな。つい斬りかかってしまわないよう抑えるのに必死でな」

いつの間にか手に持っていた刀の柄を持ちながら女はいつでも抜けるように構えている。

……面白い。貴様如きで俺に傷を付けられるかな？

「確かに貴様は優秀な剣士のようだが、貴様程度、今まで何人も見てきた」

「ならば我が剣、一つ試してみるか？」

急激に俺達の間の空気が張り詰めていく。爆発し、いつ斬り合いになってもおかしくない空気が漂う。お互い、相手の武器の間合いにいるため勝負は抜刀の速さにかかってくるだろうが生憎、俺は居合いが得意でな。

腰だめに構えた閻魔刀の刀身が煌めき、

「やめんかーい!!」

突如スパコーンと軽快な音がして俺の後頭部にジンジンした痛みが響く。女もそのように額を押さえながらその元凶を見る。

「主はやて、痛いです」

八神がどこから取り出したか分からないハリセンで俺の後頭部と女の額をぶっ叩いたのだろう。それにしても何処に隠し持っていたんだ、そのハリセン……。

「やかましい！初対面の人と何でいきなり斬り合わなあかんの。刀を納めや、シグナム」

「……はい」

しぶしぶ刀を納めるシグナム(?)を見て八神は俺に振り返ると謝る。

「すんまへんな。うちの子も悪気があったわけやないんや。ただ私の事を思ってたただけや。堪忍な？」

頭を下げて謝る八神を見ながら俺は仕方なく刀を納める。しかし

シグナムは未だに俺のことを凝視している。どうやら一度キツチリ“話し合い”をした方が良さそうだな。

「はやてちゃん遅れました、て何やってるの？」

「ああ、なのはちゃん、フェイトちゃん。ちょうどよかった。じゃあ分隊長も揃ったところで始めますか」

八神が仕切り直しをするために手を叩き、俺も再びその場に座り込んだ。

「ほんならもっかい自己紹介してもらおか」

フォワードメンバーも加えた前線メンバーも席に座った所ではやてが自己紹介をしようとしたが、バージルが不機嫌そうな顔ではやてを見るので宥める。

「何回もしてるとは思いますが、みんなの前で正式にお願いします」嫌そうに立つとバージルは一言「バージルだ……」と言って座った。

「ほんなら私もー」

「もう聞いたからいい」

はやての言葉を遮ってバージルが厳しいことを言うので、はやては苦笑するしかなかった。

「だが、その二人の名前は知らん」

その二人、でバージルはなのはとフェイトを見やる。

なのはとフェイトは答えていいのか困惑して、はやてを見ると彼女が頷いた。

「えっと、高町なのは一等空尉です」

「フェイト・テストアロッサ・ハラオウン執務官です」

二人が言い終わるとバージルがなのはの事と呼んだ。

「高町」

「はい？」

「貴様……本当に人間か？」

ピシッ、となのはの浮かべていた笑みにひびが入った、そんな錯覚を受けるほど見る見るなのはの表情が凍り付いていった。バージルは首を傾げているが、二人以外はあたふたしている。

「バージルさん……少し、頭冷やしまー」

「なのはちゃん！次元漂流者、管理局。わかった？」

なのはのセリフに割り込むような形ではやてが話し、次元漂流者でバージルを、管理局でなのはを指差して彼女を諭す。するとなのはの表情が笑顔に戻った。

「もう、分かってるよ、はやてちゃん。……バージルさん」

「何だ？」

だがバージルに向き直ったのはは、その直後先程の表情を浮かべる。

「あんまり悪口ばかり言うとな星が墜ちてきますよ？」

バージルがどういう意味か分からないまま、なのはは笑顔で自分の席に座った。

（星……何のことは解らんが久しぶりにイジリ甲斐のある奴を見つけたな）

黒い笑みを浮かべながらバージルはなのはを見ていた。

「ええ、ではこれ以上やるとまた脱線しそうなんで単刀直入に訊きます。バージルさん、あなたは一体どこから来たんですか？」

ようやく本題に入れたことに安心しながらはやてはバージルに訊く。

だが先程も言ったとおり彼自身でも分からないことをどうして他人に説明できようか。

「知らん。気が付いたら此处に来て、しかもいきなり襲われたな」

バージルに言われ図星のスバルは苦笑しながら頭をかき、それを隣にいたティアナが小突く。

「ほんまに知らんですか？」

はやてはバージルの瞳の奥を見据えるかの如く真っ直ぐに彼の目を見る。バージルも椅子に深く腰掛けて足を組んではいるが、はやての探るような視線を真っ向から見つめた。

しばらくして目を伏せると、はやては話を続けた。

「どうやらバージルさんは嘘を言っていないようなので先に進みます。この話題も十分重要なのでしっかり聞いてや」

そう前置きして一旦区切ると再び口を開く。

「バージルさんのソレについてや」

ソレ、ではやてはバージルの持つ閻魔刀を見る。それにつられて、その場にいた全員の目がバージルの閻魔刀に行く。

「バージルさん。この世界には質量兵器禁止法、というのがあるんや。実はバージルさんが来る前に前線メンバーの隊長陣で話してたんやけどな？」

「あなたの刀は恐らく質量兵器に当たると思うんです。それって非殺傷に設定できますか？」

フェイトが訊ねるとバージルは鼻で笑う。

「非殺傷だと？ そんな鈍^{なまくら}で敵を斬れると思うか？ 邪魔する奴は斬り捨てる、それが俺のやり方だ」

冷笑を浮かべながら平然と物騒な事を言う彼をはやては、この場で捕まえようかと思ったが、さすがに理由なく捕まえては不味いと思ひ踏みとどまった。

フェイトも非難がましい目でバージルを見ながら言う。

「あなたはおかしい。そんな危険な事、あってはいけません」

「ふん。力が無くては何を言っても説得力がないな……」

「なら私とその力があるかないか試してみるか？」

シグナムが剣の柄に手を置きながら威嚇してくる。だがバージルはまるで意に介さないで冷めた目で彼女を見つめる。

「別に俺は構わないぞ。その代わり、その剣は壊させてもらうがな」
「何？ どういう意味だ？」

シグナムが疑問に思い口に出すと、バージルは閻魔刀を目の前のテーブルに乗せ答える。

「単純な話だ。先程の戦闘で感じたが、貴様等の武器は機械に魔力を付加させた物だろう？」

一般的な魔導師が使うバリアジャケットは自身のリンカーコア内の魔力、又は大気中の魔力を元にして使える物。デバイスも機械に同じようにして集めた魔力を使うことで技を発動したりしている。

「この閻魔刀は人と魔を分かち剣、つまり魔力結合を阻害し分離させる能力がある。この剣と打ち合うならば魔力を使わない純粋な硬度で戦わなくてはならない。貴様では勝てんだろうな……」

テーブルに置いた閻魔刀を手にとって鞘から抜くと、峰を手で撫でながらシグナムを睨む。互いに睨み合い、またしても先のような空気になっていく。

「はいはいはい！ 質問です！」

「ちょっとスバル！あんた空気読みなさいよ！」

しかし緊迫した空気が漂う空間をスバルが見事にぶち壊した。隣にいるティアナが注意するが、気にせずスバルは続ける。

「その閻魔刀？と私のマツハキヤリバーって一回接触してるじゃないですか。その時、私のマツハキヤリバーには殆ど被害箇所が無かったんですけど何ですか？あ、マツハキヤリバーって私のデバイスです」

スバルに言われ、バージルはその光景を思い出す。確かに閻魔刀とマツハキヤリバーは激突していた。だがそれ以前に、

「俺は戦う前に何と言った？」

「えっと、あの……ええ？」

「確か『少し遊んでやろう』って言っていたような……」

スバルが全く答えられなさそうなので、代わりにエリオが答えるとバージルは首肯する。

「そうだ。もし俺が手加減していなかったら確実に破壊されていた」

驚き、慌ててスバルは自分のデバイスを見る。知らなかったとはいえ危うく壊されかけていたとは無知とは恐ろしいものである。

「とにかく非殺傷設定が出来ない以上バージルさんの閻魔刀を質量兵器として認め此方で没収します」

「待て。俺が手加減して殺傷しないようにすれば良いし、第一に俺はこの組織に身を委ねるとは一言も言っていない」

「そんなんあかんで。次元漂流者は私らが保護するて決まってるん

や。バージルさんに拒否権はあらへん」

フェイトに結論付けられバージルが反論したが、はやてに一蹴された。

（どうやら此処の奴らは頭が固いようだな。ならば見せしめるか）

思うが早くバージルはダークスレイヤーのエアトリックではやての前に現れ首を掴んで持ち上げる。

「八神、最終通告だ。俺は次元漂流者ではないし、軌道六課の人間とは会っていない。分かったな？」

「あん、たも……随分、分からず屋、な人なんやな。次元、漂流者は……保護する、て決まりが……」

片腕で宙吊りにされているにも関わらず、はやてはあくまでバージルの説得しようとする。

だがバージルは溜め息を吐くと、これ以上は無駄と悟ったのか、はやての首を掴んでいる手に力を込める。

「かつ……はう……」

はやては苦しそうに足をバタバタさせるが、バージルの方が背が高いので足が着くこともなく、だんだん動きも弱々しくなってくる。

「いっそ、このまま殺してやろうか？」

バージルがさらに力を込めようとした刹那、ピンクと金の光がバージルの縛り首に剣と鎚が当てられる。

「これ以上やるならば、それ相応の手段を執らせてもらう」
「はやてを放しやがれ！」

なのはとフェイトのバインドによって全身の自由を奪われ、首にはシグナムのレヴァンティンとヴィータのグラーフアイゼンが突きつけられている。その状態でもバージルはあくまで首を絞め続ける。

「放せって言ってるだろー！！」

ヴィータが上に振りかぶって下ろすが、バージルは一瞬でドアの近くに移動すると体を縛るバインドを力ずくで破り笑う。

「ハハハ、今のは貴様の油断が生んだ事故だ。次からはせいぜい気を付けることだな」

言い終わるとバージルは閻魔刀でドアをバラバラに斬り裂き出て行った。

はやては苦しそうに咳き込み、シグナムが背中をさする。他のメンバーが心配そうな顔をするなか、はやては笑顔を作って頷く。

「私は大丈夫や。せやけどあの人は危険すぎる。みんな、バージルさんを捕まえて私の所に引っ張ってきてや！頼むで！」

『了解！！』

はやての言葉の後、前線メンバーは消えたバージルを探しに出向いた。

施設内をバージルは駆け抜ける。とりあえず情報が欲しい。だがヴィータから教えてもらうのを忘れていたバージルは自分の行動に思わず舌打ちをしてしまう。

あのままいてもいずれ閻魔刀を没収されただろう。そうなれば勝手にイジられないとも限らない。この世界の科学力がどの程度かは知らないが、スカリエッティが使ったような機械を造れるほどだったら絶対に閻魔刀をイジろうとするに違いない。

（それにしてもスカリエッティ……奴は一体何処に行ったんだ……）

行く宛もなく走っているが、蒼いコートに銀の髪という出で立ちはこの上なく目立つ。そのため、しばらくして一つの部屋に入った。中は随分広く綺麗に整頓され、ダブルサイズのベッドまで置いてあった。

だが、ここでバージルはミスを犯した。

「ねえねえ、おじちゃん誰？」

部屋に人がいることを確認せずに入り込んでしまったため、気が付くとバージルの蒼いコートの裾を少女が掴んでいた。

一瞬にして少女の首に閻魔刀を当てると鋭い目で威圧するバージル。だが少女は何も分かっていないのか、にこやかに笑ってもう一度尋ねてくる。

「おじちゃん誰？ どうして、このお部屋にいるの？」

左右で色の違う瞳で、じっとバージルを見ってくる。だがバージルは、そのあまりにも無垢で穢れを知らない瞳を見ていられなかった。

己で望んだとはいえ、自分は彼女とは全く違う。裏切りや俗に言う七つの大罪の感情を経験し、さらには悪魔と渡り合うために非情なまでの冷酷さを手に入れた。そのお陰で力を手に入れたが、まだ足りない。そうやって果てなき力を追い求める因果にバージルは囚われてしまった。いや、彼自身で囚われているのだ。

バージルと彼女では何もかもが違いすぎる。面白いほど全てが真逆なのだ。彼にしてみれば全く面白くないが。

「すまん、邪魔したな。それと俺はまだおじちゃんなんて言われるほど年はイってない」

とりあえずそこだけでも否定すると闇魔刀を納めバージルは踵を返してその場を去ろうとするが、幼女は未だにコートの裾を掴んだままだった。バージルが怪訝な顔で幼女を見ると彼女は屈託のない笑みを浮かべ言う。

「一緒に遊ぼう！おじちゃん！」

俺は一体何をしているんだ……。

遊ぼうと言われた当初はガン無視するつもりだったのだが、

『遊んでくれないの……？』

あのままにしておけば確実に泣かれていた。子供の頃から女性を泣かしてはいけないとお袋に言われていたためか、条件反射であや

しにかかってしまった。

それに泣いてしまえば、それを聞いて誰かがやって来るかもしれない。邪魔だてされれば斬り伏せるが、ヴィヴィオの健全な成長を著しく阻害するだろう。

この子には俺のような道を歩んでほしくはない。まだ会って間もないがそう思う。

因みにお互い名前の交換をしたわけだが、まずかっただろうか。

「おじちゃん、もっと〜!」

「耳元で大声を出すな。あと俺はおじちゃんではない」

現在、俺はヴィヴィオの遊び相手になっている訳だが……子供の相手というのは、なかなかハードワークだな……。

「ヴィヴィオ、少し休ませてくれ……」

「えゝ、少しだけだよ?」

ようやくヴィヴィオから解放され一息つくと視界に、この世界の新聞と思われるものが入って来た。何気なく手に取るが、何て書いてあるのか殆ど分からない。字体は英語に似ているのだが……。

それでも諦めず何とか読もうと四苦八苦していると、それを発見した。

「これは……!!」

そこには探していた男の顔がアップで撮られていた。

辛うじて判断できる内容から奴が捕まった事、そしてその場所も覚えた。

「悪いなヴィヴィオ、俺はもう行かなくてはならない」

「ええー！ヤダ！もつと遊ぶ！」

ヴィヴィオが駄々をこねるが、生憎それは想定済みだ。

「今度来たらまた遊んでやる。それまで楽しみに待ってるといい」

きっとそれは無いと思うが、こうでもしないと泣きだしかねないので言う。

……嘘を吐くのは慣れている。これはヴィヴィオを悲しませないための優しい嘘。

「ではな、ヴィヴィオ」

「絶対遊んでね！おじちゃん！」

最後の最後までおじちゃんか、とツツコミをいれつつ俺はその場を後にした。

「ここか……」

目当ての男が捕えられている拘置所に来たバージルは閻魔刀を構え、音もなく侵入して行った。

バージルは自身の足運びと能力で突き進む。その身のこなしは影の如く静かに、だが確実に男を目指していった。

そして見つけた。その男は牢の中に居ながらまるで苦にしていな
いかのような表情で看守を視ていた。その表情を苦々しく看守の男
は見ていた。

バージルが看守の死角、かつ男の見える位置に移動すると男は牢と通路を隔てる分厚い透明板に近寄り叩く。

「おい、うるさいぞ！一体何の用だ！」

その行為が気に食わなかったのだろう。看守は牢内と会話できる受話器を取ると怒鳴り散らす。

その様を見ながら男は受話器越しに呟く。

「看守君、職務に忠実なのはいいが周りを見る事をお勧めするよ」
「何！それはどういうー」

男には最後の声が聞こえなかった。看守の後ろから近付いたバージルが閻魔刀を抜き放つとともに横に一闪、右から逆袈裟に一闪。それにより看守をしていた男は瞬く間に物言わぬ肉塊に変えられた。男は乾いた拍手でバージルの速技を讃える。

「いやあゝ実に見事。その速技を私が捕まる前に見せてほしかったね」

「皮肉を言えるほど元気なら此处で一生暮らせばいいんじゃないか？」

「冗談はやめたまえ。こんな所で最高の頭脳をくすぶらせておくなど、それこそ犯罪だと思うが？」

男は肩を竦め、やれやれと溜め息を吐く。かなり元気なようだと分かったとバージルは閻魔刀を構え腰を落とす。

「下がっている……」

それだけ言うと彼は目にも止まらぬ速さで刀を振り、再び鞘に納

める。その瞬間分厚い透明板に次々と線が走り、ガラガラと崩れた。そして中から男が出てくる。

「ありがとうバージル」

「気にするな、スカリエッティ」

男――スカリエッティは牢から解き放たれた。

「ようやく出られたか……全く、君は今まで何処に行っていたんだい？」

「それは此方の話だ。あの時の黒い鎧の男を覚えているか？」

バージルが促すとスカリエッティはしばらくして思い出したのか頷く。

「ああ……その事なんだが、あれは此方の不手際だったよ」

「と言うと？」

「君をもといた世界に送った時、君は私達の時間軸から三日後にやってきた。あの後そのズレが気になって調べてみたら大当たりだ。見事にあの機械は壊れていたよ。時空間軸が常に流動し不安定だ」

スカリエッティは熱弁を振るうが、バージルにはさっぱり分からなかった。その様子を見たスカリエッティは「要するに」と話をまとめる。

「あの男は君をこの世界に連れて来た時に偶然繋がってしまった君の世界の住人という訳だ」

「あいつが俺の世界の……」

言われてみれば、確かに彼が使った魔力の雰囲気はどちらかと言

うとバージル達の使う魔力に似ていた。

「分かった。理由はどうであれ一区切りついた。次は俺の要望を聞いてもらうぞ？」

「要望？」

スカリエッティが興味深そうに聞くと、彼はギュッと右手を握りしめて答えた。

「力だ。貴様は手伝えば力をやろうと俺に持ちかけてきた。順番は違うが俺の望みをかなえてもらう。その上で貴様の願いを――」

「いや、構わない。私の望みはいいから君の望みをかなえよう」

怪訝な顔をする彼に科学者は言った。

「私の願いは一度管理局に阻止されている。再起を図ろうにも大方の戦闘機人は投降してしまった。ならば君の望みを私の望みと置き換えてかなえて見せよう。……何よりそちらの方がより楽しいだろう？」

期待に目をらんらんとさせるスカリエッティにバージルは鼻で笑うと「好きにしろ」と言って辺りを見渡す。

「とりあえず此処を出て一旦貴様のアジトに行く」

「それは構わないが、そのまえにこの施設に居る戦闘機人を出してはくれないだろうか？」

「構わん。いまさら何人増えようと……」

そこでバージルは上を見る。そこには二人を見つめる無機質の眼が。

「もうバレてしまったしな……」

バージルの言葉と同時に拘置所全体にアラームが鳴り響く。

「I t ' s b e g i n . . . 」

「なのは、見つかった？」

『ううん、全然ダメだよ、フェイトちゃん』

未だバージルを探している機動六課前線メンバー。既に隊舎内は全て探したのだが彼は全く見つからない。

『くっそ！あの野郎、はやてにあんな事しておいてただじゃおかねえ！！』

『逸るなヴィータ。私とて、主はやてにあんな事をされて黙っているわけにはいかない。見つけ次第レヴァンティンの錆びにしてくれる』

いきり立つヴィータに普段は冷静なシグナムも同調する。そこには、はやてを守る騎士としての顔があった。

フォワードメンバーが舎内を再び見回り、隊長陣が空からバージルを探しているが全く手がかりが無い上に宛てもない。ロングアイチにも協力して探してもらっているが、いかんせん彼の魔力はフェイト達の魔力とは何処か違うため探知しにくいらしい。

焦りだけがフェイトの心を満たしていく。非殺傷が出来ない武器を持ち歩き、その武器の扱いが巧く挙げ句の果てに武器自体にも魔力結合を阻害する力があるのでは、並の魔導師では太刀打ちどころか防御すら難しいだろう。

（一体何処にいるんですか、あなたは……）

フェイトが神妙な顔付きで空から見下ろしていると、なのはから通信が入った。

「なのは……？」

『フェイトちゃん。少し落ち着こう？焦ってもミスしかないよ』

なのはがモニター越しにフェイトを諫める。言われてフェイトは気付く。

確かに今の心を埋めているのは焦燥感。言われるまで気付かないあたり相当思い詰めていたようだ。

『頑張ろう？私達には市民を守る義務があるんだから。それに果報は寝て待って言うでしょ？』

「そうだね……。なのは、ありがとう」

『そんな事ないよ』

なのはに言われフェイトは考えを改める。何も焦りすぎることもない。今自分がするべき事をすればいい話だ。

そう思うとフェイトは幾分心に余裕が生まれた。

（ありがとう、なのは。なのははいつも優しいね）

不意にフェイトの脳裏に鮮明に蘇る懐かしき記憶。

(昔からそうだった……)

勇気を魔法に込めて戦う少女は孤独に囚われていた少女を救い、友達になろうと言ってきた。

愛する主のために約束を破って主を救おうとした騎士達に、助けられるかもしれないと言って本当に助けてしまった。

(そんなのはだから……一番ツライのはなのはなんだよね?)

他人の痛みを自分の痛みのように理解できる彼女は強い。だからこそ彼女は一番傷つく。

(だから決めたんだ。なのはが傷つくなら私も一緒に傷つくって……)

フェイトの瞳には決意の色が見られる。

そして待ちに待った彼の居場所を知らせる通信。

『みんな、スカリエッティがいる拘置所から連絡や!』

はやてからの通信に一同が息をのむ。

『次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティが脱走。その際蒼いコートを着た銀髪の男が看守を斬って逃走を手助けたそうや! 今拘置所にいた陸士部隊が応戦中、六課に応援依頼が入ったんよ。機動六課はこれより陸士隊の応援に向かうで!』

『了解!!』

はやての指示を受け取った時、真っ先に動いたのはフェイトとシ

グナムだった。

二人は分隊名通り雷の如き速さでスカリエッティのいる拘置所まで飛んでいった。

「はあああっ！！」

群がる魔導師を斬り倒しながらバージルはスカリエッティを連れて突き進む。

魔力弾の狙いは的確で、よく訓練されているのが見受けられる。だがそれでもバージルを捕らえるには至らない。エアトリックで距離を詰めて斬りかかるため、魔導師は相手にし辛いのだろう。物の数分で、その場を完全に制圧した。

「ふん。口ほどにもない。もう出ても大丈夫だぞ……」

「いやはや、全く君は強いな。それだけ強くてまだ足りないのかい？」

隠れていたスカリエッティが出てきてバージルに問うと、彼は振り返って力強く頷く。

「当然だ。力が無ければ何も守れない。言い換えれば力があれば平和も自ずとやって来る。俺は俺のような奴を出さないためにも力による平和を創る！」

珍しく語尾を荒げるバージルを不思議な物を見るような眼差しでスカリエッティは見つめる。

無限の欲望と名付けられたスカリエッティと似て非なる存在。さながら無限の剣魔と言うべきか。

（やはり彼は興味深い。嗚呼、一度バラバラにして髓まで調べてみたいな……）

スカリエッティの研究者としての炎を意図せず焚き付けたバージルだったのだが、急に彼が通路の奥を見やる。

つられてスカリエッティも見ると向こうから女性が歩いてきた。ショートカットにした灰色の髪。開いているのかわからない狐のように細い目。着ている服はスバル達と同じ茶色い服、恐らく陸士隊の人間だろう。

「スカリエッティ。死にたくなかったら俺の前に出るなよ……」

その女性を見たとき、急にバージルの目が鋭さを増した。まるで数年来の仇を見つけたかのように。

女性は辺りに散らばる魔導師の死体を見ると、その場には似合わない朗らかな口調で話す。

「ずいぶん派手にやりましたね。こんなにバラバラにしてまあ……」

話しながら女性は常にバージルの一点だけを見ている。その目線を追っていくとそこには血の滴る閻魔刀があった。

「申し遅れました。グラナ・ダリアスと言います。以後よろしくお願ひします」

馬鹿みたいに丁寧な口調で話すグラナをバージルは怪訝な顔で睨む。

そんな彼を愉快そうに眺めながらグラナは告げる。

「しかし本当に悪い子ですね。お仕置きが必要なようで。……カンヴィクト、セットアップ」

「おうよ！」

声に反応して腕にあるアクセサリーから軽い口調の男の声が響くと彼女の体を光が覆う。光は炎を連想させるような赤い服に変わり、黒い籠手と胸当てが取り付けられ、その場に一輪の赤い花が咲く。そして手には奇妙な形をした武器を持っていた。見たところ槍に近いが、穂先に三日月型の刃がくっ付き見方によっては斧に見えなくもない。

おおよそミッドチルダでは見ることがないのであろう形状の武器だが、バージルは以前これに似た得物を見たことがあった。

「戟げきの類か……」

バージルが呟くと目敏く聞きつけた女性が拍手する。

「お見事です。まさかこの世界に初見で武器の種類を当てる人物がいるとは……。これって凄いことですよ？」

おどけて言うグラナを注意深く見ていたバージルだったが、その心中は複雑な気分だった。

彼がグラナから最初感じた気配、それはこの世界に来て初めての悪魔の気配だった。だが彼女自体からは悪魔の気配がしなかった。しかし戟が出てきてから、辺りに濃厚な悪魔の気配が漂い始めた。それは彼の所持する魔具に似た気配だった。

確信にも似た感情がバージルの口を勝手に動かす。

「貴様の持つ武器、魔具だな？」

「さあ？どうでしょうかね」

煙に撒くように言うグラナだったが、バージルには分かった。彼が魔具と口にした時、僅かに表情が崩れた。こうして話している今も張り付いたような笑みを浮かべているため、余計にその瞬間が顕著だったのだ。

魔具は多いに越したことはない。バージルは閻魔刀を彼女に向ける。

「貴様にそれは使いこなせん。大人しくコッチに渡せ」

「それは残念。私は十分使いこなせていますよ？それに貴方じゃ役者不足ですね」

笑みを浮かべる顔から意外な毒を吐かれるが、彼は全く気にせず右手の刀を下げる。

「もう一度言う。それを渡せ」

「丁重にお断りさせていただきます」

「そうか。なら……」

声のトーンを落とすとエアトリックで一気に彼女の背後に回る。

「動かなくなった死体からもぎ取るまで」

そして一瞬の気の弛みもなく閻魔刀の斬撃を見舞う。

1 Flux 1 漂う魔の香り（後書き）

感想で前回のバージルが丸すぎるとの指摘がありました。

はい。確かに前回は書いてて違和感を感じました。と言うわけで今回はリベンジを込めて書きました。バージルがツンツンしてるって思うのは僕だけですかね？

バージルの闇魔刀は質量兵器にしたくない！なんとかそうならないように頑張ります！

前回の辛口評価を生かしたつもりです。何かおかしい点があったら教えてください！お願いします。

「まさか悪魔なんて事はないでしょうね……？」
グラナ

「……私はあなたと話がしたいんです。局員としてではなくフエイ
ト・T・ハラウンとして……」
フエイト

「……化け物め……」
シグナム

「「伝説の魔剣士は再臨した……」」
バージル

「更新遅くてスイマセン！」
観察者

次元ごと斬り裂くかのような、なぎ払いがグラナの首を刈る。完全な死角からの不意打ち。にも関わらず、グラナは後ろを向かず戟で閻魔刀を受け止める。そのまま、ギリギリと鏢競り合いをする二人。

バージルが動く。四方八方から、ほぼ同時に思えるような斬撃。それらは総じて必殺の威力を孕み一撃当たただけでも、その部位を斬り落とすぐらい訳ない。

だが、その全てをグラナは防ぎきる。ほぼ同時の攻撃と言っても、得物が一本では当たる瞬間は一太刀である。バージルが先に振った方から弾くようにしてグラナは凌ぐ。

埒があかないと感じたバージルは一旦引くと、再度駆ける。

「あまりナメないで下さいよ？」

突撃。バージルは蒼い弾丸となってグラナに突っ込む。その突撃を戟の穂先による鋭い刺突で迎え撃つ。

空気を斬り裂くような刺突だが、バージルはそれを紙一重で走りながらかわすと、

「うおおおおおっ！！！！！！」

がら空きになった胴体に閻魔刀、さらには幻影剣をも使った怒涛の連撃を繰り出す。銀の刃が煌めき、薄青色の幻想が踊り狂う。それはさながら熱気に包まれたコンサートのようなでもある。

このままでは不味いと悟ったのかグラナは連撃の最中、無理矢理バージルから離れる。だが逃がすまいと踏み込み追撃しようとした刹那、彼はグラナとは逆の方向に吹き飛ばされた。

驚愕の念と痛覚がバージルを苛む。僅かに遅れて雷鳴のような音が響く。

痛覚が示す場所を見れば、右腕がズタズタになっていた。まるで散弾銃に撃たれたかのように。

視界を前に向けると、彼女の手には普通のショットガンより二回り大きな物が握られていた。

バージルが追撃する前。いち早く体勢を立て直したグラナは、ショットガンを取り出すと走りの勢いを乗せて撃つ、という荒技をやったのけた。

「ふむ。思いつきにしては、なかなかの威力ですね。……ガンステインガー、とても名付けましょうか」

ショットガンによって傷つけられた右腕は早くも再生に向けて動き出している。だが、グラナは素早く接近すると残りの三肢も同じようにショットガンで撃ち抜く。あっという間にバージルの四肢は銃弾によって無残に食い散らされた。

だが彼は理解できなかった。いくらショットガンとはいえ魔力の籠もっていない弾ならば、すぐに治るはずなのだ。しかし今は何故か回復が遅い。魔力によって回復を阻害されているとしか考えられない……。

「理解できない、といった顔ですね。まあ無理ありませんよ」

倒れているバージルに銃口を向けたままグラナは笑っている。そこには哀れな生き物を見ている時のような目があった。

「貴方が察した通り、これは私の相棒であり魔具です。この子は高性能でしてね」

自分の戟を左手に、ショットガンを右手に持ちながら彼女は語る。

「普通なら、このショットガンも質量兵器禁止法に触れる物ですが、この子が魔力で作った弾丸を撃ち出すことで、それを防いでいるんですよ」

自分のデバイスをうつとりした表情で見ながら彼女は嬉しそうに語る。

だが話している間にバージルの肉体も徐々に治っていく。

「今回は偶然、実弾を持ち歩いていましたから存分に使わせていただきました。機動六課からの情報によれば貴方は危険な人物と言うことだったので」

バージルの肉体はもうすぐ完全回復を果たす。そうなれば斬って捨ててやろうと思っていた。

「ですから今の貴方には何もできな——」

治りきった！

バージルは跳ね起きると神速疾駆、彼女を横一線に斬りつける。ドサツと重い物を落としたような音がした。バージルが振り返ると彼女のバリアジャケットは胸の部分が斬られ、存在感のある双丘が僅かに見えている。だが、そこから少しだけ薄い緑色のジャケットも見える。

「やりますね。バリアジャケットどころか、下に着ていた魔力を籠めたジャケットも斬り落とすとは……」

彼女が着ていた薄い緑のジャケットを投げ捨てると、すぐにバリ

アジャケットは元通りになった。

だがグラナは先の光景に驚いていた。そのため思っていた事が言葉として出てきた。

「しかし、こんなに早く傷が治るなんてありえない……。貴方、人間ですか？まさか悪魔なんて事はないでしょうね……。？」

比喩的に“悪魔”と使ったグラナだったが、バージルはニヤツと笑い肯定する。

「そうだ、俺は悪魔だ……。オイ、頭がイってる人間を見るような目で見るな！」

バージルが自らを悪魔と言うと、彼女は可哀想な人間を見る目を向けてきたので、エアトリックで目の前に移動すると右の上段から勢い良く闇魔刀を振り下ろす。

「いえ、別に頭がアレな感じで可哀想だな、なんて同情していたわけではありませんよ？」

「何番煎じか分からないベタな台詞だ、な！」

バージルの攻撃を防ぎ膠着状態になっていたのをミドルキックで吹き飛ばすが、グラナに容易くガードされてしまう。そしてお返しとばかりにサブマシンガンを取り出すとトリガーを押し続ける。

軽快な音と共に何百、何千もの鉛弾がバージルに飛来する。常人ならば数秒で物言わぬ肉塊になる連射速度。だが彼には発射の瞬間から火薬と薬莢が分離する瞬間までの全てが見えていた。

故に彼がこのような行動に出てもさほど不思議ではない。

「そんな銃で俺に傷を付けられると？……貴様こそナメるなよ」

亜音速に近い速さのそれらを同等以上の速さで閻魔刀を振る事により自分、そして後ろにいるスカリエッティを守っていた。

自分に当たる、或いはスカリエッティに当たる弾だけを斬り続ける。そう、あくまでそれだけ。それ以外は例え何処かに掠る程近い弾だろうと斬らない。

そうしている内に、ついに辺りには熱された空葉莢が散らばり足の踏み場が無くなっていた。彼女がカチツカチツとトリガーを引くが、もう弾は撃ちきっていた。

「茶番は終わりだ……」

グラナがサブマシンガンを捨てて前を見ると既にバージルが立っていた。そして、その手には青いヌンチャクが握られている。

慌てて後ろに跳んで距離を取ろうとするグラナだったが、ワンテンポ遅かった。

「Crystal……」

全てを凍てつかせる程の冷気を纏ったケルベロスが地面に突き立てる。その場所から氷柱が迫り出し、彼女の下半身を一瞬で凍らせる。

「And Million Carats!!」

そしてエアトリックで接近した後、足下にケルベロスを叩きつける。クリスタルの時とは比べ物にならないほど爆発的な魔力の奔流が彼の下から溢れる。

その場に美しさと凶暴さを兼ね備えた一輪の氷の花が咲いた。

「これはまた……随分と派手に……」

俺の後ろに下がっていたスカリエッティがやって来る。この調子だと負傷した様子もない。俺はスカリエッティを見ないまま眼前の氷像を見る。

「当たり前だ。魔具とは人の身では所持するだけで害を与えるほど強大な魔を封じ込めた物だからな。素材となった悪魔が上位なほど、それは顕著になる」

「そんな強力な物を一体どうやって手に入れたんだい？」

スカリエッティが興味深そうに尋ねてくるが、この男に言っても解らないだろう。と言うより言いたくない。

「……ただの置き土産だ」

それだけ言って俺は意識を物言わぬダリアスに向ける。

俺もアイツとの戦いで使われたことのある技であるが一回見ただけにしては、かなり巧くできているではないか。

この魔具は自らの魔力と大気中の水をケルベロスの魔力変換によって氷にし、攻撃や防御に応用する。その中でも今のクリスタルとミリオンカラットは上位の攻撃である。何せ食らう前に魔力で体の表面を覆わなければ、あつという間に芯まで氷付けという能力。今のダリアスは、その状態になっている。

しかしこのままではまともな会話すら出来ないため、頭の氷だけを融解させる。

「はっ！っはあ、はあっ……死ぬかと思いました……」

荒く苦しそうに息をするダリアス。ふむ、まだ見ていたいな。もう一度埋めるか。

「待ちなさい。何もう一回埋めようとしてるんですか？」

「嫌か？」

「ええ。今の状態が十分嫌です。早くこの氷を溶かしてください」

全く……たかが氷に閉じ込められたぐらいでイチイチ喚くな。

「では出してやるから質問に答えろ」

「可能な範囲なら」

可能な範囲なら、か。自分の立場を理解しているならそんな言葉は吐けないはずなんだがな……。

「まあいい。ではまず、その戟についてだ。どこでそれを手に入れた」

俺の問いにダリアスはムスツとしたまま黙っている。

「何処で、手に、入れた……」

「くっ……次元犯罪者の隠れ家ですよ……」

一語一句強調しながらケルベロスを、ちらつかせてやるとすぐに吐いた。……どうやらトラウマになったようだな。

「では次だ。何故その魔具を出す前は微弱にしか魔力を感知できなかったんだ？」

先のやりとりで学習したのか今度は簡単に、しかし渋々といった雰囲気で吐いた。因みに雰囲気と言ったが何故雰囲気かと言うと、このような状態でもあくまで笑っているためだ。何処か頭のネジでもトんでいるんじゃないか？

「……魔具の魔力を抑え、デバイスに偽装することによって隠していたんですよ」

しかし考えは、なるほど確かに画期的だ。その考えは無かった。と言うかそんな事が出来るのか。ならば閻魔刀も何らかのデバイスに偽装すればバレないということか。

だが後ろを見れば……どうやらスカリエッティの科学者魂に火が着いたようで、物欲しげにダリアスの魔具を見ている。別に興味が湧くのは構わないが、手をワサワサするのは止める。

「バージル。この氷を溶かしてくれ。その魔具とやらを調べたい」
「後でくれてやるから待ってろ」

貴様は子供か、と突っ込みたくなる。まあいい。現状、今すべき事は魔具の回収である。

「その魔具を渡せ。それは悪魔が持つべき道具だ。人間には使いこなせん」

「絶対にお断りします。これは私の相棒なので」

意志は固いか。ならばやはり死体からむしり取る……これは？

「バインドだ！バージル、グッ……！」

突然、体に魔力でできた縄が現れ、俺とスカリエッティを拘束する。

そして目の前に、テストロッサとシグナムがやって来た。

「ふう、やっと……見つけました」

「手間取らせてくれるな、まったく」

やられたな。監視カメラに映されたから、もしやと思っていたが機動六課にも情報が回っていたか。

「バージルさん。今度はしっかり、私とお話してください！」

「今更何を話すと？俺のことか、闇魔刀のことか。どちらにしろ、もう貴様等と話す理由も道理もない」

「そうやって話を逸らさないください！……私はあなたと話がしたいんです。局員としてではなくフェイト・T・ハラOWNとして……」

……またこの目だ。この連中は一樣にこの眼を持っている。

輝きの衰えることがない希望という光に満ちた目。正義が必ず勝ち、悪は滅びるべきものと信じて疑わない目……。

「自分達の意見押し通そうとする、その傲慢な幻想……思わず完膚無きまでに叩き潰したくなるな……」

いや、いつその事、ぶち壊すか？自分達の信じるものが、如何に薄く壊れやすいものか解らせてやる……想像すると愉快だ。

「待ってください！私は話し合いをー」

「だが生憎、貴様の連れはヤル気満々だぞ？」

俺の言葉を受けてテストロッサが隣を見ると、既に剣を抜いて臨戦態勢のシグナムがいた。

「ちよっ、シグナム！闘いに来たわけじゃないでしょ？」

「何を言っている、テストロッサ。お前が話し合いをしに来たように、私は試合うために来たのだぞ？」

「シグナム！？」

試合う、か。正面から、このように言われたのは初めてだな。大概は問答無用で斬りかかってくるか、その逆か。そもそも悪魔相手に人間のルールを守っているとは勝てるものも勝てなくなる。

「夜天の守護騎士が一人。ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム！」

大きくはない、されど凜とした響きで声を張るシグナム。

そう言えばコイツは隊長室にいる間、ずっとウズウズした目で俺のことを見ていたが、こういう事だったのか……。

「つまり戦闘^{バトルマニア}狂という事か。……良いだろう。名乗られた以上、此方も名乗ってやろう」

とは言っても俺を表現する言葉はあまりない。故に率直に、かつ己への若干の皮肉を込めて名乗った。

「“堕ちた”魔剣士、バージル……」

墮ちた、と聞いてテストタロッサは怪訝な顔をするが、シグナムは気にした様子もなく鋭角的な目で俺を見ると腰を落とす。

「いざ……推して参る！」

「Bring it on…」（かかってこい……）」

その言葉通りシグナムは駆け、俺が迎え撃つ構図になった。

レヴァンティンを一閃するシグナム。その軌道はバージルの叩き斬るように動かされている。

非殺傷設定で殺すことは出来ないが、傷をつけるなどは出来る。その袈裟掛けがバージルの左から来る。そこには一片の迷いもない。

（ふむ、良い太刀筋だ。迷いが全くない。……だが、その剣）
「壊させてもらおう……」

逆手で閻魔刀を引き抜き、レヴァンティンにぶつける。閻魔刀が無惨にも彼女の剣を粉々にする……はずなのだが。

「む？何故折れん……」

レヴァンティンは折れることなくバージルの刀と拮抗しているのだ。

閻魔刀は魔を切り裂く刀。しかしその能力を除いたとしても、単純に名刀である。

太古の昔、一人の剣士によって鍛えられ完成した^{わざもの}業物。その後幾百、幾万もの魔の眷族を屠ってきたそれは、もはやロストロギアに近い。

だがシグナムもロストロギア夜天の書、その主を守護するために夜天の書の力を借りて現界していたため、その力は相当なものである。その相棒もまた並みのデバイスとは比べようもない。

「ヴォルケンリッター、剣の騎士の名は伊達ではない。はあっ！」

受け止めた体勢が悪かったためバージルは押し切られるが、すぐに体勢を立て直して斬りかかる。

罅迫り合いとなるが一瞬で離れ、剣舞が始まる。剣と刀は互いに喰らいあい、削りあう。

力はバージルが若干上。だが半魔のバージルに対してシグナムは健闘している。油断すれば巻き返される可能性もある。

速さはダントツにバージルが上。隙のない身のこなしで立ち回り、細く鋭い闇魔刀はレヴァンティンより空気抵抗を受けにくいいため、それに拍車をかける。

だがシグナムは経験と直感で攻防両方を行う。バージルも人外の異形達と戦い戦闘センスはあるのだが、永遠に近い時の中を主と魔導書のため、戦いに費やしてきた彼女にはバージルが持ち得ない経験がある。

それら全ての経験と知識を今に回しているシグナム。それでもバージルに決定打を与えられない。

しかし、その状況下でシグナムは不思議な気持ちに包まれていた。瞬間の気の緩みが、次には首を飛ばしている。或いは何処かを貫いているかもしれない。にも関わらず内側を満たすのは恐怖や逡巡といった負の感情とは別。むしろ喜びや高揚感といった正の感情であった。

「面白い……面白いぞ。こんなに楽しい気分になるのは久しぶりだ！」

薄い笑みを浮かべながらシグナムは楽しそうにレヴァンティンを振る。常の彼女を知る者ならば、普段と今の差に驚くだろう。実際フェイトも驚きながら、いつ果てるともわからぬ剣舞を見ていた。

（シグナムが子供みたいに感情を表すなんて……）

フェイトの思うとおり今のシグナムは感情をオープンにしているように見える。

「バージル！こんなに楽しいんだ。出し惜しみは無しにしてくれ！」
「貴様、自分の立場等を忘れているな……」

斬り払いと同時に後ろに下がると、バージルは幻影剣を通路いっぱい仕掛ける。スカリエッティは後ろにいるため射程外だが、シグナムとフェイトは射程圏内である。

二人も急に現れた幻影剣に驚き、その間にバージルは右手を上げると振り下ろしながら命令する。

「だったら、まずはこれを捌いてみせろ。急襲幻影剣」

バージルの声を聞くが早く幻影剣はいつせいに通路いっぱい、その身を走らせる。急に攻撃対象にされたフェイトは慌てて通路を飛んで避けるが、いかに狭すぎる。しかもバリアジャケットを傷つけるような攻撃が数多飛来する。

バリアジャケットは個人の魔力量によって強度を変えるが、AA級の魔導師のバリアジャケットとなると相当の強度を誇る。それを傷つけるような攻撃が荒れ狂う。

避けられるものは避け、無理そうなものはフォトンランサーで撃ち抜くが、数が多すぎる。

「くっ、これはマズいかも……」

「テストロッサ！私の後ろに来い！」

フェイトが避けるに苦戦していると、シグナムが叫ぶ。すぐに幻影剣を避けながらシグナムの後ろに移動すると、彼女はレヴァンティンに言う。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

「シュランゲフォルム」

レヴァンティンから電子音が響き、鏢の近くがスライドすると魔力の籠もった弾丸を撃つ。

その瞬間シグナムの魔力が高まり、同時に彼女の剣もその形を変えていく。刃の一つ一つが伸び、まるで蛇シュランゲのように波打つ。

「はあああああっつ！……！！」

鞭のような関節剣になったレヴァンティンを振り回しながら、シグナムは近寄る幻影剣を全て撃墜していく。いきなり形状が変わったことに若干驚いたバージルだが、シグナムに幻影剣が効かないとわかると幻影剣の発射をやめる。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

「シュベルトフォルム」

その時シグナムが関節剣となったレヴァンティンを操って剣を納めると、勢い良く抜き放つ。そこには烈火の如く燃え上がる炎が出

来ていた。

「今度は貴様に逃げ場がないぞ。焼き尽くせ、紫電一閃！」

纏った炎を地面に叩きつけ放射する。燃え盛る炎に巻き込まれれば大火傷は確定だが、バージルはエアトリックでスカリエッティを掴むとシグナム達の後ろに飛ぶ。

「何処に行った……」

「後ろだ。戯けが……」

シグナムの独り言に、わざわざ答えてから閻魔刀を上から振る。シグナムは、とっさにレヴァンティンでガードするが体勢が低くなる。炎は未だ纏っているが、それは魔力によって出来たもの。閻魔刀に触れている部分だけ炎が無い。

「くううっ……」

「ふん。幻影剣を捌けたのは意外だったが、これでチェックメイトだ」

シグナムが力を込めて凌いでいると、刀身からメキツと嫌な音がした。持ち主であり担い手であるシグナムだからこそわかった。その音が何を意味するのか。

「どうやら貴様の相棒は限界のようだな。いっそ一思いにやってやろう」

バージルも音を聞いていたらしく上からの圧力が更に強くなる。今やシグナムは片膝をつき必死に堪えている。

もう少し力を込めれば烈火の将の剣は粉々になるだろう。だが、

そうなることは無かった。後ろから金の鎌が現れ、バージルの不意を突く。とっさにエアトリックで、この戦いが始まった位置に移動してかわす。

「バージルさん。これ以上暴れないでください。でないと、あなたを逮捕しなくてはなりません」

バルディッシュをハーケンフォームにしたフェイトが静かに言う。しかしバージルは失望したような目でフェイトを見る。

所詮同じだったのだ、テストロッサも。自分の信じたことを貫き通すことも出来ない。そんな女が俺を正すだと？

「図に乗るなよ……」

静かなバージルの呟き。しかしそれには様々な感情が込められていたと誰が判っただろうか。

「ふう、全く。やっと出られましたか。助かりましたよ、シグナム二等空尉」

聞こえてきたのは先程まで戦っていたグラナの声。見れば後ろにあった氷柱は溶けて水となっていた。左手にはカンヴィクトを持っていたが、右手のショットガンは無くなっていた。

「誰だ、お前」

「最近陸士108部隊に転属になったグラナ・ダリアス二等陸尉です。……それよりも彼の身柄の確保を手伝っていただけませんか？機動六課から要請があったので」

「私達が、その機動六課の人間です」

フェイトが言うところグラナは嬉しそうに笑う。とは言っても、元から笑っているが。

「そうですか。では一緒に手伝ってください。彼はなかなか手強いので」

頷く二人。これにより三人による即興の包囲網が完成した。

「話し合いは終わったか？」

俺の言葉を合図にテストロッサが鎌を、シグナムが剣を、ダリアスが戟を構える。だがマズいな。俺一人なら問題ないが、スカリエッティがいるとハッキリ言って足手まといだ。

「スカリエッティ。ここは俺が押さえる。代わりに貴様が戦闘機人を連れ出してこい」

俺の申し出に奴は驚きの表情をする。まあ仕方あるまい。この状況で動けるのはスカリエッティだけなのだ、妥当な案だろう。

「別に構わないが……バージル、君は忘れていないか？私が科学者だということを」

「だからどうした？科学者だから戦えないと？」

「戦いたくても経験も武器もない。こんな私が局員が枚挙しているであろう場所を一人で彷徨くのは、かなり危険だと思うのだが？」

ふむ……確かにその通りだ。だが一度潜入した場所にもう一度潜入するとなると、難易度が跳ね上がる。やはり今回で全て終わりにしたい。しかし、どうするか……。

前後で相手に挟まれているため、かなり気を使って警戒していると偶然、懐にある魔力で圧縮していたそれらが目に入った。その瞬間、頭の中で次々と必要なパーツがくつつき、一つの答えとなった。

「……待っている、スカリエッティ。今これ以上に無いほどの護衛を着けてやる」

スカリエッティが意味不明と顔で訴えているが関係無い。さあ、うまくいくか否か。

光り輝く球体を取り、宙に投げて呼ぶ。頭が硬く、武人のような性格の二体の悪魔の名を。

「アグニ、ルドラ！」

呼応して床に突き刺さる二本の剣。それを持つと、スカリエッティのいる場所に投げる。驚くスカリエッティを尻目に呟く。

「集え、肉片。朽ちた軀からだに再び肉を――」

俺の言葉を受け、ピクツと双剣が震える。微弱ながらカタカタと音も響く。

「染まれ、魂魄。堕ちた魂に更なる闇を――」

震えながらアグニが熱を、ルドラが風を放ち出す。

「浮かべ、思念。縁えにしの淵ふちより意識おこを熾おこせー」

先程までの面影が全くないほどアグニは燃え盛り、ルドラは豪風を纏まとっている。

その場にいる全員が驚いているが、別に構わん。詠唱はもう終わる。

「再び受肉し、我が手足となれ。我が名を以て力を振るい、炎風の洗礼ゆりをもたらすことを赦ゆるそう」

言い終わると、その場に首のない人型の悪魔、アグニとルドラが現れる。どうやら成功したようだな。

「主バージルの名によって」

「魔具より現界し、力を振るう」

「「主が為に剣を執ろう」」

頭に浮かぶ言葉を紡いでみたが、あながち問題は無さそうである。強いて言えば全魔力の半分が二体にかけていたが。

「アグニ、ルドラ。此処はいいからスカリエッティを護衛しろ。詳しいことは本人に聞け」

「「御意」」

右手を左胸に当てて忠誠の意を示すと、二体はスカリエッティの左右にピッタリ張り付く。

「バージル。これは一体……」

「気にするな。貴様は自分のやるべき事をしろ」

俺の顔を見るスカリエッティ。しばらくして分かったのか、スカリエッティは頷く。

「では活路を開いてくれ。グラナの奥の通路にウーノ達の房があるのでね」

「問題無い。貴様は隙を見て走り抜けろ」

考えが纏まったところで周りを見る。テストロッサ達は、いきなり現れた異形に驚いて浮き足立っている。だが、ダリアスは特に変わった様子もなく冷静に戟を構えていた。

狙うならば今が好機。ダリアスのいる場所に狙いを定めて閻魔刀を振る。振られた閻魔刀は次元を斬り裂きダリアスのいる場所を襲う。

ピシッとガラスが割れるような音がしてダリアスを斬り裂く。だがダリアスは血を流しながら俺に向かって突っ込み、戟は唸りを上げて俺を襲う。横に避けたため、空振った戟は床を縦に割る。間髪入れずに回し蹴りを背中に叩き込み、テストロッサとシグナムがいる場所に吹き飛ばす。

「今だ。行け、スカリエッティ」

「すまない。君も気を付けたまえ」

スカリエッティは一回だけバールを気遣うと奥の通路に駆けていった。

それを見届けた後、俺は通路を塞ぐように真ん中に立ち尽くす。一方テストロッサとシグナムも、ようやく気が付いたようでダリアスと並んで構える。

「何ですか？さっきの召喚魔法は」

「召喚？さあ、何のことだろうな……」

テストロッサが言及してくるが軽くあしらう。いちいち、つき合っ
てはいらんからな。

「これ以上、貴様等とつき合っ
てはいられん。一気にキメてやろう」

一瞬で片を付けるため準備する。使用する武器？闇魔刀は違
う。今必要なのは鋭く軽い一撃ではなく、鈍く重い一撃である。そして
俺の手持ちの中で一番それを体現している魔具はただ一つ。両手両
足に光が溢れ、ベオウルフが装着される。

そして内に眠るトリガー。それを意識し、魔力を爆発させるよう
なイメージで引く。

辺り一帯を吹き飛ばすような突風が起こり、全身を魔力が駆け巡
る。魔人となった今、出来ないことはほとんど無い。

脚部に力を込め爆発させる。一瞬でシグナムの前に躍り出ると同
時に右ストレート。とっさに防御したシグナムだったが十メートル
ほど後ろに吹き飛ばす。

次に間髪入れず左足を使った後ろ回し蹴りでテストロッサを横一
閃に刈るが、しゃがんでかわし魔力で出来た鎌で、がら空きの胴体
に斬りつける。だが魔人化のおかげで傷はつかず、逆に容赦ない拳
を叩きつける。

「プロテクション」

男の電子音が響いた後、テストロッサを守るように障壁が現れる
が関係無い。障壁と激突するが全く力は落ちず、障壁は粉々になり
テストロッサも吹き飛ばす。

最後はダリアス。戟が唸りを上げるが真っ正面から左の拳をぶつ

ける。膠着は一瞬。すぐに俺は両手足を使った殴打、ダリアスは戟を肉体の一部のように振りながら攻撃する。戦ってみてわかる、コイツは戦い慣れている。何より空間把握が上手い。エアトリックで隙をつきベオウルフで殴りかかるが、それが極まらない。

「とった！カンヴィクト、カートリッジロード！」

「遅えじゃねえか！待ってたぜ！」

ガシユンと弾が一発排莢されダリアスの魔力が高まる。

「義槍連閃！！」

そして戟を今までにないほど早く突く。その連撃は魔人化しているにも関わらず確実に傷をつけていった。

「「ナメるなよ、雑魚が！」」

魔力を一気に解放し、さらに速く動く。もともと挙動が遅いベオウルフだが、魔人化の影響で動作が速くなっている。ベオウルフによって強化された脚力を利用し、前回転の連続蹴りを繰り出す。

「「はああああっ！月輪脚！！」」

ダリアスの戟にぶつかる度にベオウルフの属性によって強烈な光を放つ。……しかし魔人化とベオウルフのパワーを以てしても押し切れないとは。やはり魔具は侮りがたい……。

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

「了解」

月輪脚から拳と蹴りを繰り出していると、ダリアスの背後からシグナムが飛び出す。その手には先程より烈しく燃え上がる炎が宿っていた。

「紫電……一閃!!」

ダリアスが上体を下げ、空いたそこに業火を纏った斬撃。それは魔人化している俺の体を袈裟掛けに斬り、傷口から血が吹き飛び炎によって蒸発する。

「くっ……」

普段なら、こんな傷はありえない。魔人化中は体内の細胞が活性化し傷はすぐ回復する。だが今は傷の治りが遅い。明らかに魔力不足だ。やはり魔力の半分割は失敗だったか……。

「サンダーレイジ!!」

体を金の縄が縛り電撃が襲う。はっきり言おう、非常にヤバイ。何がヤバイかと言うと圧倒的に魔力が足りない。さすがにこの人数相手だとキツいな。もう負けるのも時間の問題……。

「ふん!!」

ベオウルフが着いている右手で腹を殴る。その痛みがへばっていた俺の意識をクリアにする。

負けるのも時間？何をふざけたことを考えているんだ？力を求めると言っておきながら、この程度の障害も乗り越えられないのか？違う。このような危機、魔剣士なら乗り越えて当然。親父とて、このような事態はあったはずだ。そう考えれば、この事態を乗り切

る事は親父に近付く事と同義。ならばどう切り抜ける？

ネヴァン？ダメだ、攻撃範囲は最長だが威力が足りない。

ベオウルフ？これは今やってダメだったばかりだろうに。

ケルベロス？確かに範囲もなかなか、手数も多いが、やはり威力不足が否めない。

ならば残っているのは閻魔刀のみ。一番使いやすく、魔を喰らうので守りにも使える。後は“命を燃やせば”なんとかなる。見せてやろう、俺の第二形態を。

残った魔力全てを体内に巡らせる。後先考えず全てを籠める。

黒い鎧に身を包み、頭部を守るは雄々しき兜。通路を埋め尽くさんばかりに背中に生えた禍々しい翼。全てを飲み込み押し潰す魔力が辺りに満ちる。

「はああああ……」

前回と違い、今回は意図的にやってみたが、悪くはない。どこから来るのか、全身を心地良い魔力が巡る。恐らくコレを解除すれば立つ事すらままならないようになるだろう。だがあくまで解除すれば、の話だ。その前に叩き潰す。

「な、何……あの姿……」

テスタロッサが驚愕の声を上げる。見れば、そこには恐れおののく顔があった。

「まだこんな策^てを持っていたのか……化け物め……」

シグナムが毒づく。そう、人の目から見れば化け物だろう。だが分かる者が見れば、コレは完成形であることに気付くだろう。

「伝説の魔剣士は再臨した……」

思わず呟いてしまった。と言っても容姿しか真似ていないが……。閻魔刀を見る。それは今まで以上に存在感を増していた。……いける。これならば負ける道理はない。

閻魔刀を構え振り抜く。ただそれだけで閻魔刀は次元を斬り裂き三人を吹き飛ばす。軽く力を込めれば目の前には床に転がっている三人が足元に見える。

「なっ！速い……！」

テストロッサが驚きながらも立ち上がろうとするが、その横腹を蹴り上げる。俺としては軽くしたつもりだが思いの外、テストロッサは吹き飛んだ。何せ天井に一回当たったからな。

「ゲホッ！ゲホッ、ゴホッ……ガッ！」

咳き込みながら四つん這いで立ち上がろうとするテストロッサを踏みつける。軽く力を入れているだけなのだが、何とも大袈裟に痛がるものだ。

「カッ……カハッ……」

「どうした、立ち上がってみせろ」

「テストロッサから離れろ！！」

怒気をはらんだ声とともに炎剣が背中を焼き斬ろうとするが全く傷が付かない。文字通り痛くも痒くもない。

「馬鹿な……！」

「足りんな……今の俺を焼きたければ、その千倍は持ってこい！」

」
振り返りざまに蹴りを見舞う。見事にクリーンヒットし、シグナムは壁に激しくぶつかると剣を落とし力無く崩れ落ちた。

「後は貴様だけだ……」

残ったダリアスを見ると、奴は困ったような顔をしていた。

「参りましたね……まさか、こうも容易く倒してしまうとは」

「ですが」と言ってダリアスは懷から二丁の拳銃を取り出す。その様はどこか愉快じみていた。

「お二方の仇は取らせてもらいますよ。誰かが傷付くのは、あまり見たくありませんので」

右手に肉厚なりボルバーを、左手にやや小さな（と言っても普通の比べれば二回りほど大きな）オートマチック拳銃を指先で遊ぶように回りに構える。

「こんなにボルバー、魔力で強化しなければ、とても片手でなんて撃てませんよ」

「そこは俺のおかげってわけだ！」

戟から調子に乗ったような声が聞こえてくる。だが今更銃など怖くもない。

「「ならば撃ってみろ。はたして効果はあるかな？」」

「言われなくても撃ちますよ。避けないで下さいね？」

「わざわざ当たる道理はない」

その言葉が終わるや否や唐突に弾幕が張られる。だが今更弾を斬る必要はない。ただ接近して叩き斬ればいい話だ。

あつという間に接近した俺は大上段から閻魔刀を振り落とすが、ダリ阿斯は僅かな動きで横にかわすと右手のリボルバーを俺に押し当てる。

「カンヴィクト。レイジにバースト弾装填後発射」

「Mission complete and burst bullet load...Fire!!」

直後リボルバーの銃口が光り、全身に衝撃が走る。衝撃である程度、後退して撃たれた箇所を見ると白煙を上げていたが傷は無かった。

「あれで傷一つ無しですか……少しへこみますね」

苦笑しながら此方を見るダリ阿斯に今度は脚力ではなく、エアトリックで接近し閻魔刀を振り被る。そしてダリ阿斯がこちらを向いた瞬間、閻魔刀の刃が奴の体を斜めに撫でた。

「これは、困りましたね。……全く反応できませんでした……」

最後まで笑いながらダリ阿斯も前のめりに崩れ落ちた。

「さて、ダリ阿斯にはトドメを刺しておくか」

一番の厄介は今潰しておくに限る。俺がダリ阿斯に近寄り閻魔刀を逆手に持って下ろそうとした。だが、その瞬間魔人となっている

にも関わらず刺すような殺気を感じた。見れば出所は床に転がっていた戟からだった。

「「どうした。急に殺気なんぞ飛ばして」」

今になって何故、殺気を飛ばすのか気になり聞いてみると戟は、すまなそうに口を開いた。

「悪いが、グラナを殺すのはやめてくれねえか？」

「「ほう。魔具が主のために頭を垂れるか」」

頭が何処にあるかは知らんが俺の言いたい事は分かったようで、フンと嘲る。

「確かに道具が頭を下げるってのも不思議な気分だな。……だが、それでも構わねえ。コイツを見逃してやってくれねえか？」

「「面倒な奴が抵抗できない状態で転がっているのに手を出すなど？ そんな上手い話があるわけ無いだろう」」

敵になると分かっている、わざわざ生かしておくなど利点が無い限り普通はやらない。これはどの世界でも共通の考えである。

「そうか。どうしてもグラナを殺るってんなら、その前に俺と戦ってもらおうか」

吹き抜けるように魔力が駆け、戟がカタカタと震えだす。どうやら本来の姿に戻ろうとしているらしい。この魔力量からして相当の力を持った悪魔のようだ。そんな奴と今、事を構えるのはあまり得策ではないと見た。

「……良いだろう。今、貴様とやり合うのは妙手とは言い難い。この場は引こう」

「……そうか。理解のある奴で助かったぜ」

急激にその場が静かになる。どうやら向こうには迎撃の意志はあっても、攻撃の意志は無いらしい。

だがため息を吐いた瞬間、体のあちこちが悲鳴を上げ、激しい倦怠感が襲ってきた。どうやらこれまでの無理のツケが回ってきたようだ。

「……ッ!!」

視界がぶれ、気を抜けば倒れそうになるが、決して辛い素振りは見せず何事もなかったかのように俺はその場を立ち去った。

「ったく。フェイトもシグナムも飛ばし過ぎなんだよ！」

「ヴィータちゃん、落ち着いて。二人が先に着いて戦ってるだろうから私達はその援護に回るんだよ？」

「んなことあ分かってる！ただどうもアイツからは胡散臭いにおいしかしねーんだよ……」

「ふーん。さっきは体を張って止めたのに？」

「ああでもしねーと、そのままバトってたろ？ったく、なのはも、まだまだ子供だな」

「もう、ヴィータちゃん！」

「悪い悪い。……なのは……」

「うん、分かってる……」

「どうやら二人とも、かなり危ないみたいだな……」

「そうだね。フォワードメンバーは出口を固めて待機。私達も上空で待機」

『了解！』

「……それにしても中から溢れてくるの、凄い魔力だね。あれを止めるなら、やっぱり留置場ごと全力全kー」

「なのは、落ち着けえええ!!! 本当にカートリッジロードしようとするなよ!!! 留置場、吹き飛ばす気か!!!?」

「えっ?……ダメ?」

「ダメに決まってるだろーがああああ!!!!!!」

「最近なのはさん、魔王化する頻度高くない?」

「きつとなのはさんも疲れてるんだよ」

「あんたは暢気ね」

『ラケーテンハンマー!!!』

『アクセルシュート!!!』

「……ああ。なんか、あっちでは本気の勝負になってるし……」

「あれでいざという時、カートリッジが無いって言ったらちょっと

困るね……」

「キュー」

「ならばついてこい。泣き言は聞かん」
バージル

「一人でなんでもやるなんて難しいんです。人間には限界があるから」
なのは

「バージル！ テメエは絶対許さねえ！！」
ヴィータ

魔人化が強制的に解除され、視界が安定しない。足もフラつき、腕を上げるのも億劫。しかし歩みを止めるわけにはいかない。

壁に目を向ければスカリエッティの指示か、アグニ達が自分達で考えたのか決られた跡が残っている。どちらがやったのかは知らないが、今の俺には非常にありがたい。

ある程度壁伝いで歩き、俺は荒い息を整えるように深呼吸をする。少し力を試してみたかったという事で、俺はあの姿になったが……少し、いやかなりリスクなDTだ。デビルトリガー

俺の魔力量は膨大である。恐らく魔界の最上級悪魔達とタメが張れるだろう。だがそれを以てしても、アレを長時間続けるには凄まじい魔量が必要になる。とても身の内に内包仕切れるものではない。いくら俺が半分が悪魔とはいえど、もう半分は人間。

これが人と悪魔の境界なのか？　いくら魔血が軀を巡ろうと人血が混じっていれば、純血の悪魔は超えられないのか？

……違うな。そんな事、断じて無い。少なくとも俺はそうではないと信じたい。俺がアレを使いこなせないのも血とは別に、何処か意識の外にある無駄のせいかもしれない。ならば、まずは原因を探そう。

楽な体勢で座り、体の組織に意識を巡らせる準備をしたところで、少しずつ体内に魔力を満たしていく。その過程で、余計に魔力を持つていつている場所を周りと同調させる。

……ふむ。これは、やっていて自分の未熟さを教えてくれるな。下半身からサーチをかけているが、下だけで三カ所も無駄が見つかった。やれやれ、先が思いやられるな……。

それから徐々にサーチ範囲を上にかけていき、しばらくしてようやくサーチが終わった。最終的に全体を合わせて、五カ所も無駄が見つかり修正。恐らくこれなら問題はないだろう。

俺はその場でトリガーを引く。無い魔力をかき集めて再び魔人化するの、なかなか来るものがあるが……。

今度は全体的に目立った変化は無いが、維持魔力が減コストっている。水中を動くときに体にかかる、水圧のような抵抗も無くなっている。

「ようやくコレの実戦導入が出来そうだな。……だがいつまでも代名詞、というのも味気ないな」

気分を紛らわすようにどうでもいい事を呟く。魔人化の影響で体に負った傷は全て回復したが、魔力がさっきよりも無くなった。しかし今更何だ？ 少ないならば極力魔力を使わない戦い方をすればいい話だ。

こんな事を考える辺り、無意識の内に魔人化に頼った戦い方をするようになっていたようだ。ここらで改めないと、いつか手痛いミスをするようになるだろうな。

『主、主よ。何処いづいにおられる？』

脳内に響く畏まった声。コレはアグニか？

「アグニか。今何処だ？」

『おお、届いておりましたか。我らは四人の戦闘機人と合流致して、只今この建物のエントランスに向かっているところである』

「そうか、では俺も今からそちらに向かう。貴様らはスカリエツェイの指示を仰げ」

『御意』

さてどうやら急がなくてはならないようだな。まあいい、敢えてゆっくり行ってやるか。

バージルがエントランスに近付くと壁伝いに鈍い振動が伝わって来た。続いて爆発音と凄まじい打撃音が、互いの存在感を誰ともなく主張する。明らかに誰かが戦っている音だった。

「ふむ。どうやら少し間に合わなかったようだな……」

呑気な事を言いつつ通路から広場に出ると……彼の眼前には、なかなかカオスな空間が広がっていた。

「はあああっ!!」

「てりゃあああ!!」

紫の光が紅の鉄騎を囲むように動き回り、それを援護するように回転する刃が閃く。それを紅の鉄騎は、宙に浮かぶ鉛を叩く事によって弾幕を張り迎撃している。

そして弾幕をすり抜けて来た者は、桜色の弾丸が撃ち落とす。実に連携の執れた攻撃である。

バージルが周りを確認すると、二階の吹き抜けにスカリエッティと青赤の巨体を見つけた。

「スカリエッティ、どんな状況だ？」

「君か。ちょうどいい、君もトーレとセッテに加勢してくれ」

「その前に教えろ。何があって今に至る？」

バージルが問いかけると、代わりにクアットロが答える。

「簡単な事よ。私達が普通にここまで来たら、彼女達がいたってだけ」

本当に簡単な事だな、という台詞は敢えて言わず、バージルはアグニとルドラを見る。

「アグニ、ルドラ。貴様らは何故闘いに行かなかった？」

「我らの任務は彼の者の護衛」

「故に我らが離れては奇襲があった時に対処出来ないと思い、兄者とこのように陣取っていただけ」

彼らの判断にバージルは小さく頷き納得した。実に正しく、自身と考えていた理由とほぼ一致していたからだ。

「よくそこまで考えていた。では命令の上書きだ。エアトリックでは今の高町の所まで届かない。だから貴様らの特徴を活かした戦い方をする。……ついて来れるか？」

バージルのスタイル、ダークスレイヤーDSのエアトリックでは、今なのはがいる場所まではギリギリ届かない。

そこで考え付いた彼の作戦。それにはアグニとルドラ、二体の“風と炎”、そして微妙な力加減が必要になってくる。

悪魔は強大な力を持つ一種一代のものが多い。故に彼らには、さまざまな個性がある。しかし、総じてどれにも言えるのは大雑把な所である。よほど慎重な個体を除いて、大概が自分の力でゴリ押すという、クセと言うには生温い習性がある。

バージルはそれを危惧したのだが、二体の持つ剣は不遜に笑いだす。

「主よ、我ら二人、何処までも着いていく所存」

「我らに気は使わず、存分に我らを振るわれよ」

アグニとルドラが自信満々に言うので、バージルも鼻で笑うと剣を受け取る。

「ならばついてこい。泣き言は聞かん」

『御意!』

双剣、アグニとルドラを構え、その場で舞う。隙のない水のように流麗な動き、タップを踏むようなステップ、扇を手に舞っているかのような身のこなし。それらが惜しげもなく披露される。

戦闘中にも関わらず彼の剣舞は、その場にいる三人の目を奪うのには十分だった。実用を考えず、ただただ“魅せる”ための動きは、弾幕飛び交う広場をバックグラウンドに、実に映えて見える。

ようやく剣舞をやめると、唐突にバージルはアグニとルドラの刃先を下に向ける。

（まず必要なのは風。ルドラの魔力放出を一定量に……）

右のルドラから微弱な風が吹き出て、バージルの体を浮かせる。下に風を吹かすことにより体が浮いているのだ。ちなみに魔力の放出源は彼の持つ魔具のため、彼自身の魔力は全く使っていない。

（次に必要なのは炎。この体勢でアグニを後ろに回すと……）

低空飛行からジェット機のように後ろに炎を出せば、作用・反作用の法則により蒼い矢が宙を駆ける。

一直線に自分に向かってくる事に気付いたのはが、今までの経験からとっさに上体を後ろに反らすのと、蒼い矢となったバージルの双剣がなのはを襲ったのは同時であった。

とっさにかわしたとはいえ、偶然が何度も重なるほどなのはも運がいいわけではない。こんな事は命を賭けた博打に過ぎない。

だがそんな状態でもバージルと向かい合い、話しかけようとするあたり、彼女はなかなか大物である。

「バージルさん！　今度はしっかり私とお話して下さい！」

「貴様と言い、テストロッサと言い、管理局では誰彼構わず交渉するように教えられているのか？」

ホバリングで対峙しながら冷笑を浮かべるバージルに、なのはは憤慨する。

「違います！！　私はただ、頭ごなしに何でも否定するんじゃないくて、それぞれの意見を聞いてみんなが笑っていられるようにー」

「みんなが笑っていられるように？　ハッ、笑わせてくれる。それぞれの意見が果てなく平行を辿るから、力によって簡潔に結ぼうとしているのだ。その状況の話し合いなど、在って亡いような形式のものだろう？」

うっ、と口を閉じるなのはにバージルはトドメの一言を言い放つ。

「貴様が自らの信念に従って生きるのは結構だ。……だが貴様の理想に俺を、他人を勝手に巻き込むな！」

語尾が少し大きくなっただけで、バージルの言葉は終始平坦な口調で動いていたが、なのはの心に波紋を生じさせるにはそれで十分だった。

「ち、違う……私は別に、巻き込んでるわけじゃー」

「いや違うな。貴様の意識の有る無しに関わらず、周りにそう仕向

けている。過去にそれが無かったと断言できるか？」

震える声で反論するが一蹴され、逆に問われる。その問いもまた、なのはの心に一石を投じる。

一度疑うともう止まらない。視界が揺れ、彼女の中で信じていた何かが瓦解していく……。

「なのはアアアッ！！！！！」

崩れかけたなのはを止めたのはヴィータだった。なのはの異変に気づいたヴィータが、トーレとセツテの挟撃にあいながらも怒声を上げる。

「そんな奴の言う事なんて聞くんじゃない！！ 言つとくがな、アタシは一度も巻き込まれたなんて思ったことはねーんだよ！！」

「ヴィータちゃん……」

ぶっきらぼうな言葉だが、ひたすらなのはを心配する気持ちが隠れている。

そこには二人の確かな絆があった。長年共に空を駆けた二人なればこそ、危機的状況下で共鳴できてしまうところがあるのかもしれない。

「なのはの理想も含めてアタシ達は機動六課なんだ！ テメエにとやかく言われる筋合いはねえ！」

だがヴィータの怒声にバージルは、こみ上げてくる嘲笑の念を堪えられなかった。

そのような理想がいつの日か自らの首を絞め、身動き一つできないほど絡め取ると知らない彼女達の青さに、バージルは笑いと共に

……怒りも覚えた。

「貴様らは……」

「――？」

彼はあくまで平静な時のように振るおうと努めた。だがどんなに隠そうと、言葉の端々に苛立ちが見えてしまっている。

「願いや理想を叶えるためには力が必要だということを知らんのか？」

力がなかったからこそ、エヴァ^{お袋}は命を落とした――

「そんな事は知っています！　だからはやてちゃんが機動六課を創ったんです！」

みんなのためにと小さな体に見合わない特訓^{無茶}をした――

「それだけでは足りないと感じた時、もっと力があつたらと思う時が無いと？」

精神面^{メンタル}で負けていたから、ダンテに負けたのかもしれない――

「私だけじゃ足りない時はあります。でも一人で何でもやるなんて難しいんです。人間には限界があるから」

私が頑張れば、みんなが危険に遭わなくてすむから――

「ならば……理想を抱いて溺死しろ」

「溺死なんてしないし、する気もありませんから」

互いに見合う。どちらも理想と力に溺れるかもしれない。だが少なくとも今はない。

先程を以て、口上は終わった。次は互いに魅せあう番である。

「行くぞ……」

バージルがアグニとルドラの角度を変え、一直線になのはに向かう。爆発に似た火力と風力により彼我の距離は一瞬で縮まる。

そして彼女の眼前で一気に上方から背後に回り、落下の速度と合わせて両刀を振り抜く。

だがなのはも負けておらず、高速移動で距離を離すと小さな魔力弾を撃ちまくる。彼女の膨大な魔力にものを言わせた大量の桜の弾幕を、バージルはアグニとルドラの両方を的確に操ることで回避する。

しかし本来空中戦をしない彼にとって、今の状態は些か不利である。なのはの弾幕はカモフラ的な弾をバラまき、その中に自動追尾の弾を混ぜておくという、なかなか考えられたものだった。

そのためバージルは周りを漂うダミー弾に気を付けつつ、自らを狙う魔弾を墜とさなくてはならない。

（面倒だな……）

アグニ達のお陰で動けてはいるが、なのはに近付けない。やはりベストなのはエアトリックで接近してからの閻魔刀。

思うが早く、バージルはなのはの弾幕に正面から突っ込む。自動追尾も周りの弾も突っ切って、彼女に肉迫する。当然、接近するほど弾幕は厚くなるが敢えて行く。

そして一度のエアトリックでなのはに接近できるボーダーラインを越えた時、バージルがなのはの真上に現れ、閻魔刀の居合い斬り

が炸裂する。

主よりも早くそれに気付いたレイジングハートがプロテクト魔法を展開するが……。

「閻魔刀は魔を喰らう。忘れているのなら、骨の髄に叩き込んでやろう」

プロテクト魔法と閻魔刀がぶつかり僅かに速度が落ちるが、そのまま閻魔刀はガードを突き破る。

「フン、外したか……」

落胆とは程遠い冷めた口調で彼は言うが、果たしてそうだろうか？
その証拠になのはの白い髪留めがハラリと落ち、ツインに縛っていた髪がストレートに落ちる。

「……しっかり当たってますから」

「首を落とすつもりでやったからハズレだ」

バージルの言葉の通り、閻魔刀の斬撃が僅かに遅れたことが明暗を分けた。結果、なのはの被害は髪留めを斬られただけだった。

自分のカンに感謝するなのは。だが朝の訓練時にバージルと対峙したときから、彼の強さは分かっていた。

確かに魔を喰らう閻魔刀は厄介だが、一度に喰らう量と密度には限界があるはず。事実、先程の防御魔法は斬られはしたものの、一瞬だが攻撃が遅くなった。

つまり強大な魔力の塊ならば、喰らわれる前にイける事が仮定付けられる。そう考えたなのはは次の作戦に出る。

（まずは距離が必要かな）

魔力弾を撃ちつつ、少しずつ少しずつ距離を離していく。最初になぜエアトリックで移動しないのか考えたのは、バージルの移動距離には限りがあると思いい当たった。なので移動距離を予想し、範囲外ギリギリの場所を彷徨っている。

そんななのはの行動を不審に思うバージルだが、それを念頭に置きつつアグニ、ルドラを巧みに操って接近し、エアトリックで斬る。だがさすがはエースオブエースと言うべきか、通常の攻撃は当たりかけるがエアトリックによる攻撃の時のみ、神がかったような回避を見せている。

（チッ、小賢しい真似を……）

なのはだけなら今までに幾度も隙をついている。問題は、なのはのデバイスである。

彼女のデバイス、レイジングハートが主である彼女ですら反応しきれない攻撃の時、間髪入れずに防御魔法を張る。その時に生じるほんの僅かな時間差^{タイムラグ}を逃さず避けるため、バージルは未だになのはをしとめきれないでいた。

しかし戦う中で、バージルの脳裏にある考えが浮かんできていた。

（認めん。俺は断じて認めんぞ……！）

二人の戦い方はなのはが撃ち、レイジングハートが守るという、自分が他人に頼った“甘え”の戦い。バージルが最も嫌う戦い方であった。

そんな彼は頭の中で浮かんでくる『それ』を否定し続けていた。まさか自分が、他人に頼る事を最も嫌う自分が、『誰かに頼り頼りたい』などと思うはずがない。

そんな事……。

「あるはずがない!!」

突如、語気を荒くしたバージルは今までの精密かつ大胆な動きとはかけ離れた、何かを振り払うかのような攻撃一辺倒の動きを見せてきた。

いきなりの事に、それまでのテンポを崩されるなのは。すぐにバージルの動きに合わせて動き出すが、それまでと違い今の動きは読みやすく組みしやすいものになっていた。

とても同じ人物とは思えない新人の^{ルーキー}ように攻める事しか考えていない。だが今ののには実に好都合であった。

(相手が十分熱くなったところで……)

接近し、その勢いを乗せた回転踵落としを横に移動して避けると、すぐにバージルの斜め上方に飛ぶ。

「なめるな! その程度の動き、目で追えないとでも思ったか!」

ギン、と鋭い刃のような目でなのはを見上げるバージル。だがその眼は普段の^{れいり}怜悯なものではなく、業火の如く燃え上がる何かに染まっていた。

「アクセルシュート!」

何度目になるか分からないのはの魔力弾。バカ魔力とさえ言われた彼女だからこそ、これほどまでに連射ができる。

「戯けが! 相も変わらない弾幕など……何!」

いい加減彼女の弾幕に飽きてきたバージルが双刀で弾こうとしたが、今回違ったのは彼の体に十重二十重にも及ぶバインドが掛けられた事。蒼いコートが見えなくなるほどに桜色の縄が彼を捕らえた。

「味な真似をするな。こんな物、引きちぎってくれる！」

そうは言うものの、右手のルドラで浮いていなければならないため、左腕でしかちぎれない。

それでも彼の常人離れした怪力により、ブチブチとバインドが引きちぎられていく。だがそんな好機を逃すほど、エースオブエースは甘くなかった。

「グッ……貴様アアアア！」

雨のようなと言うには生温い、怒涛の弾幕がバインドで動けないバージルを飲み込む。それらは非殺傷設定でなければ致命傷にもなりかねない攻撃の嵐。

そんな状態でもルドラで飛び続けられたのは、彼の精神力と頑強さがなせたのだろう。

そして一旦弾が途切れた時を狙ってバージルは急いで離脱する。^{アグニ}炎が使えないため浮遊するかのように^{たじたと}辿々しく飛んでいると、またしても魔力弾が飛んでくる。

「同じ手は食わん！」

今度はエアトリックで点移動を繰り返して宙を駆ける。しかし全てが自動追尾なため、執拗にバージルを追う。

そこで彼はルドラによる飛行から、エアトリックと落下を主体にした戦法に変えたため、余ったルドラで迎撃できるようになった。

「フッ、ハッ、ハアアアッ！」

ルドラの斬撃が直に弾を切り裂き、刃から出る風がカマイタチの容量で掃討する。

ヒュンヒュンと風を切る音しか聴こえず、音がなる度に確実に弾が減っていく様は対峙する者に相当なプレッシャーを与える。しかもそれほど速く振りながら、左腕でバインドをちぎる事も忘れていない。

「……ジル！ バージル！ 避けるんだ！」

自分と相手しか気にしていなかったバージルの耳に、突然スカリエッティの声が入った。流し目で視界の隅に入れると、クアットロが彼の位置からでも分かるほど顔を蒼くし、スカリエッティが何かを指さしている。

「レイジングハート、カートリッジロード！」

「Yes, my master！」

なのはの声と女性の機械音、そしてガシャンという数回の排莢音が響く。

バツと前を見ればなのはの杖の前、頭上で周りから少しずつ魔力をかき集めて巨大な桜色の魔力の塊が出来ていく。集中してみれば彼女自身の魔力値が増大している。

これこそがカートリッジシステムの力。予め弾丸に魔力を溜め込み、撃鉄で叩くことで溜めた魔力を爆発させるシステムである。

無論そんな事、この世界に来て一日と経っていないバージルには知るよしも無い。だがそれでもなのはのアレが危険なことぐらいは分かる。

（クッ、こんな事も予想できないぐらい頭に血が昇っていたか……！）

自分にあるダンテ^{ガキ}のような所に反吐が出そうになる。だがそれすらも今は後回し、今すべきは回避行動である。

「オオオオオオオオ！！！」

ルドラを辛うじて飛べる程度の出力で保ちながら、ガラにもなく雄叫びを上げる。あれほどあったバインドも残り数本しかない。後少しで解放される。

「ぬおっ！？」

しかし再びバインドが増えた。なのはには今更縛り直す余裕はない。それを表すように、今のバインドの色は桜の合間に赤が混じっている。

「なのはア！！ バインドは苦手なんだ！ 早くやれええええ！！！」

犯人はヴィータだった。彼女と闘りあっていたはずのトーレとセツテは既に床に倒れ伏していた。

戦闘センスは互いに譲らない。ただ彼女達が閉じこめられていたブランクが、差として出てしまったようだ。

「離せ！」

「死んでも離すか、バカやろうが！！！」

バインドが強化されたことで、また一からやり直さなくてはならないが、そんな時間はもう無かった。

「バージルさんが悪いんです……そう、バージルさんが悪いからお仕置きするんですよ……」

なのはが明るい顔でブツブツ呟きながら発射態勢に入る。

「スターライトオオオオ……」

その一撃は幼き頃、初めて撃った神を模した砲撃の強化版。周りにある魔力をかき集めて撃ち抜く、落星を彷彿させる砲撃と呼べるかどうかとも怪しい魔法。

「ブレイカー……!!」

煌めきは桜花の如く華麗な、されど全てを打ち抜く暴力的な力を秘めた光の奔流がバージルに迫る。

どうする。この状況、何が正解なんだ？ 体は高町とヴィータによって封じられ、眼前には莫大な魔力を内包した砲撃……。

クッ、やはり奴は真性の悪魔の眷族なんじゃないか？ ……いかに、最近軽い現実逃避が多いな。

だが実際問題、目の前の砲撃を防ぐには魔人化しかない。あの魔力量だ、下手な防御ならしない方がマシ……な訳はないが。

魔力はどうにかなる。懐に幾つか忍ばせてある物を使えば大丈夫ではあるが……。

「迷っている暇は無いか……」

直撃コースのど真ん中。回避するにはDT、しかし魔力は未だ足りず。ならば出来ることは一つ。俺が懷からスモールサイズの『ある物』を取り出してそれに喰らいついた直後、高町の砲撃が激突した。

激突した瞬間、凄まじい衝撃が体を駆け抜け、全身を今までで最大の痛みが襲う。

「……………!!!」

ダメだな。生身ではこれに耐えるのは無理だ。恐らく高町の必殺技の部類なのだろう。ならば此方もDTで対抗してくれる。

先程スモールを使ったが、どうせならラージサイズを使っても良かったかもしれない。だが今更遅い！

イメージするのは戦艦ドレッドノートの如き堅固な外皮。全身に魔力を回して体を覆えば、即席にして強力無比な鎧の出来上がりだ。その効果はすぐに現れた。

ギヤリギヤリギヤリと魔鎧を削る音が聞こえる。というかこの効果音は魔法として間違っていないか？

そのまま張り続けていると、ようやく視界をうめるほどの桜色が薄れ消えていった。そこで一旦、俺は下に向けて飛行という名の落下をした。

ドスツと音を立てて着地するが、そのまま崩れ落ちるのは癪なので、そこから気合いで立ちつくす。

「なっ！ あのヤロウ、なのはのスターライトブレイカーを食らってまだ立てるのかよ!?」

「さすがだよ、バージル」

ヴィータがひどく狼狽し、スカリエッティが賞賛する。……まあ、なかなか危なかったが。

俺がとっさに懐から取り出し使った物。それは前に作っておいたデビルスターである。悪魔の血には高純度の魔力が流れている。それを俺の魔力で中和し、いつでも補給できるようにしておいた。

今回はそのうちのスモールサイズの方を使うことになった。これに残るデビルスターは大小一つずつ。

「すごいですね、バージルさん。リミットリリース限定解除が無いとは言え、私のスターライトブレイカーを耐えきるなんて」

「貴様、本当に何者だ？　ただの人間がこんな力を持つはずがない」

俺の質問に、高町は冷ややかに笑いながら答える。

「いえ。私はあくまで、ただのエースオブエースですから」

「悪魔で、の間違いだろう？」

言った瞬間、辺りの温度が下がった気がした。悪魔や魔王といったワードは禁句らしいな。

「どうした魔王殿。まだ悪魔の鉄槌を下し足りないのか？」

「アイツ、本物のバカだ……」と聞こえたが気にしない。熱くなれば、その分攻撃が単調になりやすい。

「バージルさん……」

高町がとてつもなく穏やかな声で呟いている。嵐の前の静けさってやつか。

「少し……頭、冷やしましょうか」

なるほど、高町はキレるとむしろ静かになるタイプか。これはこれで恐怖の的だな。

「貴様で頭が……！」

挑発しようとした矢先、いきなり右腕に激痛が走った。

「グッ！ ガアッ！ アアアアア！！ クソッ！！」

体の内側から突き破られるかと錯覚するような痛みが全身を、右腕を襲う。原因は恐らく、限界を超えた魔力を出し続けたことによる暴走か。

確かに、アレになってDTを使って体に魔力を纏って……。これで何か起きない方がどうかしてる。

バツと痛みが一番ひどい右腕の袖をめくりあげると……そこには異形の腕があった。肘から下が茶褐色に変化し、所々にある亀裂から蒼白い光がボウツと溢れている。

「なっ！？」

思わず絶句してしまったが、腕の変化は進行していく。左手で握り潰すかのように締めあげても、さして意味はなくじわじわ進行する。

（こんな時に……！！ どうする？）

魔力が足りなくて暴れているならデビルスターを使えばどうにか

なるかもしれない。だがあくまで『なるかもしれない』のため、そんな分の悪い賭けには出たくない。

何かないか周りを見渡すが、特に何も落ちていない。あるとすれば懐の魔具と取り落としたアグニ&ルドラ、そして閻魔刀……閻魔刀？

（コイツは……賭けだな）

閻魔刀の鞘から刀身を引き抜くと、一分のためらいもなく右腕に突き刺す。鋭い痛みが押し寄せてくるが、変化はあった。

ゆっくりだった変化が止まり少しだけ後退していった。どうやら賭けには勝ったようだ。

俺のした賭け、それは閻魔刀の能力を使った賭けである。

体内の魔力が乱れているから右腕がこんな事になったはず。ならばその原因の箇所^{私達}に閻魔刀を刺せばどうなるか？

上手くいけば、今のよう^{私達}に右腕の異変が回復、或いは現状維持。下手を打てば、さらに悪化したかもしれない。だが上手くいったから良いではないか。

「バージルさん！ そんな怪我なんかしたら戦いは無理です。戻ってくれば、^{私達}管理局が責任を持って治しますよ？」

高町が何か戯けたことを言っている。本当に何なんだ？ この阿呆は。

「抜かせ。そもそも俺は管理局を根城にした覚えはない」

「じゃあ悪化したらどうするんですか？」

「此方には自称天才がいるんだぞ？ 舐めてもらっては困る」

「でもー」

「くどい。あまり言うならばその口……」

闇魔刀が刺さったままだが使い方が自然に分かる。感覚的には変わらない、ただ右手を伸ばして握るだけ。ただそれだけで、右腕から蒼白い巨大な手が出て高町を握る。

「な、何？ この魔法……」

どうやら高町は魔法と勘違いしているらしい。だが好都合だ、間違った解釈は間違った答えを導きだす。

「アイゼン！ カートリッジロード！！」

「ラケーテンフォルム」

そんな声が聞こえヴィータを探すと、奴はハンマーの噴射で回転しながら高町に近付き、ピックのような先端を激突させる。

「こんのおお！！ なのはを放せえええええ！！！！」

先端のピックがガリガリと右腕を削っていくが、その程度で放せとは笑わせてくれる。

「Break Down！！」

高町を翼をもがれたイカロスよろしく、勢いよく床にぶつける。爆音を伴って床は激しく陥没し、そこから赤い血溜まりが出来ていく。

ふむ、右腕に動きを感じない辺り死んだか、気絶したか。

「なのはッ！！」

右腕を消せば、グツタリとして動かなくなった高町が現れた。すぐにヴィータが近付いて安否を確かめている。

「バージル！ テメエは絶対許さねえ！！」

どうやら無事だったようだ。だが許さねえとは威勢がいいな。

「ずいぶん勝手なことを言ってくれるな。敵を討つと決めて戦場に出たのなら、逆もまた然り。高町とて覚悟を決めて飛んでいるはずだ。それを他人がとやかく言う筋合いも道理も無かろう？」

「ゴチャゴチャうるせー！ んな事関係ねえ、アタシがブン殴りたからやるんだよ！！」

さっきまでの俺と同じように頭に血が昇っているようだ。自分がどれだけ支離滅裂な事を言っているのか分かっていないな。

「全く。貴様はガキか？」

「おう！ テメエをブン殴るためなら、ガキにでも何でもなってるよ！」

どうやら理屈は全く通じないようだな。ならばこの際、徹底的に潰しておくか？ 俺が右腕を引いていつでも前に出せる状態で構えると、ヴィータもハンマーを構える。

「アイゼン！ カートリッジロード！！」

ヴィータの言葉を受けてハンマーが撃鉄を起こして叩く……叩く……叩く……叩く？

（オイ、ちょっと待て。何でカートリッジが装填されねえんだよ）

ヴィータは確かにカートリッジロードと言った。それは相棒が装填された弾丸を起動させるはずの言葉。だが何故か反応しない。

（まさか……な？）

嫌な汗が流れるのを止められないヴィータが弾倉を見ると、見事にスツカラカン。
エンブテイー

（やっぱりかー！ー！！！！）

此処に突入してくる前、上空でなのはとじゃれあっていた時に二人とも派手に使いすぎたようで、見事にカートリッジを使い果たしてしまっていた。

（くそ。啖呵切った手前、これはさすがにないだろ……）

顔には出さず、内心で慌てまくっているヴィータ。しかしそれは見事に彼に伝わっていた。

「まさかカートリッジが無いなんて事はー」

「るせえ！！ テメエは黙ってろ！！」

「……凶星か」

「うっ……」

ハアツと盛大にため息を吐かれた瞬間、彼女の短い堪忍袋の緒が派手な音を立てて切れた。

「テメエが早く見つかりやがらねえから、その間になのはとやってこうなったんだよ!! 悪いか!？」

「逆ギレするな。俺には全く非がない」

淡々と事実を語るバージルの語り口調に、ますますイライラが募るヴィータ。

その他、様々な感情を込めてヴィータはグラーフアイゼンを振るう。

だがバージルは全く取り合おうとせず、エアトリックでトーレとセツテを回収すると、スカリエッティの所に戻る。

「貴様、自分で動けるな？」

「戦闘機人を侮るな。こんな傷ごときで動けなくなるような杜撰なメンテナンスは受けていない」
ずさん

バージルが確認してみるが、トーレはピンピンしていた。セツテも問題無いという意味で頷く。

「そうか。ならば此処から出て、早いところアジトに戻るぞ」
「言われるまでもない」

ヒョイツとスカリエッティ、セツテ、クアットロを担いだトーレはすぐに飛ぶ準備をする。

「あつ、テメエ等! 待ちやがれ!」

「待てと言われて待つ馬鹿はいまい。また会おう、愚かな機動六課

の無能共よ」

罵詈雑言を並び立てたバージルは残ったウーノを背負うとアグニ、ルドラを拾って片手に持ちながらエアトリックを発動。その場から離脱し、トーレもISで後を追った。

「この！！ 待ちやがれえええええ！！！！！！」

血溜まりに沈むのはを背景に、ヴィータは殺気で殺さんばかりに叫んだ。

ああ、ダメだ。全然早い更新が出来ない。月一で更新ってどんだけ遅いんだ……。不定期更新のタグでも加えておきますか。

こんな拙い作品を読み、楽しんでくれる読者の皆様に申し訳ないです。夏休みに入っても更新速度はほとんど変わらないと思います。本当にすいません（汗）

1 Rebellion 異形の右腕には管制人格（前書き）

「姉上……なんとも洒落にならんことを……」
トーレ

「Good! 予想通りの反応ありがとう」

「なっ、これは!? 貴様、謀ったな!」
バージル

1 Rebellion 異形の右腕には管制人格

なのは達を振り切って外に出たバージル一行。既に日も暮れ、辺りは闇に覆われていた。だが一行、特にバージルには好都合だった。闇は、人が根源的に嫌い恐れるもの。何故なら、そこには日の光を逃れ闇でその爪牙を研ぐ者達が、隠れて隙を伺っている事を無意識に理解しているからだ。

バージルも例に漏れず、闇を恐れ恐怖に駆り立てられた事もあった。だがそれはあの日まで。

――力こそが全て――

幼心に悟ったバージルはその日以降、闇に近付いて身をゆだね、覚醒した。己に潜んでいた魔性と対面し力を得た。

その日からバージルは、昼と夜を行き来できる存在となった。つまり闇が拒絶し忌むものから、受け入れ親しむものになったのだ。彼にとって今の暗さは、心地よさ以外の何物でもなかったのだ。そのためエアトリックで動く距離が、どんどん増えていくのをバージルは止める事ができなかった。

今、彼が心地よい殺人衝動に駆られていると知ったら、周りは何を思い、何をするだろうか？

今夜は東の空に良い月がある、彼はそう思っていた。昔から月には狂気に満ちた魔力があり、満ち欠けによっては月の魔力に敏感な人間が、その身を変えろと言い伝わっている。

個人が出せる魔力など、たかが知れている。しかし自然界から発生する、マナと呼ばれる魔力は人や魔術師、それこそ悪魔ですら御しきれない力が眠っている。

空に浮かぶ月が、果たしてバージルの知るそれと同じ物かは疑問だが、徐々に体に溜まっていく月の魔力は、バージルをある種の興

奮状態にさせていた。

（くうっ、ずいぶん飛ばしているな）

IS、ライドインパルスがありながら、それすら越える速さで動くバージルにトーレは驚きを隠せなかった。

彼女は現在、三人もの成人を乗せて飛んでいる。だが彼の速さは、獲物に狙いを定めた捕食動物のそれを彷彿とさせるものだった。

「バージル、少し飛ばしすぎです。トーレ達があんなに遠くに……」

背負われているウーノがバージルの背中を叩くが、気付いていないのか彼は今の速さを変わず維持する。

「バージル、バージル！ ……えいつ」

「ごはっ！」

「きゃああああ！」

あまりにもバージルが気付かないので、ウーノは目の前にある頭をホールドすると勢い良く右に曲げた。

首に勢いをつけて捻ると、弱い首の骨はその衝撃に耐えきれず、耳に残る不快な音と共にへし折れる。要人暗殺などで暗殺者^{アサシン}が無音で葬る時に使われるこの手法が、今まさにバージルに使われたのだ。急に視界がぶれたのと、首に凄まじい激痛が走ったためバージルは近くの木に顔面からぶつかり、その拍子にウーノも地面に放り出された。

「大丈夫ですか、姉上？ バージル貴様、飛ばしすぎるからそんな事故を起こすのだ。少しは周りを見る」

追いついたトーレは三人を下ろすとウーノに手を差し伸べる。ウ

「ノは彼女の手を取って立ち上がるが、バージルがなかなか立ち上がらない。」

「おい、貴様！ 何を呆けている。早く立ち上がれ」

イラついたトーレが促すも、彼に動く気配はなかった。その態度がさらにトーレをイラつかせる。

「先を急ぐ身でありながらその体たらく……貴様、一遍死んでみるか？」

「はいはい。トーレお姉さま、そんなに怒らない怒らない。あんまり怒ると皺が増えますよ？」

見かねたクアットロがトーレを制したが、その一言に彼女は苦虫を噛み潰した表情をした。

だがクアットロは特に気にした様子もなく、バージルに近付いてしゃがみこむと、猫なで声で諭すように話す。

「バージルさ〜ん。早く動かないと、み〜んな捕まっちゃいますよね〜？ それなのに寝てる暇なんて……アラッ？」

だが言っている途中で、彼女はバージルの異変に気が付いた。何やら険しい顔をしたままバージルが目を瞑っている。

試しに顔をつついてみるも、全く反応しない。瞼をこじ開けてみれば、怜悯な碧眼の瞳孔は散大していた。

「あらら、ダメね〜トーレお姉さま。バージルさん、気絶しちゃってますわ」

「何！ まったく……木にぶつかったぐらいで気絶とは。情けない……どうしました姉上？ 顔がひきつってますよ？」

この暗さで判りづらいがトーレの言うとおり、ウーノの顔は若干ひきつっているように見える。

それを指摘されたウーノは慌てて首を横に振る。

「な、何を言っているのかしら？ 別に私は何もしていませんからね？」

「そ、そうですか……」

あまりの慌て具合に、トーレの中で冷静沈着というウーノの評価が、若干下がってしまった。

「それよりどうしますか、ドクター？ 彼が倒れてしまつては、トーレ姉さましか移動系能力者がいませんが」

「うーむ、確かに困ったねえ。トーレ一人では無理があるだろうし、先は急ぎたいし……」

スカリエッティが唸っていると、ウーノがバージルを肩に担いだ。驚く周りを尻目に、ウーノはバージルを連れてヨロヨロと歩いていくが、すぐに倒れそうになってしまう。

「いきなりどうしたんだい？ 急にバージルを担いだりして」

スカリエッティのからかい染みた笑みに、うつむき加減にウーノは答える。

「いや、その、ですね……私が気絶させてしまったというか、なんというか……」

「ああ。ではバージルが気絶したのはウーノ姉上のせいですか」

しどろもどろ答えたウーノだったが、セツテの眩きに傷付いた顔をする。

だがセツテにつられて、トーレとクアットロもため息混じりに眩く。

「姉上……なんとも洒落にならんことを……」

「まったく。とーんだおてんば娘ですねぇ、ウーノ姉さま？ 見かけによらず、お茶目なんですから」

ナンバーズの中で誰よりも視野が広く、冷静沈着な普段の彼女らしからぬ言動に若干落胆するトーレと、良いからかいの材料を見つけ口を弓なりにするクアットロにウーノは、ただしょんぼりするしかなかった。

その様子を見かねたスカリエッティは、手を叩いてその場の注意を集める。

「みんな。楽しむのは構わないが、アジトに着いてからでも遅くはないだろう？ とりあえず、此処からは各々飛んで戻ろう。クアットロは私を、トーレは彼を、セツテはウーノと一緒に飛んでくれ」

その場にいる全員が彼の言葉で、自分達が追われる身である事を再認識したところで、スカリエッティが言った通りに手を持って飛んでいった。

目指すは先の事件まで自分達の家だった場所。そして今は、管理局に踏み荒らされたであろうアジトである。

此処は……何処だ……？ 暗い。黒い。俺の目は開いているはず。
なら何故、何も見えない……。
だがこの雰囲気、嫌いではない……。

――そりゃあそうさ、兄弟^{ブラザー}。アンタが此処を嫌ったら、俺の存在意義が無くなっちまうからな――

誰だ、この声は？ 聞いた事がある、しかし思い出せないこの声。
何処で聞いた？

――オイオイ、ずっと一緒なのに忘れるなんてヒデエな！ ホレホレ、思い出せ思い出せ！――

……思い出しくなくなってきた。恐らく何かの夢だ。ああ、違いない、寝よう。

――ヘイヘイヘイ！ シカトすんなって。考えるのを止めるのは最も悪だ、なんて言葉もあるんだぜ？――

まず、その人をおちよくるような口調を変えろ。そしたら考えてやる。

――こいつはガキの頃からの付き合いだから、直しようがねえな。ま、諦めも肝心ってこったな――

では姿を見せろ。何故こうなったかの話が聴きたい。

――しょうがねえな。ちよっと目え瞑ってくれ――

そもそも、今俺の目は開いているのか？

――細けえ事は気にすんな！ 流れに身を任せてみろ――

言われた通り目を瞑ると、急激な重力感を味わった。そして目を開ければ、そこは先程までの一面暗闇とは違っていた。

天を穿たんとするほどまでに、高くそびえたつ氷山の数々。

それらはただの氷山ではなく、全体が鋭利な刃をかたどっている。恐らく上から見れば、氷剣の連続突きのように見えるだろう。その麓に俺は佇んでいた。

「ここは……？」

右腕を見れば、闇魔刀が刺さったままの異形の右腕。懐にあったはずの魔具は、ベオウルフを残して無くなっている。

そして何より、枯渇していたはずの魔力が普段通りに戻っていた。

「ハッハァー！ よく来たな、兄弟！ 歓迎するぜ！」

暗闇の中で聞こえてきた、例の声が後ろから聞こえ、そちらを向いてみると……我が目を疑った。

「Good！ 予想通りの反応ありがとう」

俺の反応が気に入ったらしく、そいつは右腕を使って大きく会釈をする。ちょうど騎士^{ナイト}のように。

だが、そんな事はどうでもいい。何故だ、何故貴様がこんな所にいるんだ……。

「何故貴様がここにいるんだ！ バージル！！」

俺の目の前。俺と同じ蒼いコートを靡かせながら、ダンテと似たニヒルな笑みを浮かべて、もう一人の俺が氷山の影から現れた。

ようやくアジトに戻ってきた一行だったが、入口にはK E E O O U Tの張り紙と、侵入を防ぐ意味を込めた結界が貼ってあった。

「さて、管理局お手製の結界が貼ってあるわけだが、どうすべきか」

スカリエッティが一同を見渡して言うと、セツテが手を上げる。

「どうぞ、セツテ」

「はい。I S、スローターアームズ！」

言うが早く、セツテの固有武装ブーメランブレードが煌めき、結界を破壊した。

啞然とするスカリエッティ、ウーノ、トーレをよそにクアットロは面白そうに笑いながら、バージルを連れて中に入っていた。

「ドクター。問題解決です」

「問題解決です、ではない！ この馬鹿が！」

静かに報告したセツテに手刀をかますトーレ。

そんなセツテに呆れつつスカリエッティもクアットロに続くが、彼女の人間性がセインやウェンディに似てきた事のため息を吐くのであった。

「何故貴様がここにいるんだ！　バージル！！」

俺の目の前にいる、もう一人の俺はニヒルに笑いながら俺に歩み寄ってくる。

「冷静なはずのアンタがそこまで驚くなんてな。やっぱ出てきた甲斐があったぜ」

もう一人の俺はニヤニヤしながら言うが、その言葉の中に聞き逃してはならない言葉があった事に、俺の頭は気付いた。

「待て、出てきた甲斐があったと言ったな。どういう意味だ？」

「そのまんまの意味だ。普段の俺は、お前の精神の奥に封じ込められている。いや、いたと言うべきか？　お前もその原因は気付いてるんだろ？」

奴の視線が俺の右腕に注がれている。俺の意識が右腕にいくと、ボウツと蒼白く光る右腕。まさに悪魔のそれだ。

「なまじダンテより魔力の使い方が上手かったのが裏目に出たな。無茶な魔力は身を滅ぼすって知らなかったのか？」

「黙れ。あの程度、扱いこなせなくてどうする」

「HA！　お前は確かに強いが過信しすぎだ、ボケ」

呆れたと言わんばかりにため息を吐くと、奴は俺を観察するよう

に周囲を歩きだす。

「いいか、兄弟。俺達の親父、魔剣士スパードは悪魔でありながら魔界を裏切り、人間に味方し、人間の女を娶り、そして子をもうけた。これはお前も知ってるはずだ。だが考えてもみろ？」

そこで奴は手にした闇魔刀を抜くと、すばやく横になぎ払う。それだけで氷剣は根元から折れ、俺達に向けて落ちてくる。

だがそれすら許さない奴の斬撃が、息つく間もなく氷の塊を星屑スターダストの如くバラバラにした。

チンツと納刀の音を響かせながら、奴は此方を見る。

「いかに俺達が人間と悪魔の混血だとは言え、ただの人間のお袋と、悪魔の中でも最上位に属する親父。見ろ、明らかに釣り合っていないだろ？　ここでお前の右腕の話に戻るわけだ」

余韻を残すように奴は話を区切る。早く先が聞きたいと思っていた俺が奴の行動をいぶかしんでいると、エアトリックで俺の右側に奴が現れる。

そして俺の右腕を握って凝視する。その眼に、不覚にも恐怖を感じた俺はエアトリックで距離をとると、奴は残念そうにため息を吐いて口を開く。

「悪魔オンリーだからこそ、親父の力はフルに使える。それが、人間の血が混じった事で良く言えば進化の可能性、悪く言えば不純物を手に入れてしまったわけだ」

「ー！！！」

不純物、と聞いてイラッときた。確かにそうかもしれない。だが言っている事と悪い事がある！

「オイオイ、今更良い子ちゃんぶるなよ。お前だってテメンニグルで似たような事言ったろ？　おあいこだ。だから殺気を消せ」

敏感に察した奴はおどけて言うが、殺気を感じた瞬間、間違いなく奴も臨戦態勢になっていた。

まだ話も聞きたいので仕方なく殺気を消すと、奴は満足したのか話を続ける。

「とにかく、だ。俺かダンテか、それとも俺達の子供が悪魔の力の暴走によって、こうなる事は初めから決まっていた事なんだよ。だが俺達はハーフだ。悪魔と人間の調和が取れてるから、しばらくデカイ魔力、要はSTを引かなきゃいい」

スパーダトリガー
「ST？　……ああ、あの形態の事か」

「おおよ。まったく、お前って奴は。さすが、もう一人の俺だぜ。偶然とはいえ、親父と同じ力を手に入れたんだからな！　だが安心しろ。STが使えなくなる代わりに備わったのがソイツだ」

「親父の力に代わり得る力とでも？」

「いや親父には劣るな。そもそもSTすら、二人いないと親父には追いつかねえ。だって強力な力を半分に割ったんだぜ？　それでも普段のDTよりは強いがな。……っと、話がズレたな。その腕は強えぞ？　お前だって高町にかました時、感じたろ？」

それは確かにそうだ。魔導師が戦闘時に着用するバリアジャケット越しでもあそこまでのダメージを与え、かつ大きさも伸縮も自在なのだ。これを強いと言わずして、何を言おうか。

「その様子だと相当気にいってるみたいだな。だがな、その右腕はイレギュラーだ。お前がそれを使い続ける限り体内の魔力バランスは整わない。結果、STは使えない。その逆もまた然り。おわか

り？」

「つまり右腕かST、どちらかを決めろという事か？」

良くできたという意味か、乾いた拍手をする奴。どうでもいいが、いちいち癪に障る奴だな。とても俺と同じだとは思えん。

「次に、その右腕の使い方だ。基本はお前がやった通り、右腕の延長の感覚で使っても問題はない。だがな、まだ他の能力があんだよ」
「何？ 他の能力？」

これだけ強い右腕にまだ隠された能力がある事に、俺の口からは自然に疑問符が出ていた。

「OK OK. やり方は簡単だ。まずは右の掌で相手の肌に直に触る。できるだけ頭に近い方がいいな。次に、そんな時の考え方だ」

俺と同じ異形の右腕を、前に突き出しながら目を瞑る奴。すると右腕から出る魔力は、烈しい炎のように揺らめきはじめる。

「こう命じろ。“見せろ見せろ見せろ。汝の隠したる想い、なるはずであった先の姿を解放しろ。今こそ、表裏交わり対極に出でよ”
ってな」

「ずいぶん長い詠唱だな」

「詠唱なんかと一緒にすんな。今のは右腕を使う上での気構えだ。本来なら触れただけでジャックだぜ？」

だが確かに便利だ。奴の言う能力、要するに精神操作ができるということか。

「ほんじゃあ、やってみるか」

突如、俺の頭にアイアンクローの如く右手をめり込ませてくる奴。そのまま抵抗していると、体に異変が現れる。全身が周りの氷剣のようになまっていく。

「なっ、これは！？ 貴様、謀ったな！」

ようやくコイツの魂胆に気が付いたが、時すでに遅し。両手足が氷に捕らわれ、鎖が俺の体を氷剣に縛り付ける。

俺の怒りの声が良いのか、奴は気持ちよさそうな顔をして笑い出す。

「いまさら気付いたか、アホめ。いいか、これが今言った精神操作だ。これで体の主導権は俺のモンだ。お前は大人しく幽閉されてな！ ハッハッハー！！！」

その言葉を最後に奴は消え、俺は目の前に俺が視ているであろう風景を見る形で氷牢に閉じこめられた。

クアットロによって一室のベッドに横たわらされていたバージルであったが、突然息を吐きながら体を仰け反らせた。

その体の内側で何かが蠢いているような動きを見せた後、バージルはムクツと立ち上がった。

「バージル！ 目が覚めましたか！」

ちょうど、その部屋にウーノがやってきた。と言うのも、彼女は自分のせいでバージルを気絶させてしまった事を悔やみ、部屋の外で彼が起きるのを待っていたのだ。

だが彼は不自然な動きでウーノを見た後、彼女に向かって歩み寄っていく。その動きだけで、蛇に睨まれた蛙のように感じたウーノはゆっくりと後ろに下がっていく。だがバージルはあくまでウーノに歩み寄る。

怯えるウーノであったが、後ろに控える壁で動きが止められると、バージルが凄まじい勢いで壁を叩く。思わず目を瞑ってしまうウーノであったが、恐る恐る目を開くと彼の異形の右腕がウーノの顔スレスレの壁に手を突いていた。その壁は陥没しているが、そんな事は関係ない。

今、目の前にいるバージルからは常の彼には感じられない、狂気を宿した眼光が放たれている。いかに冷徹なバージルでさえ、ここまでいった目はしていない。

「あ、あの、バージル……？ き、急にどうし、むぐ！？」

目尻に涙を浮かべながら彼を見据えるウーノの口は、唐突に彼の口によって閉ざされた。しばらく無音な空間が続いていたが、してきた時と同じく唐突に彼の口は去っていった。

「ぷはあっ！ はあっ、はあっ……バージル。どうして急に……？」

「……フン、何故だろうな……」

「バージル……？」

バージルは普段通りの無口で部屋を出ていった。その後ろ姿を見ながら、ウーノはまだ温かみのある自らの唇を触って感触を確かめた。

「やあ、バージル。ご機嫌はいかがかね？」

スカリエッティの下にバージルが現れたが、彼は無言のままスカリエッティの近くにより、モニターを弄る。

彼の奇行に眉をしかめながらも、スカリエッティが黙視しているとバージルは、ある建物を表した一つのモニターを出した。

「これは……収容所？　だが、一体誰の？」

「アホめ、貴様が造った人形共に決まってるだろうが」

バージルの辛辣な言葉に不快感を露わにするスカリエッティだったが、普段の彼ならここまで言うだろうと思ってスルーした。

「つまりチンクを筆頭にした、管理局に投降した戦闘機人達がいるのか」

「そうだ。今の俺達には圧倒的に人手が足りてねー。逆にやつこさん所にはストライカーやエースがいんだ。……この先やり合うことになったら、少しのミスが負けに繋がるぞ」

「なんだ、ずいぶん弱気じゃないか」

バージルをおちよくりつつも、彼の言葉でスカリエッティは先の事件を思い出す。

ホテルアグスタから始まり、ミッド全体を混乱に陥れた聖王のゆりかごと現代に蘇った聖王のマテリアルによる、通称J・S事件。その時機動六課の新人や部隊長によって、戦闘機人が封殺されてし

まったのは苦々しい思い出である。

「それにコイツも厄介だと思うぜ？」

そう言っつてバージルが出したのは彼がグラナ、フェイト、シグナムと戦っているところだった。

「コイツの武器を見てみな」

「これは……何だい？ 見たことのないデバイスだが」

「魔具だ」

「……どういう意味だ？」

スカリエッティの疑問。魔具はバージルのいた世界とその世界の裏側、魔界にしかないはずなのに、何故関係のない彼女が持っているかという事。

「んな事、俺が知るか。それより問題なのは、向こうに魔具があるって事だ。ただでさえメンドくせー相手に魔具持ちがいんだ、ハッキリ言っつて避けて行動してえ」

「……バージル、何かあったのかい？ 口調が今までと若干違う気がするんだが」

今の“避けて行動してえ”は明らかに彼らしくない、とスカリエッティは思った。

今までの彼ならば、相手が強いほど燃えてくるはず。決して戦闘狂ではないが。だが今の彼は、まるで強さではなく享楽を求めているように見える。

「人がどうやって喋ろーが自由だろ？ 気にすんな」

そんな彼を煙に巻くように言いながら、キーを弄っていたバージ
ルはコートを翻して部屋を出ていった。

危ねえ危ねえ。スカリエッティの野郎、なかなか良い勘してんじ
やねーか。こりゃあ、気を付けねえとバレんな。

――貴様、俺の体で好き勝手するな！！――

おっ！ もう会話が出来るまでになったか。スゲー精神力だな、
感心感心。

――黙れ！ 貴様、後で覚えていろよ！ この鎖と氷を叩き割って、
貴様を八つ裂きにしてくれる！！――

恐い恐い。……とりあえず黙ってろ。俺にゃあ行くところがあん
だよ。

――何？ 何処に行くつもりだ？――

人員が足りねえから、ちょっとリクルートにな。

――また変な事したら暴れるぞ？――

お好きにどうぞ。俺は好きにやらせてもらうわ。お前も抗ってな
いで、現状を楽しめよ。刺激があるから人生は楽しいんだぜ？

――そんなダンテのような考え方、俺にはできないし、したくもない――

そうか。まあいんじゃないの？ 考え方は人それぞれ出しよ。

――……本当に貴様は何だ？ 俺と同じ容姿をしながら、性格はほとんど真逆。まるでダンテだ――

知らねーな。さて、朝まで外で寝るかな。今夜は月が綺麗だし。

それにいいじゃねえか。

これから始まる祭りのプロローグにしちゃ、気の利いた夜だ。

1 Rebellion 異形の右腕には管制人格（後書き）

（4月1日）

昨日は楽しいことと悲しいことがいっしょにおきました。

わたしはいつもお部屋でザフィーラさんと遊んでいます。昨日ははやてさんの所に行っていたのでいませんでした。たいくつだったのでこっそりお部屋を出ようと思ったら、だれかが入ってきました。

行ってみたらそこには、青い服を着た銀のかみのおじちゃんがいきました。そのおじちゃんは何を向けてきましたか、遊ぼうと言ったらいっしょに遊んでくれました。かた車もしてもらいました。

でもおじちゃんは新聞を読んだ後、急に走って出ていってしまいました。またいっしょに遊ぶ、って約束してくれたので楽しみです。

でもその日の夜遅くに、だれかが話しているのが聞こえてベッドから出ていったら、フェイトママとヴィータさんが話していました。フェイトママは全身にけがをしているみたいでほろろを巻いていました。とってもいたそうで、かなしくなりました。

その後、フェイトママにつれられて病院に行ったらなのはママがベッドで寝ていました。フェイトママと同じようにほろろを巻いて、なのはママは頭にも巻いていました。わたしはかなしくなっていないでしまいました。

となりにいたシグナムさんもほろろを巻いていました。三人で話し合っていた時、なのはママがわたしに手をのばしてくれました。にぎってみると、いつもの大きくて温かい手は、小さくて冷たくてわたしは、またないでしまいました。

みんなを、フェイトママ、なのはママをあんなめに合わせた人を、
わたしは同じめにあわせたいです。

I Glimpse of the Demon World

垣間見える魔界

「ハッ、簡単な事じゃねえか」
バージル

「望み通りぶっ壊してやるよ……」
ノーヴェ

「さあさああ、お前らア!!　そこから出たいか!?!」

「これは……所謂、フラグというやつだな……」
チンク

まだ日も昇らぬ早朝。月が名残を惜しむかのように沈みかけ、東の空が朱色に染まり始めた時間、それは走っていた。

木々の間を縫うように駆け抜ける蒼い風は目的の場所を目指して駆ける。その速さは凄まじく、一般人には認識さえされない速さであった。

「~~~~♪」

そんな中、男――バージルは涼しい顔をしながら歌を口ずさんでいた。身の内から溢れる熱いビートを、小刻みにテンポをとることで少しずつ出している。

普段の彼ならこんな事は絶対にしない。だが生憎と、今の彼は“普段の”彼ではない。

未だ浮かぶ月の魔力によってハイになっているのか？確かにそれもあるだろうが、若干違う。

彼自身のせいなのか、それとも運命のイタズラかは分からないが、彼という人間の奥底に封じ込められていた物が偶然覚醒してしまったため、常の彼らしからぬ振る舞いが顕著になっているのだ。

ギリギリ周りに聞こえる程度の声量でバージルが口ずさんでいると森が開け、目の前に青い海と施設が広がっていた。

そこが目的の場所なのか、バージルはニヤツと笑って辺りを見渡す。あの洋上施設に侵入するためにやってきたわけだが、周りには陸どころか船一隻浮いていない。

彼のスタイルアーツ、エアトリックは何かに足を着いて力を溜めなくては連続使用が出来ない。今もエアトリックで侵入しようとしたが、途中の洋上に足場が無いので却下となった。

「さあゝて、どうすっかな……」

凄いののはあの洋上施設の立地条件である。

何が凄いかと言うと、周りを海に囲まれ一番近い陸地からでも目算二百メートルはある事だ。魔法を使えない人間には、これだけで十分脱走が困難である。

だが陸に続く道がないという事は、必然的に船を使っているという事だ。いかに魔法が発達しているミッドチルダとて、全ての人間が魔法によって飛べるはずがない。

バージルとて魔人となれば魔力を弄る事で翼の一枚や二枚、生やせない事もない。だが、それでは魔力を関知されてすぐに警備が強化されてしまうだろう。

ケルベロスがあれば、自分の歩む道だけを凍らせて侵入できただろうが、アジトを出る時にスカリエッティに預けてきてしまったのだ。無い物をねだっても仕方ないだろう。

（スカリエッティの野郎は可能な事はやっておくとは言ったが、さてどうなることやら……）

いきなりあんな、無茶を通り越して無理を言ったにも関わらず了承してくれたスカリエッティには感謝すべきなのだが、やはり難易度は高いだろう。

バージルが要望したのはたった一つ。彼がスカリエッティと会った時に言った、戦闘機人の亜流品を造ろうというのだ。

本来戦闘機人とは、安定した魔導師を確保するために生み出された兵器である。生まれた時から機械に適合するように素体を弄ってできるという、倫理観ガン無視の機人をバージルは魔具の数だけ造

れと言ったのだ。しかも超々短時間で。

当初スカリエッティはそんなのは無理だと断った。技術的にはできて、時間が足りなすぎる。なにせ一日で造れと言ったのだ。

ウーノ、クアットロの手伝いがあってもクリアすべき課題は山ほどある。できるとしても人格設定等の精神的なものだけであつた。だがここで偶然による奇蹟が起きた。

サンプリングのために余っていた機人にケルベロスを取り込ませたところ、なんとケルベロスと素体の融合率が九十後半という数値を叩き出したのだ。

余りの素体はまだ魔具の数だけあつたので、時間は大幅に短縮。あとは内面的なものの調整だけで出撃はできるようになるらしい。

（人数が四増えるでしょう。非戦闘員を抜くとまだ七人。まだちいーつと足りねえな。やっぱ引き抜きでもしねえとダメそうだな……）

やはり施設には絶対に行かなくてはならない。ザツと考えてみたバールだが、やはり侵入手段は二つしかなさそうである。

一つ目は魔力がバレるが翼によって空を飛ぶ事。二つ目は泳いでいく事。これは魔力を使わないので、バレないで侵入できるだろう。

だが二つとも確実に入れてしまう。

（それじゃあ、面白くねえよな。もっとイカした入り方はねえか……？）

ただ入るだけでは面白くない。相手の意表を突き、注目を集め、自分自身が楽しい。

それこそ、人間が闇を忌避する“恐怖”の次に刻まれた“悦しい”という感情。彼はその感情に素直に順応しているのだ。

どうすれば、その基準を満たしつつ侵入できるか。彼の頭はそれ

で一杯であった。

魔人化の身体能力増強には目を見張るものがある。自身にできる移動は跳躍、エアトリック、さらに空中に足場を作る事で二回跳ぶ事ができる。

だが、それだけではまだ足りないだろう。空を駆けるのはアリでも、飛ぶのはナシ。この自らが課した制約を守りつつ行くには……。

「ハッ、簡単な事じゃねえか……」

僅かな逡巡、しかし答えは出た。この方法は魔人化なしでは正直キツイだろう。だができる。

何故なら、魔剣士の血族に後退はあってはならないからだ。常に前進勝利あるのみ。

「さて、It's Show time・・・！」

まずは後ろに距離をとる。適度な緊張感が体を硬直状態にする。余計な力が入ってはならないので、脱力目的で手足をスイングさせ、細胞が発する準備完了の合図と共に駆ける。

始めはダッシュ。力を入れすぎず、されど抜きすぎずのペースのまま走る。踏みしめる足に徐々に力と魔力を込め、振り切る瞬間、彼の足は魔人のそれとなる。

人間の限界を突破した筋肉が躍動し、それに付随した肉体が幅跳びの要領で洋上を舞う。

しかし、そのままでは万物が齒向かう事のできない楔、即ち重力によってバールは波に飲み込まれる事になるだろう。

だが蒼い悪魔はこの世の理に抗い、体に魔力を循環させる。一度、二度、三度、四度もの瞬身を繰り返し、その身はさらに空を舞う。

もう離すまいと重みの魔手が迫るが、彼は嘲笑うかの如く足に魔力を付加。今度のは魔人化でも瞬身でもなく、世界に干渉する魔方阵を展開し、在らぬ敵を蹴り殺すように背面を蹴って跳ぶ。

彼を象徴する色と同じ蒼色の円は、凄まじい臂力に堪えて彼を前方に押しやる。だがまだ魔剣士の所業は終わらない。

宙を蹂躪する様を彷彿とさせる動きで縦に跳ぶ。見た者がゲームか漫画かと疑いたくなるような、そんな華麗な空中二段ジャンプをキメて、悪魔は今ままで最高の高さまで跳ね上がる。

「クライマックスってヤツだな！」

対岸までは、もうあと少し。ここで新たな力の使いどころである。体を捻って右腕を後ろへ。この世の法則に従って落下を始めるが、その前に力を溜めて前に放つ。

万物が畏怖するその力は異形の腕を象って前に伸び、ついに施設の外壁を握りしめる。

「B i n g o ! !」

考えていた作戦が華麗に、イカして決まった時ほどスカッとするものはないだろう。

今のバージルはまさにそれである。そのまま腕を縮ませる事で彼

は無事、長い洋上を渡りきったのである。

「Stylish! 自分で言うのも何だが、最高にクールにキマったな!」

着地したバージルは、ガッツポーズをとって喜びを体現する。普段の仏頂面は完全に息を潜め、代わりに陽気で気さくな性格が全面に押し出されている。

彼が何をしたのか、あえて言うならばこうである。

スタートダッシュと共に踏み切る直前、下半身のみ魔人化。そのまま慣性によってしばらく跳んだ後、四度ものエアトリックで距離を稼ぐ。

さらにそこからスカイスターとエアハイクで上に昇り、トドメに右手の力で壁を掴んだ結果、今のようになったわけだ。

一見簡単そうに見えて、その実少しの力の入れ具合が明暗を分けるという、なかなかシビアな一連の動作を淀みなくできる彼は等しく人外である。

しばらくはその楽しさに身を委ねていたが、だんだんとその容貌は冷めたものになっていった。

愉悦などの感情は一見良い感情のように思われるが、これはなかなか厄介な一種の麻薬と同じである。最初は小さな事でも楽しめるだが悲しき人の性なのか、それに飽きると次はもっと大きくて長続きするような愉悦を求めるようになる。

楽しさは悦びを呼び、悦びは狂喜を招き、狂喜は狂行を誘発させ

る。そして悪循環に陥ってなお、人はその時最悪の手段をとろうとする。なんとも皮肉なものである。

バージルもその例外ではなく、麻薬に近い楽しさの持続を願っていた。だがいつまでも快楽に溺れていては、本来の目的を見失いかねない。

要は押しと引き、飴と鞭が大事なのである。

「ふう、行くか……」

芯まで熱くなっていた脳内は、今や氷の如く冷めたものに変わりきった。その事を確認するとバージルは宛てもなく彷徨い始めるのであった。

時間はまだ日も昇っていない早朝。草原を模した部屋に思い思いの場所を陣取って寝ている数人の少女達。その中の一人、ボーイッシュな赤髪の少女、ノーヴェは本当に僅かに感じた振動が気になって目が覚めた。

戦闘機人の感覚は鋭敏である。開発目的が『人手不足を補い一定水準の安全を守る為、戦闘に特化した魔導師の量産』なので、視覚はもちろん聴覚や味覚といった五感は人間を軽く凌駕している。

その感覚の網に先程微弱な振動が引っかった。

「なあ。今なんか揺れなかったか？」

「何言ってるんスか？」 長い施設暮らしに感覚センサーでも狂ったっスか、ノーヴェ？」

「ああ！？ もっかい言ってみろウェンディ！」

隣にいるノーヴェよりも深い赤髪の少女、ウエンディは眠そうに目を擦って欠伸をしながら呟く。マイペースな彼女らしく夜はぐっすり寝るタイプなので、その安眠を邪魔されるのはいかに姉妹といえども許される事ではない。

再び眠るために軽くあしらうつもりで軽口を叩いたウエンディだったが、予想に反して逆効果となり、怒ったノーヴェが指を鳴らしながら臨戦態勢に入ってしまった。

だがまだ頭が正常に働かないウエンディは、今自分がどうなるうとしているのか理解できない。

「うるさいっスね。もう少し静かにできないんスカ？ だいたい、私はまだ眠いんスよ。血の気の多いノーヴェと違って、コッチは寝足りねーんスから静かにして欲しいっス……」

自分を見ようとしてもしないでググチ言うウエンディに、額に青筋を立てながら聞いていたノーヴェはブチツときた。短気で喧嘩っ早い彼女の性格は、まさしく戦闘機人向きである。

「……ハハッ、オーケー。どうやら一回壊れたいらしいな……望み通りぶっ壊してやるよ……」

欠伸と共に再び沈んだウエンディを見ながらノーヴェは立ち上がる。睡眠によって鈍っていた手足を呼び起こすように節々を鳴らしながら、彼女は不快そうにウエンディを見下ろす。彼女の大らかさは姉妹の間では良い緩衝材になるが、今回はノーヴェの怒りに火を着けるだけとなった。

「さあて、壊れる覚悟はできたか？」
「一人で言ってるっスよ」

あくまで冗談だと思っているウェンディに、怒りの鉄拳を構えて最後通告するも軽くあしらわれた。

……よし、殺ろう。このアホをバラバラの粉々にしてやる。今の状態にふさわしい決めゼリフはこれしかねーな……。

「さあ、お前の罪を数えろ。……フン！」

二人で一人の仮面ライダーよろしくウェンディを左手で指さした後、溜めるように後ろに引いた右腕を力強いスイングとともに振り下ろす。

迫り来る、風切り音を伴ったパンチング。もしも当たっていれば、少なくとも顔面の整形をしなければならなかっただろう。

「そこまでだ、ノーヴェ」

だが右拳は小さな、しかし大きな力を感じさせる手によって抑えられた。

頭に血が昇った状態で、いきなり邪魔をされてイラついたノーヴェが右を見れば彼女達の中で一番の年上であり、銀髪に眼帯という印象深い容貌のNO.5、チンクが立っていた。

「チ、チンク姉……」

自分の大好きな姉の手を煩わせてしまった事に狼狽するノーヴェだったが、チンクは静かな眼差しで真っ直ぐに彼女を見る。

「ノーヴェ。ウェンディの言動が癪に障るのは分かるが、そんな事で怒っているのはエネルギーの無駄だ。力が余るといいうのも分からないが、もう少し我慢を覚えるべきだ」

今いる戦闘機人の中で一番年上なチンクの、諭すような口調にノーヴェの怒りは収まっていった。

自分でも自覚しているからこそ彼女の言葉が素直に飲み込めたのだ。怒りは力と勢いを助長するが、技のキレと判断力を鈍らせる。それに怒りに身を任せて強くなっている間は、どんなに強かろうと弱いままである。矛盾して聞こえるが、要は普段から怒り状態の力を出せるようにしておけという事だ。

（そんな初歩的な事は忘れてはならないはずなのだが……）

周りの妹達が目覚まさないように小声でため息を吐くチンク。戦闘機人にとって忘れてはならないはずの事を覚えていない彼女達にチンクは思うところがあった。

およそ三ヶ月前に起きたJ・S事件の時、局の魔導師を何の感慨もなく一部は嬉々として襲っていた彼女等は本当の意味での戦闘機人だった。

だが管理局の保護という名目でこの施設に入ってから違う意味で機人である。更正施設とは銘打ってはいるが、体の良い戦闘材料にされるのではないかと疑いたくなる事が、未だにチンクにはあった。

「チンク姉、大丈夫か？　なんか険しい顔してるけど……」

心配そうな顔のノーヴェが自分を覗き込んでいた事に気が付いたチンクは、口の間から漏れるような息を吐きながら隻眼を瞑る。

「いや、何でもない。ノーヴェも早く寝る事だ。まだ明け方なんだから」

「あ、ああ。分かった」

「ノーヴェ……」

言われてノーヴェが横になると、そばに座ったチンクが彼女の赤い髪を梳くように撫でてくる。粗暴に見えて意外に乙女なノーヴェは、姉の行動に不覚にも顔を赤くして小さく反論する。

「チ、チンク姉。やめてくれよ。アタシはもうガキじゃないんだから……」

「ふふ、そう言うな。私の妹である限り、お前はいつまで経っても可愛いガキだ」

髪と同じ色になっているノーヴェをあやすように優しくチンクが撫でていると、ノーヴェを耐え難い睡魔が襲ってきた。

良いじゃん。どうせ偶然起きただけだし、もっかい寝よう……。

しばらくして彼女から小さな寝息が聞こえてくると、チンクはゆっくりと立ち上がる。

しかし彼女の目には先程までの慈愛に満ちたものではなく、冷え冷えとした鋭いものが宿っていた。

「待ってろよ。今そちらに行くからな」

射抜くように天井に設置された監視カメラを睨んで、チンクはス

タスタと歩いていく。

「良いねえ。その意気込みや良し！ こいつはとんだ掘り出し物が見つかったな……」

ノーヴェが感じていた振動はチンクも感じていた。静かに目を覚ました彼女は、朝も早いという事でとりあえずノーヴェを眠らせた上で、監視カメラから感じる視線と振動の原因を探しに部屋を出たのだ。

だが、さすがに固有武装も無しに何者かと戦闘になったら、如何に戦闘機人と言えどある程度強い魔導師相手では苦戦を強いられる事になるだろう。

まずは武装を取り戻すのが先決と判断したチンクは、自分達の武器や食料等が置いてある部屋に向けて動き出した。

だがどこに行こうと、全身を舐めまわすとも刺し貫くともとれる視線が彼女の表面をなぞっているように思えて、彼女は眉間に深い亀裂を刻んでいく。

そんな様子を嘲笑うように見守る機械の眼を通して、見ていた者は喉の奥を鳴らしていた。

「クックック、コイツは驚いた。まさかとは思ったが、こっちの視線に完全に気が付いてやがるとは。この先は……倉庫か……」

ゆったりとした動作で立ち上がると、その人物は近くの椅子にゆっくり近づき、唐突にそれを四つの塊にバラバラにする。それをもう一回行い、計八個の椅子の残骸を作ったその人物は脚を持ち上げると、震脚の要領で床を踏みつける。

床が抜けるのでは、と疑いたくなるような音が鳴り響くが床は何ともなかった。その代わりに、床と脚の隙間の空間に亀裂が走り、音もなく崩れ落ちる。

その瞬間、地獄の亡者のような怨念と怒りの声が辺りを満たす。耳を塞ごうが体に染み込むような負の波長。

深い奈落のような亀裂から発せられる黒い感情。常人では耐えることもできず、聞き続ければ精神を蹂躪されるような声を、その人物は涼しげな顔をしながら受け流している。

「さあさああ、お前らァ!!　そこから出たいか!？」

部屋全体に響くように声が這い回り、反応するように黒い群声が亀裂を揺らす。

「人間界に出て暴れまわりたいかァ!？」

声を張れば、比例するように黒い声も低く、大きく響いていく。

「暇な魔界より刺激的な人界の方が良いだろう!？」

さらに声を張ると、もはや声ともれない雄叫びが部屋の全てを揺らす。

肯定の意を聞いたその人物は、ダメ押しとばかりに今まで以上に声を飛ばす。

「だったら出てこい！！ 体は用意してある。早い者順だ！ 暴れまわってやれ！！」

聞くが早く、亀裂から怨念とも思えるナニカが飛び出し、先程バラバラにされた椅子にまとわりついていく。

見る者に液体のような水感と、固体のような質量感を感じさせる動きを伴って、次第に形を作っていくそれを見ながらソイツは笑っていた。

倉庫に向けて歩くチンクであったが、倉庫に近付いていくに連れて、得体の知れない怖気を感じるようになった。戦闘機人と言えど素体は人間である。その部分が倉庫に近くなればなるほど、悲鳴を上げて訴えてくるのだ。

そこに行ってはならない。否、行くなと。

こんな事、今までは無かった。どんなに強敵と戦っていた時でも、これほどどうしようもない恐怖を感じたことはない。恐らく倉庫では何かが起きるだろう。

そんな事を予期している間に、体は既に倉庫のドアの前にまで至っていた。そしてチンクは感じ取ってしまった。

ドア越しに漏れてくる魔力を。自分達の使う魔力とは似て非なる、使う者に争乱と混乱をもたらす負の魔力を。

気が付けば、彼女の体を震えが走っていた。これが武者震いだったらどれほど良かったか。

「これは……所謂、フラグというやつだな……」

眩きチンクはゆっくりとノブに手を添え右に回す。

キィーと不気味な音を立ててドアが動き、僅かに隙間ができる。そこから中を覗きみるが、暗くてよく見る事ができない。

仕方なく隙間に体を滑り込ませ、ドアの近くのスイッチを押して電気を点ける。暗くて良く見えなかった全貌が見えるようになったが、濃密な魔力に反して部屋には誰もいなかった。

注意深く辺りを見渡すが、動く物はおろか生物の気配すらしない。どうやら杞憂だったようである。

「ハァー……。何もいないじゃないか。ビックリした……」

緊張の糸が切れたのか、チンクは目を瞑ってため息を吐く。強ばっていた筋肉が弛緩していき、安堵感が体を満たしていく。

それこそが彼らの狙いだった。

反応できたのは本当に偶然であった。極度の緊張から解放されて弛みきった、まさにその瞬間を狙うようにチンクの頭上より紅い鎌が二つ、小さな彼女を真つ二つにせんばかりに振り下ろされた。

ようやく小さな違和感を感じたチンクがとっさに前方に跳んだのと、鎌が床を抉ったのは同時であった。戦闘機人として、生物としての直感が、彼女を分割させる事を避けたのだ。

戦場での直感というのは、あなが強ち侮れない。戦場という非日常が生存本能を極限まで高めるのだ。

すぐに対象を視界に納めるようにチンクが向き直ると、そこには

文字通りの悪魔がいた。

陽炎のように、体の表面が赤とも白とも判別できない色によって揺れ、人型に近い、と言っても二メートルはありそうな巨体に、これまた巨体な紅い鎌を携えた悪魔――アビスが二体、無感動な眼差しでチンクを睨んでいた。

（コイツ等か、今まで感じていた魔力の出所は……）

確かに、全身に邪々しい魔力を纏ったコイツ等ならば、この魔力も領ける。今や、漂うだけだった魔力はチンクに重くのしかかり、本能はひっきりなしに警鐘を鳴らしている。

しかし、何故こんなこの世の理に外れている輩がこの場にいるのだろうか？こんな奴は、本来深い地の底の闇の中にいるべき存在のはず。

不安でいっぱいの中、唯一冷静な部分がそう告げるが、答えを出す暇もなくアビスが詰め寄ってくる。

「チッ！ 考える暇すら与えてくれないか」

迫り来る鎌をかわすべく構えるチンクに向けて、死神の鎌が横薙ぎに振るわれる。小さな体格のチンクはしゃがむ事で容易くかわすが、一体目を補うように二体目の鎌が下から振り上げられる。それをしゃがみに近い体勢から、無理矢理右に飛んでやり過ごす。

四肢で床を滑って勢いを殺しながら二体を見る。複数が相手の場合、絶対に敵の位置を把握していなくてはならない。さもなくば、死角からの手痛い一撃を被る事になるからだ。もつとも、この場合の手痛い一撃は最悪命を刈られる事になるが。

敵を見ながら常に最善の手を最速で考えつく。それができなくば、あっと言う間に持っていかれる。だが――肌が粟立つ。

この位置はヤバイ！早く動け！

本能の告げるまま、さらに後ろに身を投げると、そこを三本の鉛色が掠める。

悪魔はまだいた。灰色のローブを羽織ったような瘦躯の悪魔――ヘルⅡスロースが三体、こちらは残念そうに唸りながらチンクを睨みつける。

状況は悪くなる一方である。凄まじく濃い魔力によって体は重く、目の前にはアビスが二体にヘルⅡスロースが三体。これ以上悪魔が出てくれば、武器のない丸腰の彼女には詰みである。チエックメイト

だが運命の神というのは気まぐれで残酷、そしていつも予想を悪い意味で裏切ってくれる。

青い矢が一斉に放たれるのを視認したチンクは、華麗に矢の間をすり抜け、その方向を見ると石像に目と腕が生えた悪魔――エニグマが三体、魔力で作った矢を番えていた。

状況は最悪。計八体もの悪魔がこの場所にいるのだ。部屋から出ようにも、入り口にはアビスがいる。とてもじゃないが逃げ切れない。

（何か。何か金属はないか！？）

金属を爆発物に変える事ができれば、この狭い部屋だ、エネルギーは逃げる事ができず、中にいる者全てに襲いかかるだろう。だが場所が悪かった。

此処には金属もあるが、食料もあるのだ。迂闊に爆発させてしまえば色々な意味で大変な事になる。

（私の固有武装^{スティンガー}だけではトドメはさせそうにない。クッ、どうする？）

考えている間に周りは動く。アビスが沈むように床にとけ込み、ヘルースロースがあざ笑うかのように瞬間移動を繰り返す。

辺りに気を張っていると、チンクの足下が水面の波紋のように揺れる。危険を感じ取ってその場を離れば、そこからアビスが飛び上がり鎌を振り抜く。ただの空振りと思いきや、なんと刃の部分のみが回転しながら襲いかかってきた。

すんでのところで気が付いた彼女が辛くも避けると、もう一体のアビスがチンクのすぐ傍から飛び上がり、最初と同じく直接鎌を突き立ててくる。

「クソ！ 全く手が出せな、いたっ……」

ギリギリでかわせはしたものの、足下がフラついて倒れ込んでしまふ。立ち上がろうとするが、体が言うことを聞かないため荒い息のまま倒れていると、上から無数の青い矢が降り注ぐ。

横に転がってかわすが、体勢を立て直す事ができずにいた。エニグマからの狙撃によって、チンクは常に動いていなくてはならない。一瞬でも止まれば、待ち構えるは死。

何とか隙を突いて攻撃しようにも、近距離主体の悪魔を遠距離主体の悪魔が補う事で、穴が埋まり獲物を狩るという事に集中できるようになっている。

これが魔導師の布陣なら崩せるが、悪魔の布陣となれば話は別だ。ジワジワといったぶるように、まさに悪魔らしい殺り方である。

「クソオオオオ！！」

小さな体であらん限りに吼えるが、悪魔の攻撃は緩むどころか、より激しくなっていく。

瞬間移動から死角への攻撃が、物体をすり抜けて行われる攻撃が、鋭く的確な無数の流星が、チンクの体力と精神力を抉る。

そして、遂にエニグマの矢がチンクの足を貫いた。痛みを耐えるように呻きながら矢を抜こうとするも、好機とみたヘルースロースの三本鎌が迫る。

辛うじて二本まではかわしたが、さすがに限界がきたのか、ついに最後の鎌がチンクの左腕を捉えた。

「あああああ！！！」

柔らかい肌を断ち切るように食い込む刃。無慈悲にも切り裂かれた傷口からは真っ赤な液体が迸り、鎌を紅に染め上げる。思わず割って出た彼女の悲鳴を、悪魔は心地良い音楽を聴くように悦び吼える。

焼け付くような凄まじい痛み。非殺傷設定のデバイスでは絶対に無理な、死に至る痛みが左腕を中心に全身を駆け回る。

これに一番近い痛みは、嘗てゼストによって右目をやられた時だろうか。だが、今回は本気でヤバイ。

（仕方ない。後でいろいろ言われるだろうが……）

痛みを耐えて這いながら、辺りに散らばる金属類に触る事で楔を打ち込む。そんなチンクの行動を、追い詰めた鼠をいたぶる猫のようにあざ笑いながら、悪魔達は何をするか見守る。

粗方触ったところで、彼女は力無く壁に背中を預ける。それ以来荒い息を吐くだけで、特に行動はない。愚かで脆弱な人間が何をするかと気になっていた悪魔達は、しかし拍子抜けしトドメを刺そうと近付いてくる。

……だが、それこそが狙い。爆心地になるであろう場所を悪魔達を通る瞬間、ISを発動して近くの障害の陰に飛び込む。

瞬間、閃光が煌めき凄まじい爆発音を伴った爆炎が、悪魔を浄化するかの如く舐めまわしていく。とっさに隠れなければ、チンクとてただではすまなかっただろう。

「ぷはっ……どうだ、化け物共め……」

爆熱に波打った髪を掻きながら、今にも倒れそうな足取りでチンクが出てくる。悪魔を滅ぼせて、かつ自分が生存できるギリギリまで威力を上げて爆破したのだ。壁や床は炭で真っ黒になっている。下手したら自分も吹き飛んでいたが、おかげで悪魔を殲滅できたのだ。まあ、良しとしよう。

「それにしても……」

見ないようにしていたが、いつまでも現実逃避をしているわけにもいかないので、諦めて周りを見る。

武器類は防御魔法が張ってあったのか、傷一つない。あくまで武器類は。

それ以外で無事な物はほとんど無かった……。

「……絶対ギンガに何か言われる……」

ギンガに迷惑をかけてしまうのは心苦しいが、早く監視室に行って何者かに落とし前をつけさせなければ。

（それにしても……さっきの奴らは何だったんだ……？）

冷静になってみると、おかしな点に気が付かされる。何故こんな場所に、あれほどの魔力を持つ奴らが現れたのか。奴らは何処から

来たのか。そして何より、何処に行ったのか。

暗く濃密な魔力は、しかしその片鱗すら残さずいつの間にか霧散していた。周りには壊れた木箱やダンボール、椅子の残骸が七つあるだけであった。

いくら考えようと、明確な答えの存在しない問答ほど意味のないものはない。答えが浮かばないならば、今は保留にすべきであろう。チンクがそう決めた時、廊下から複数の足音が聞こえてきた。

また奴らが来たのかと思った彼女は迎撃の構えをとろうとしたが、あいにく体は言う事を聞かない。仮に先程と同じ強さの敵が来るのならば、確実に勝てないだろう。

次第に足音が大きくなるにつれて、そう思っていたチンクだったが、勢い良くドアを蹴破って入ってきた人物を見ると、それは杞憂に終わった。

「ターゲット確認。敵影、トラップ、共に無し。オールクリアっス！」

「どけ、ウエンディ！……！！！」

転がり込むように入ってきたウエンディに続いて、ノーヴェを筆頭に他の妹達がやってきた。どこのBOS Sだ、と問いたくなるような確認作業をノリノリでやるウエンディとは逆に、チンクはため息を吐きながらペタンと座り込んでしまう。

「チンク姉、大丈夫か！？」

ウエンディを押し退けてやってきたノーヴェが、しゃがんでチンクと目線を合わせて心配そうに彼女を見る。見るだけでなく、プニプニとした肌を触ったりもしている。

そんな妹に嬉しそうにはにかみながらも、威厳を出すためか手を

振り払って立ち上がる。

「問題ない。あまり心配するな、大した傷は負ってー」

「チンク姉！ 腕、怪我してる！」

大丈夫なところを見せるために胸を張ったのは間違いだった。逆に目敏いディエチによって左腕の裂傷が見られてしまい、周りが騒然とする。

必死に誤魔化そうと嘘を考えるが、あいにく突破口が見あたらない。

「チンク姉、何があったの？」

「もしかして、さっきの爆音と関係あるの？」

特に顔がそっくりな姉妹、オットーとディードが似た声音で尋ねると、チンクはそこで話を半ば強引に切り替える。

「そう、それだ。お前達は寝ていたはずだ。何故此処に来た？」

「そんな事よりチンク姉のー」

「だってこの部屋が一番うるさいんだもん。何か起きてるって簡単に気付いちゃうよ」

ノーヴェは食いついたが、彼女の話しをぶった切るように腰に手を当て、さも当然とセインが答えると、周りからも苦笑が漏れる。何せいつもと変わらずに寝ていたら、立て続けに爆発音が聞こえてきたのだ。戦闘機人なら爆発音がすれば、それだけで何処なのか発見するのは容易である。

「そうか。それはすまなかった。……とりあえず、この部屋は出ろ。早く武器を持ってー」

一瞬、言葉が紡ぎ出せなかった。

現在部屋の奥にチンク、中央付近に妹達がいる。そして自分の位置から見えてしまったのだ。

既に死んだと思っていた悪魔が^{アビス}ゆっくり、ゆっくりと床から現れ、鎌をバックスイングしたのを。

「ーっ!!」

この時、チンクの反応は初めて悪魔と出会った人間にしてみれば、かなり良かった。満身創痍の状態で、むち打つように瞬間的なダッシュを行ったのだ。

凝縮された筋肉が伸び爆発的な瞬発力を手に入れられたが、しかしそれでも妹達には届かない。

ノーヴェ達は気付いていない。後ろにいる人ならざる者が、自分達の命を狩るために己が得物を構えている事など。

もしかしたら何処かで……いや、確実に、相手を倒した事で油断があった。今思えば、相手の死体を確認するまでは生きていると思えど、トーレ姉上に言われた事があった。

何を当たり前とは思おうが、確かにその通りだ。現に私が敵の数、または生死を見誤ったからこうなってしまった。

姿を確認するまで、目の前にいる相手の魔力すら感知できなかった。こんな質の魔力を隠し通せる時点で、相当な力を持っている事になる。

そいつが今まさに、血を塗ったように紅い鎌を妹達に突き立てようとしている。すぐに前方に走るが、やはり相手の方が速い。

言葉で言っても、聞いて理解して動いて、ではとても間に合わない。しかもその過程の中で、少しでも迷いがあったてはならないのだ。……ダメだ。どう考えても間に合わない……。

頼む、誰でもいい。

神でも悪魔でも、この際英雄や正義の味方なんてものでも構わない。

大事な仲間なんだ。大切な妹達なんだ！

誰でもいい、何でもいい。助けて！！

「良い感情だな。その欲望、気に入ったぜ……」

誰かの声が聞こえた。と、同時に顔に何か液体がかかる。その液体の感触に私は覚えがあった……。

生暖かく、鼻につく鉄臭さ。コレは……血、だろうか？

くぐもった苦悶の声。だが何故だ？こんな変な声は聞いたことがない。

恐る恐る見ると、先程の奴が青白い腕に握られていた。

ここにいながらでも、奴が抵抗しているギシギシという音が聞こえてくる。だが腕はさらに力を込めているらしく、奴がだんだん歪に変形していく。

耳に残る、低く不快な声で鳴いているのか？

「そのクセー口を閉じたら、ちったあイカすかも、な！」

フランクな腕の持ち主が言うと同時に……奴が膨大な朱を纏って弾け飛んだ。

「ん？ 何スカ、これ……」

ウエンディが足元に飛んできた物を拾い上げて絶句している。私だって初めてだ、握りつぶされて形を留めていない、腕だった肉片を間近で見るなど。

「おーい、ウエンディしっかりしろ！ ……ダメだ、気絶しちゃってら」

漫画の表現のように腕を持ったままフリーズするウエンディを、セインがペシペシ叩いているが私も違う意味で嘔然とする。

奇妙な腕を出した男。その姿はあの時からほとんど変わっていないかった。

「久しぶりだな、チンク」

目の前に現れた、いるはずのない男。もう一度会いたいと思って
いた男が、あの時と変わらない服装で、声で再び現れた。

イヤッハアー！！！ やつと書きオワタ！

いきなりスイマセン。ただ、今回は指がいつも以上に動く動く。
書いててビックリでしたw

じゃあ、何で遅かったんだと訊かれると……。いつ投稿するか分からない作品を、ちよつと書き始めたら楽しくて（汗）

仮面ライダー555となのはです。見かけたら、以後よしなにお願いますw

仮面ライダーと言えば、Wが終わってしまいましたね。最初は違和感バリバリでしたが、馴れると面白く最終回が惜しかったです。
ただ次作、オーズはOPから良かったですね。アングのキャラは結構好きな方なので、これから楽しみです。

……なんかDMCと全く関係なくなってしまった。
まあ、何が言いたいかというと……

秋にもかかわらず暑すぎる！！ 少しはS造さんに自重してもらいたいです。

「っしゅあ！ 準備完了。いくぜ！」
ノーヴェ

「どんなに誤魔化そうと、血の匂いだけは誤魔化せんぞ」
バージル

「いっちょ、力比べと洒落込まないかい？」

「Come on. It's not over yet」
バージル

あまりの衝撃に、私は声が出せなくなっていた。何故、一体何処にいた、などの疑問が頭をよぎるも、まるで別の生き物にでもなったかのように口が動かない。

「どうした？ そんなムスツとして」

「別にムスツとなんてしてない……」

気持ちが顔に出ていたらしい。バージルは仏頂面だが、きっと私も似たような表情をしているのだろう。

「……バージル、一体どこー」

「チンク姉。誰なんだよ、コイツ……」

だが、私が口を開こうとするのを遮るように、眉間にしわを寄せ、ノーヴェが訊いてきた。そう言えば、みんなにはバージルの話をしていなかった気がする。

なるほど、だから妹達の眼差しに困惑や好奇の色が混ざっているのか。

「ああ、すまん。紹介が遅れてしまったな」

「バージルだ。以後よろしく頼む」

バージルが言うが……ノーヴェの反応が凄まじい。より深いしわを刻みながら、「何だ、テメエ。ナメんじゃねーぞ」みたいな雰囲気を出しまくっている。止めに入らなければ、今すぐにでも殴りかかりかねない。

「ノーヴェ、気をつけろ。コイツはかなり強い。闘ったら負けるかもしれないぞ?」

「……上等だよ、チンク姉。おい、クソやろう! あたしと勝負しろ!」

少し脅かすように言ってみたが、逆効果だったらしい。何でやめろと言ったのに、やろうとするんだ。

ノーヴェ。相手を打ち倒したいと思うのは良いが、力量の差が判らないようではダメだぞ?

……まあ、バージルだったら殺しはしない………はず?

「よし、あったあった。調子はどうだ?」

ノーヴェは、プロテクトの掛けられていた武器の中から、自分の固有武装ガンナックルとジェットブーツを手にとって、手足にピツタリくるか確かめている。

「チンク姉、彼ってそんなに凄いですか? 僕にはそうは思えないんですが……」

ノーヴェが準備をしている間に、オットーが訊いてくる。どうやら彼女には、バージルがそこまで強くは見えないらしく、デイドも同様に頷いている。

私とて、初めは今のノーヴェのように襲いかかった。だが何もできないまま、不思議な剣で脅されたときに気が付いた。

……勝てない。

今なら良い戦いはできると思うが、それでも進んで闘いたいとは思わない。

「っしゅあ！ 準備完了。行くぜ！」

少し物思いに耽っている間に準備ができたらしく、ノーヴェがフアイティングポーズの構えでバージルと対峙する。

だがバージルは、特に気負った風もなく、脱力したまま立ち尽くしている。

「うおおおお！！」

ノーヴェが走り出す事で、戦いのゴングは鳴らされた。

つたく、メンドクセエ事この上ねえな。

悪魔の匂いを追ってやって来たらガキ共が襲われかけてるし、オマケに赤髪の嬢ちゃんには喧嘩をふっかけられるし、肝心の嬢ちゃんが見た感じあんまし強くねえときてやがる。

……トコトンついてねえ。疫病神にでも取り憑かれてんのか？

「っしゅあ！ 準備完了。行くぜ！」

待て、勝手に話を進めんじゃねえ。だいたい、俺は勧誘しに来ただけであって、戦いに来たわけじゃねえんだよ……。

「うおおおお！！」

吼えて襲いかかってくる赤チビを、仕方なく迎え討つ事になっちまったんだが……。

この部屋は戦うには十分な広さがあるが、動きを加えた攻撃には向かねえ広さだ。その空間を把握した上で縦横無尽に動き回り、手痛い威力の乗った打撃を繰り返してきやがる。

右足からのローキックが鋭い一撃となるが、それを後ろに半歩引くことでかわす。

しかし、それはフェイントだったようで、続けざまに小刻みなステップを交えて、ローで振り切った右足を今度はミドルに切り替え、裏拳の要領で振り抜く。

流れるような一連の動作が、目の前の赤チビの実力を教えてくる。なかなかの武闘派だな。こんな足技はあんま見らんねえ。

確かに格闘センスは目を見張る物があるが……。

「……惜しいな」

「ああ？　どういう意味だ、テメェ」

軽くボヤいたつもりが聞こえてたみてえだな。まあいい。今言っておけば、理解は早いだろうな。

「動きが大振りすぎる。もう少しコンパクトに攻められないのか？」

「うるせえ!!」

「見ろ、まただ。怒るとさらに動きが雑になる。感情をコントロールしてみろ」

少し言うだけで、すぐ熱くなって攻撃が単調になる。その結果攻撃は当たらず、また熱くなって……。完全に無限ループになってるじゃねえか。

「この野郎。言わせておけば……」

右右右の、腕によるラッシュ。片腕だけで、よくもここまでの乱打ができるもんだ。しかも時折、混ぜられる左や足が避けにくさを底上げしている。……まあ、俺は簡単にかわせるけどな。

「クッソー！ 早く当たって倒れやがれ！！」

「だったら早く当ててみる」

挑発すれば一撃が重くなるのに反比例して、動きが加速度的に雑になっていく。この変わることはないループ、いい加減飽きたな。……キメにかかるか……。

もはや俺の動きは赤チビの攻撃をいなし、逸らすだけとなっている。その間に見えた、決定的な隙を俺は問答無用で突いた。

後ろに回り込んだ俺の左手が、赤チビの頭をガッチリホールド。同時に力を籠める事でアイアンクロウをキメるが、まだ終わんねえぜ。

白刃が煌めき、右手に持った閻魔刀の刀身が赤チビの首に僅かにめり込む。鋭利な刃は肌を傷つけ、白い肌に若干の赤い線を作る。そして最後に自分に迫る恐怖を分らせるために、視界に入るよう数を加減した幻影剣を設置する。……完璧だ。

こういう、いつまでも負けを認めようとしない奴にや、完全な敗北を突きつけてやらねえと、いつまで経っても無駄だからな。まあ、良い経験をしたと思って諦めるこったな。

「う、あう……」

驚きで口が回らねえのか、赤チビは変な声を上げて仕方ない、みたいな感じで両手ホールドアップを上げる。これで完全に俺の勝ちだな。閻魔刀を一回転させて納刀し、配置していた幻影剣を自壊させる。

「ノーヴェー！　大丈夫っスか！？」

なるほど、赤チビはノーヴェって言うのか。まあいい。赤チビに近寄り赤ガキが心配しているが、赤チビはよほど悔しいのか握り拳を作ってやがる。

ったく、悔しかったら端っから頭をフル回転させて全力で挑んでくりゃあ、良いものを。それ、自業自得って言うんだぜ？

「貴様はもう少し自制心を覚えろ。さもなくば、実戦で死ぬぞ」

死ぬ、という言葉を使った直後、赤チビの肩が震える。戦闘機人とはいっても、中身はまだまだガキって事か……。

「バージル。あまり妹をいじめないでくれ。稼動してから一年も経っていないんだ」

「知らん。コイツのために言っているんだ、妥協はせん」

妥協して死ぬぐらいなら、厳しく言われて生きる方が何倍も良いだろ？ 厳しく言われるうちは、まだ身を思われてるから良いじゃねえか。

にしても……さっきからジロジロ見てきやがるな。視線が判っちゃう分、かなりうざってえ。

「チンク、あの監視カメラの大元は何処だ」

「監視カメラ……！　そうか、バージルも気付いていたか」

監視カメラとチンクの間に割って入り、口の動きでバレないよう後ろ向きに話す。なるほど、チンクも気付いていたか。

「何処にあるんだ？」

「ここを出て、しばらく歩くと突き当たりがある。そこを左に行けば、すぐにたどり着くだろうが、私も行くから問題――」

「いや、貴様は来るな」

俺が言うのと驚いて見てくる。んな目で見てきてもダメだぜ？大体、誰かがいたら俺が全力で殺れねえだろーが。

しゃーねえ、ハッキリ言ってやるか。

「貴様がいると俺の邪魔になる。俺のために此処にいてくれ」

目を直接見るために顎に手をやり、此方に向かせる。目を見て話せば相手も納得してくれると思っただけの行動だ。別に他意なんて無いぜ？

「う……うん、わかった。その……頑張っただけ」

おずおずとして、視線をぶつけまいとズラすチンク。ん？顔がスゲ赤い……。

ハッ！まさか、俺に興味があるのか？でもコイツは特に何とも思っただけ。……試してみるか。

「チンク。何もないとは思いますが、いざとなったら頼むぞ？」

「……うん」

抱きすくめるながら顔を耳元に持っていく、できる限り優しく呟いてみた。

結果はスゴかったぜ。真っ赤も真っ赤、血管がブチ切れてんじやね？なんて思わせるぐらい、赤くなった。

……決まりだな。チンクは恐らくコイツに惚れている。いつから好きになっていたかは知らねえが、よくも一人をそこまで思える。

けど悲しいよな。それに気付いたのが、コイツじゃなくて俺なん
て。南無。

さてさて、いい加減マジでウザったくなってきたから、ちゃっち
やと壊してくるか。

「貴様等は此処にいるか、元いた所に戻ってろ。釘を刺しておくが、
ついてこようなんて考えるなよ？」

それだけ言うと、足早に部屋を出ていった。俺や俺の技を勝手に
見やがったんだ、高くツくぜ。名も知れねえ誰かさんよ……。

チンクに言われてやってきたバージルだったが、突き当たりを左
に曲がった当たりから違和感を感じていた。

彼が此処にやってきたのは確かに朝早い。だが今までに見張りを
一人も見なかったのだ。外回りにはいなかったが、さすがに施設内
にはいるだろうと思っていたバージルには、その点が浮き彫りにな
って見えた。

（あん？ 何かあったのか？）

考えども何も思い浮かばない。そもそも、判断材料になる情報が
少なすぎる。

その事について無駄だと結論づけるのと、監視室のプレートが見
えてきたのは同時だった。足音を殺してドアの横に張り付く。集中
してみると、何者かの気配を感じるが……。

クソッ、気配が薄すぎてイマイチ感じ取れねえ。もし悪魔だったとしたら、もっと殺気なり魔力なり噴出してろよ！

中の奴に動く気配はない。しょうがねえ、ドアをブチ破るか。

闇魔刀を構えてドアの前に飛び出し、自動で開く前にバラバラにして中に進入する。いつでも攻撃できるよう、闇魔刀を納刀して辺りを見渡すと巨大なモニターの前に誰かが座っていた。

遠目にも判る金眼とポニーテールにした薄い金髪が存在感を出している。黒いアンダーの上に白いジャケットを着ているようで、長袖なのかその腕を捲り、下は深い紺色のカーゴパンツ。ずいぶんラフな格好である。

「おお、やっと来たか。ったく、遅すぎだよ」

そう言いながら、その人物は立ち上がり腕組みしながらバージルに向き合う。口調では判りにくいかもしれないが、顔と胸部の盛り上がりが女性だと告げている。そんな彼女の金の眼が興味深げにバージルをさ迷う。

バージルも出会ってすぐに探ってはいたが、魔力がほとんど感じられない。対峙しているにも関わらず、気配すら僅かに察知できる程度であった。では一般人かと問われると、しかしその梓には当てはまらないだろう。本能が、直感が、目の前の相手に対して警鐘を鳴らしている。

「そう身構えなさんなって。別に不意打ちしようなんて考えちゃいないから。やるなら正面から、ってのが私のルールだし」

「貴様のルールなど聞いてはいない。それより、此処にいた奴らをどうした？」

「バレた？」

ニヤツと笑いながら言う女性に対して、バージルは眉間に亀裂を刻みながら鼻で笑う。

「なめるな。僅かだが酒の匂いに混じって血の匂いがする。どんなに誤魔化そうと、血の匂いだけは誤魔化せんぞ」

部屋に入った頃からキツイ酒の匂いがしていたが流していた。しかし、その中にどうしても流せない匂いが混じっていた。

血の匂いだ。しかも相当量の。酒で誤魔化したつもりなのだろうが、彼の鼻は誤魔化せなかった。

「それはアンタが悪魔だからかい？」

「……貴様、俺について何を知っている」

明らかな殺気を出して威嚇するが、女性はどこ吹く風ともなく、顔色一つ変えない。しばらく金銀の瞳が交錯するが、不意にバージルが殺気を収めた。

「邪魔したな。二度とカメラ越しに見るなよ」

「ちよいと待ちなよ！」

「……何だ？　もう貴様に用はない。何処へなりとも失せろ」

興味を無くしたバージルの冷たい目に対して、女性の目は何かを期待したものだった。何を求めているのか解らないバージルに、女性は腕をポキポキ鳴らしている。

「袖摺りあうも多生の縁って言うじゃないか。どうだい、いっちょ力比べと洒落込まないか？」

「断る。そんな面倒な事に巻き込まれる意味が分からない」

再びバージルは歩き出すが、肩を掴まれて立ち止まる。振り向くと亀裂の中から出た右手だけが肩を掴んでいた。

鬱陶しい。思うや否や素早く閻魔刀を抜刀、右手を切り落とそうとするが、それより早く右手は亀裂の中に戻っていった。

「おお、危ない。いきなり落とそうとするとは、なかなかぶっ飛んでるじゃないの」

笑いながら女性は右手をブラブラさせているが、いきなり右手が現れたのだ。興味が湧かないわけがない。閻魔刀を構えると、バージルは好戦的な笑みを浮かべる。

「良いだろう。今すぐやるぞ。今のが気に入った」

だが、その言葉を聞いて女性から出てきたのは、喜びではなく落胆のため息であった。

「まったく……あんなに強いのに闘いの前のルールすら知らないのか？ アンタ、自分の殺った相手の名前も知らないでいるつもりかい？ 私だったら嫌だね」

「知らんな。それに名前なんて、ただの飾りだろう。名乗りたければ勝手に名乗れ」

「アンタ、つまらないって言われた事ないかい？」

ジト目でバージルの事を見ながら、女性が左手を前に伸ばすと亀裂が現れ、中から瓢箪が出てくる。その瓢箪に口を付け美味しそう

に中身を飲むと、満足したのか瓢箪を放り捨てる。どうやら一息で中身を飲み干したらしい。

「私はインペリオ。ある世界の東方では“鬼”なんて呼ばれもしたことがある。ま、結構昔の事だけだね」

インペリオが言うが、バージルは早くしろと言わんばかりに身構える。だが、彼女は構えもしないで腰に手を当てる。

「私はインペリオ。よろしく」

「ー？ だからどうした。早くしろ」

「よ、ろ、し、く！」

分かりやすいように一語一句区切って言いながら、バージルをジーツと見る。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「………バージルだ」

「よっしゃ、勝った！」

意地の張り合い

凄まじい無言の対決に勝ったのはインペリオだった。とてつもなく下らない前哨戦はこうして幕を閉じた。

そんな勝負に勝ったのがよほどれしいのか彼女は笑い、バージルは苦虫を噛み潰したような表情である。

「……でも、バージルは違うよな？」

と、先程まで笑っていたインペリオが目を細めながら指摘した。何も知らない人が聞けば困惑するが、バージルは急に真剣な表情になって彼女を見る。

「……笑えない冗談だな。俺はバージルだ。それ以上でも、それ以下でもない」

鎌を掛けられているかもしれないと仮定したバージルが言うが、彼女は、さも面白そうに喉の奥で響くような声で笑っている。

まるで全てを知っている上で、紡がれるバージルの嘘を嘲っているようだ。釈迦の掌で暴れていた孫悟空の気分が、今なら彼にも若干分かる気がする。

「はっは、嘘は感心しないねえ。バージルであってバージルじゃない、言わば禅問答みたいな存在。それがアンタだ、違うかい？」

「……ツク！」

言い切るときにビシッ！と、効果音が出そうな勢いでインペリオが指差すと、バージルは口を詰まらせた。何かを言おうとし、打開策を探し、しかし急に薄い笑みを浮かべながら低く笑い出す。

「フハハハ。そうか、ある程度は隠してたつもりだったが、バレてやがったか。……いつからだ？」

「いつからって言われると困るな。強いて言えばカンだな。ただ私のカンは、あまり外れた事はないが」

「カンか。女のカンってのは恐えな」

普段の彼らしくない砕けた口調。間違いなく、もう一人のバージ

ルである。

「女じゃなくて、私のカンが、だよ。それより、ずいぶん碎けた口調になったな」

「ん？ こいつア俺のクセだ。年中コイツみたいに喋ってたら絶対疲れるな。んなの、俺はゼツテカンベンだぜ」

自分を指差しながらバージルが言い、それに同意するようにインペリオも笑う。とても戦う前とは思えない、和やかな雰囲気が漂っている。

「ハッハア！」

いきなりであった。和やかな雰囲気から一転、闘気を纏ったバージルが瞬間の隙を突いて、インペリオの前に現れる。

技の出が最速である抜刀斬りで、躊躇いなく胴を薙ぐ。踏み込みも相まって、その速さは人間が反応できる速度を超えている。

だが、そんな斬撃を彼女は容易くかわした。今度はお返しとばかりに、右の振り落としがバージルの頭上から迫る。左足を軸に構え、腰の捻りを加えて振り下ろされた、それは確かに速さが乗っていたが、最後に見た赤い狩人の剣閃よりも遅い。

見切ったバージルが数歩下がって衝撃に備えていると、獲物を捉え損ねて空振りした右腕が、部屋全体の床に凄まじい亀裂を生じさせた。

「オイオイ、どんな魔法使ったんだ？ 人間がコレっておかしくねえ？」

「ハハハ、何でだろうな」

距離をとったバージルが苦笑気に顔を歪め、何食わぬ顔でインペ

リオは笑う。飄々として捉え所のない態度が、妙に彼の癪に障る。しかし、そんな事はどうでも良い。問題は、ただ右拳で床を殴った。それだけで床が八割方、崩壊してしまった方が問題だ。

どんなに力を持とうと、人間という枠に類別される以上、限界というものは存在する。にもかかわらず、インペリオは見事にその常識をブチ壊してくれたのだ。ならば考えられる事は多くない。

「なるほどな。全然魔力を感じなかったから気にしていなかったが、テメエ悪魔だな？」

バージルが言うのと、髪を掻き揚げながら彼女は低く笑った。その笑みは、実に楽しそうに見えてしまう。

「クックック、ご明察。そもそも常時、魔力を出してたら疲れるだろ？ そのおかげで私を弱いと勘違いした奴が、闘いを挑んでくる事もあるし」

「それをやるメリットは？」

「そりゃ、もちろんいろんな奴と戦う為さ。その中に強い奴がいればラッキーだし、いなきや倒して、ハイおしまい」

黒い笑みを浮かべているインペリオ。敵として戦っているのに、何故か本気で憎めない何かが彼女にはあるようだ。

「そろそろ良いかい？ 口で話すのは飽きてきたし」

「ああ。構わねえぜ」

なんとも締まらない始まり方をしながら、戦いは再開された。様子見を兼ねて、まずは幻影剣を数十本作製し一斉射撃。

蒼い銃弾となった剣群は、宙を走りながらインペリオに迫るが、彼女は握り拳を作るとラッシュだけで無数の幻影剣を碎いていく。

弾くならまだしも、砕いているのだ。両の手だけで。

幻影剣は囀、または奇襲にしか使えないと悟ったバージルは、エアトリックで頭上に移り、再び居合い斬りを繰り出す。縦方向から真つ二つにせんとする斬撃が迫る。それを臆した様子もなく、彼女は右手のアップパーを繰り出す。拳と刀がぶつかり、辺りに衝撃の波をまき散らす。

閻魔刀がぶつかった時、インペリオの拳からは僅かに血が吹き出た。素手で閻魔刀にぶつかった割に、その出血量が少なすぎるのは気のせいではない。

逆に彼女のアップパーが当たった時、閻魔刀を通して凄まじい痺れがバージルの右腕を走った。それは、右腕だけを何か巨大な物にぶつけたか？という疑問を彼に浮かべせるほど。異形の右腕ですら、しばらくは使い物にならないだろう。

予想外な出来事に舌打ちをしながら、右腕の異変を知らせないよう、常に死角を取るように動き回る。卑怯と言われるかもしれないが、勝てなくては意味がない。下らないプライドの為に勝利を捨てるほど、彼は無頓着な性格ではない。見つけた隙があれば、容赦なく突いていく。

（ここだ！）

人間離れたした脚力によって一気に距離を詰め、左足の蹴りを腹部に叩き込む。ドスン、と鈍い音がしてインペリオが、その動きを若干止める。

上手い具合に入ったので、その体勢のままニヤツと笑うが、すぐに違和感を感じた。足の裏から伝わるブーツの感触。それと腹の間に異物が割り込んでいる。

「どっせいー！」

すぐに抜こうとしたが僅かに遅れ、足を掴まれる。足と腹の間にあった物、それは彼女の右腕だった。インパクトの瞬間に腕を割り込ませる事で威力を抑え、そこから残った左腕がバージルの左足をガッチリ掴み、片腕で投げ飛ばした。

華奢な片腕が見た目に反した力を発揮したおかげで、バージルの壁の中に深々と背を預ける事になる。苦々しい思いで壁に空いた穴から出てくると、歯軋りをして右腕を伸ばす。まだ痺れがとれないが、異形の右腕から飛び出した蒼白い腕は真っ直ぐにインペリオに伸び、ギシギシと音を立てて握り締める。

「お？ 力比べかい？ 力なら、ちょっと自信があるんだよな」

飄々とした態度を崩さず、笑いながら脱出しようとするインペリオを握り潰そうとするものの、彼の表情にはいつもの余裕が無かった。

（何がちょっと自信がある、だ！ 上位悪魔も粉碎する、この右腕と互角？ 冗談も度が過ぎると笑えねえな！）

蒼白の右腕の感じる質感が、彼にも感じられる。

彼は自らの右腕の力を絶対だと思っている。バージルは魔具しか使おうとしない。だから勝てない。しかし、右腕も使いこなせる自分ならば、誰かに負けるはずがない。この力ならば、ダンテにすら負けない。そう思っていた。

だが目の前の女性、インペリオは真っ向から力だけで自分の力に拮抗し、そして打ち勝とうとしている。

「ざけんじゃねえ！！」

吼えようと状況が変わるはずもなく、遂に右腕からインペリオは抜け出した。

「いやゝ危なかった。ただ、お陰で肩こりが治ったよ。ありがとさん」

恐らく悪意のない、混じり気なしの言葉と屈託のない笑顔が向けられるが、それは彼の神経を逆撫でするには十分すぎた。

自分の力。絶対だと思っていた力が、今敗れた。クールを信条にしていた彼は、この時ばかりは何もかもを忘れてブチ切れた。

「おおおおおおおおおお！！！！！！」

走りながら右腕を振りかぶり、本気の殺意と共に振り抜く。彼の怒りに反応してか、ボウツと陽炎のように蒼白いものが揺らめく。

右腕本体がインペリオの顔を捉え、衝撃音とガンという硬質な音が響く。肌の下に金属でも仕込んでるのか、と疑いたくなるほど硬い彼女の肉体の内側を揺らし、さらに彼女は……右腕の後ろから巨大な右腕だけが現れ、自分に向かって迫る幻覚を見た。

怒りで威力の上がっていた先の一撃。それを遥かに超える力が、彼女を壁にめり込ませた。迫り来る豪腕は幻覚ではなかった。

粉塵が舞い、見るも無惨に瓦解した部屋の両サイドで二人が息を荒げている。ただ一人が激しく乱しているのに対して、もう一人はすぐに整えていた。

「いたたた……まったく、なんて力だ。そんな隠し玉があるなら、始めっから使えってんだー」

苦笑しながら、ポンポンと埃を払うインペリオ。だが立ち上がる時には彼女の顔から笑みが引いており、狙いを定めた野獣のような荒々しい双眸を伴った、好戦的な表情に変わっていた。

「ーやつと楽しくなってきたそうじゃねえか」

先程の一撃によってに彼が獲物ではなく、良い敵として認識されている事は知らない。だが纏う空気が変わった事に、彼も気付いていた。

戦いは前座が終わり、ようやく本番へと進もうとしていた。

だが何かに引っ張られるように、彼の意識は急激に暗転していった。

「ーー!! ここは……まさかな……」

不意に気が付いた彼の目の前には、砕けた床も先程までいたインペリオもなく、ある意味、見慣れた氷剣の柱であった。

「ああ、そのまさかだ。久しいな？」

氷のように触れる物を全て凍てつかせ、自分以外を拒絶し攻撃するような剣が乱立している。また、それらは実に氷と刀らしく、いつ砕けてもおかしくない危険さを含んでいる。そう、此処はバージルの心象風景が、具現化された世界であった。

その世界を見渡しているとかけられる声。其方を向くのが彼ならば、声をかけたのも彼。ただしその声からは、抑えようとしても抑えられない、滲み出るような怒りが籠められていた。

「何故だろうな。ここまで貴様に会いたいとは思わなかったぞ」

「俺は二度と出会いたくなかったね……」

舌打ち混じりに、ため息を吐いて疲労を露わにする。だが内心、彼は焦っていた。

確かに彼と自分は表裏一体の存在。自分のように意識の存在を確立し、操る事はできよう。だが一日、たった一日で表の人格を引きずり込むまでになるとは……。

（自分で言うのもなんだが、コイツも大概化け物だな）

「どうした、気難しい顔をして？ まさか俺には使いこなせないとも思ったか？」

“彼”が気が付けば、既に後ろにバールが回っていた。やはり、この場所の使い方を完全に把握している。

「ああ、そういえば前に言ったな……」

静かに切り出したバールに嫌な予感を感じた“彼”が下がるが、その直後“彼”の脇腹を閻魔刀が貫いた。思わず後ろに下がるが、突如として現れた鎖によって四肢を拘束。さらに周りを、静かに揺らめく炎に囲まれる。

焦燥感に駆られた“彼”が逃げだそうと暴れるが、その前に炎が鎖ごと焼き払った。心象世界にしては妙にリアルな肉の焼けた臭い、脂肪のベタツキが感じられ、中から瀕死の“彼”がよろめきながら出てくる。しかし数歩だけ歩いて、その場に倒れた。

「フン。主に刃向かったりするからこうなるのだ。どうだ、炎で体を清められた気分は？ 何、代金は請求せん。汚物は消毒しなくてはな」

「う……ああ……」

「もう、マトモに話せんか。まだ仕置き足りないが、敵が待っているんだろう？ ならば出向かん訳にはいくまい」

パチンと小気味よい指を弾く音が響き、“彼”が徐々に床に吸い込まれていく。下半身から上半身、そして顔。その時、“彼”の眼は『また奪い取る』と雄弁に語っていた。

しばらく両者の視線はぶつかっていたが、“彼”が消え去るのを見届けると、バージルはきびすを帰して歩き出した。

インペリオは待っていた。どうも今まで戦っていた彼は、戦い方がたどたどしかった。別に彼本来の戦い方を知っているわけではない。だが、それでも合間合間にある微妙な隙間が、彼のスタイルの違和感を伝えていた。

バージルが動こうとしないのは、体力回復を計っているのだろうかと考えた彼女は、わざわざそれを待っていた。どうせ戦うなら楽しい戦いにしたい。

血沸き肉踊り、命の全てを燃やし接戦の末、相手を討ち果たす。なんて心躍る展開だろうか。

そんな戦いを探して魔界をさ迷った。だが、そんな戦いは滅多に

できない。確かに良きライバルは何人かいる。だが、命の危機を感じながらも生への実感を感じるような戦いは、長く生きた中で数えるほどしかない。

死と破壊を好む悪魔からすれば、戦いは結果を目指すための過程に過ぎない。だが彼女は、過程を結果にしてしまっているのだ。全く以て悪魔らしくない。

（まあ、他の奴らがどう言おうと、私はこうやって生きてきたんだし、今更帰るつもりもないしな）

とにかく今は、目の前の相手に集中したかった。一時は敵と見なしたが、どうやら勘違いに終わりそうな気がしてきた。やはり、そうそう自分の愉悦を満たしてくれる敵は現れないらしい。

彼女が自分の中で落胆していた時、それは起きた。

――騒ぐ。体の中の血が、肉が、魂が彼女に妙な高揚感をもたらしてきた。

まるで何かの胎動に似ている。何か、強力な力を持った何かが現れようとしている。

風が吹く。風の通り道など無いような部屋で、急激な突風が吹き荒れる。

耳を打つ風の音。視界を確保するのも難しいほど、荒れ狂う風が部屋を滅茶苦茶にする。その中に蒼色の異形と、歓喜の咆哮が聞こえたのは、気のせいではないのだろう。

しかし、それは始まりと同様、唐突に止んだ。

いきなり起きた事態にインペリオが前を見れば、そこにはバールが立っていた。だが短いながらも激戦を繰り広げたにも関わらず、

彼に疲労の色は見えない。

そして……何かが変わった。具体的には言い難いが、何かが先程までと決定的に違う。直感で感じ取ったインペリオが気合いを入れ直すと、バージルはゆっくりと閻魔刀を抜いた。

細められた瞳からは、その感覚を懐かしむような感情が見受けられる。

「アルーフ・ティア孤高の斬剣……」

何かを噛みしめるように呟かれた言葉は、インペリオにも届いた。だが何なのだろうか。彼の雰囲気は、今までで一番近寄り難いものを醸し出している。触れるだけで、此方がバラバラにされそうである。

「Come on. It's not over yet. . .」

静かに手を伸ばしたバージルが、指でかかってくるように挑発する。インペリオも、彼がなんと言ったのか解ったため、嬉しそうに笑っている。

「確かに“勝負はこれから”だな！ 良いぜ。こっからは、チヨイと本気でいかせてもらうよ」

腕をぐるりと回して戦闘態勢が整うと、彼女は大胆にも歩いてバージルに迫っていく。

インペリオはバージルに向けて、ズカズカと歩いていく。その胸にあるのは恐怖ではなく、言い知れぬ高揚感であった。

先程までの、どこか若さ故の油断がある年代のような覇気ではなく、冷静に相手を見極め少しでも隙を見せれば斬られてしまう、そんな覇気を醸し出しているのだ。戦士ならば血がたぎらないわけがない。

恐らく、相手は本気になったのだ。ならば尚更、自分のルールを破るわけにはいかない。

敵と戦う場合は正面から歩いて近付き、己が力で薙ぎ払う。それが、自分を群ではなく個として他に意識させる力に気が付いた時から守り続けてきた、彼女のルール。

だんだんバージルに近づくにつれて、インペリオの腹の奥で炎が燃えていく。実際に燃えているわけではない。

楽しみで楽しみで仕方がない。そんな思いが、体の中で闘争心となって燃え盛っているのだ。それをくみ取ってか、バージルも閻魔刀を左に持つと無言で歩いていく。

両者の距離は狭まっていくが、それに反比例するように間の空気はピリピリしていく。互いに見つめ合い、相手を想って動くその様は、さながら燃えるような恋と言えようか。

ただし、この場合の恋は成就してしまった時が、どちらかの命運が尽きる事と同義ではあるが……。

「良いねえ、この感じ。こんなに緊張した睨み合いの後が楽しみだよ。アンタも、そう思わないかい？」

もう距離はほとんど無い。しかし好きな相手に語るような、軽い口調は崩れない。

それが、目の前の悪魔の性格を表しているのだろう。ダンテのようであり、かつバージルには苦手なテンションである。

先程までと違って急にバージルは寡黙になり、返事すらしようとしなくなった。

「おいおい。返事ぐらいしてくれないとお姉さん、悲しくて泣いちゃうぞ?」

インペリオとしては、彼は先程までの“彼”の方が好きだった。フランクな方が彼女の好みなのだ。

(そう言えば、年中コイツみたいな話し方だと疲れる、みたいな事言ってたな……)

先程までの彼の言葉を思い出し、確かにそうだと同意せざるをえないインペリオであった。確かに、急に喋らなくなった。彼女が思うに、彼はクールなキャラを貫き通しているのだろう。だから殊更、先程までの彼が際立ってしまったている。

「お姉さん、と呼ばれる年齢でもないだろう……」

しかし、ようやく口を開いたと思ったら、出てきた言葉はデリカシーに欠けるものだった。思わずこめかみに青筋がたってしまうが、苦笑で誤魔化す。

「……ククク、ようやく口を開いたと思ったら、出てきた言葉が言うに事欠いてそれか。アンタ、デリカシーってのを知らないのか?」
「知らない。そもそも悪魔にデリカシーなど無用だろう。それに長命な悪魔が、人間のようにいちいち年齢を気にするな。歳月を重ねて存在を昇華させるのは、異形の特権だろうが」

目は口より物を言うとはよく言ったもので、彼の視線には何を当たり前な、という侮蔑が込められていた。

そう、彼女は悪魔。そして悪魔は永い時を生きる事で、矮小を強大に、恐れを自信に変える事ができる。だが、

「いくら悪魔であろうと、仮にも私は女だぞ？ 些か酷すぎやしないかい？」

「グダグダ囀るな。貴様は悪魔。悪魔は年を経て力を付ける。異論は認めん」

少し話ただけで、もう彼の毒舌は治らないと悟ったインペリオが言うが、やはり彼の口は毒を吐いた。

もう口で話すのはやめ、という意味を込めてインペリオは相手を見つめる。彼女自身には分からないが、この時の彼女の目はまさしく悪魔のそれであった。見据えた相手を射殺すかのような呪われた瞳、魔眼。

邪々しくも、見る者を魅了する眼を正面から見据えるバージルは、しかし刀のように鋭利な眼で見返す。深く絡み合う冷鋭と幽鬼の視線。互いに腹の底を探り合い……高まった緊張は爆発する。

先手を取ったのはインペリオであった。たった一步。その一步でバージルとの距離は無くなる。

人間は悪魔と比べると絶対的に強度が足りない。そんな弱く脆い人間は、他の種族から自らを守るために、筋力ではなく知識を高めた。その過程で多様な知識を得た。無論、その中には拳の威力を上げるために捻りを加える、などの所謂“技”も存在していた。

だがインペリオの繰り出す爆碎の嵐は、そんなものなど最初から無いような、実に悪魔らしいやり方であった。すなわち人間には、

いや悪魔以外には到底獲得し得ない、常識破りの腕力によって破壊のばらまきが行われている。

息一つ乱さない、残像を残すほどの乱打が指一本、髪一本分の位置を掠めても、しかしバージルには焦りの表情が伺えない。当たらない物を見極め、当たる物だけに軽い力を加えていなす。ただ冷静に全てを見通すような深い瞳には、インペリオの体の使い方から、どこを狙おうか定めようとしている目線に至る細かな動きが見えていた。

だからこそ闇魔刀は振らない。攻撃が見えて反応できていれば、つまりはカウンターを浴びせられるという事になる。その必殺のタイミングで拝ませよう、魔を喰らう刀の真髄を。

「良いねえ！ 攻撃が全く当たらないよ！」

自分の攻撃が全く当たっていないにも関わらず、彼女の顔に浮かぶのは歓喜の仮面。

彼女は、自らの拳が速く重いと自負していた。その証拠に、今まで幾百もの有象無象を葬ってきた。しかし、ここまでの攻撃を繰り出しながら、敵は未だ倒れない。

こんな楽しい気持ちは何時以来だろうか？ もう正確な事は覚えていない。

吐き出す吐息は荒々しく艶やかに。たぎる血潮は熱く激しい。燃える闘争心は狂おしく愛おしい。

「ふははははは！！！！ 楽しすぎて気が狂いそうだ！！ そうは思わないか、バージル！？」

「ほざけ、戦闘狂。少しは黙っていられんのか？」

自分の周りには変な人物しかいない事に眉をしかめ、バージルが

攻めに転じる。

腰を落とし前に傾く力を加えて蹴る、所謂ヤクザキックをおもむろに繰り出す。頭蓋骨ならば軽く蹴り抜きそうなブーツの裏がインペリオに入るが、やはり容易くはダメージを入れる事は許されず、左腕によって彼の右足は止められてしまう。だが悪魔の体にも関わらず、彼女にその場でたたきを踏ませてしまう程の威力であった。

しかし相も変わらず芸のない攻撃に、インペリオは僅かな不安を覚えた。嫌な予感がする。理由は分からない。しかしカンが冴え渡るからこそ、それに頼って下がるべき――

彼女の考えは、そこで強制的に断ち切られた。左側からの衝撃が顔を襲い、後ろに吹き飛ばされる。遅れてやってきた痛みと、闇魔刀を握る右腕を振り抜いた姿で佇むバージル。それらが顔を殴られたと理解させた。

流れる体を腰の踏ん張りを効かせる事で堪えようとする。いかに女とはいえ中身は悪魔なのだ。その体は、しばらく飛ばされてから止まった。

辺りに鉄の焼けた臭いが漂い、靴の裏の熱が靴を通してインペリオに知らせてくる。だが、そんな些細な事はどうでもよかった。それより今の一撃だ。

今更であるが、ようやく彼女は分かった。あの右腕は危険すぎる。目の前の男からは、信じられないが悪魔と人間の匂いがするのだ。そのような混血種に思い当たる節があるとすれば、それは遙か昔。人間界に於いて悪魔の全盛期だった時代。その時期に起きた、乱心した腹心による魔帝封印、及び魔軍の撤退事件が仲間内では有名であった。

当時のインペリオは、魔軍には所属せずに人間界をさまよい歩き、好きな物を食べながら生を楽しんでいた。だが人間に紛れて生きていようと、魔軍の名を聞かない日は記憶に無かった。

曰わく、ロードグリフォンが人間のいる巨大な村を結界で囲い、中の人間を粗方喰った後に雷で壊滅させた、と。

曰わく、ロードファントムが人界に進出してきた霸王の先遣隊、三千もの悪魔を一体で満身創痍になりながらも撃滅した、と。

そしてある日を境に、目に見えて悪魔の数が減った。近くにいた悪魔から聞いてみれば、魔帝が少なくとも向こう千年は人間界に来れなくなったらしい。

そして、その悪魔は最後にこう言った。

我等が歴史で最たる英雄は、あの日を境に最たる禁忌となった。彼の名は永遠に忌むべき対象として、記憶に刻み込まれるだろう、と。

「スパーダ……」

荒い息しか聞こえない空間で、彼女の口にした名前は妙な響きを伴って、バージルにも聞こえた。

「そうかそうか。何かおかしいと思ったら、そういう事だったか。あの反逆の魔剣士の血族が相手とは……。私以外の悪魔なら泣いて喜びそうだよ」

クッククク、と笑って軽く咳き込む。その時、口の端から零れ落ちた赤い液体が、彼女の唇に妙な艶やかさを与える。

「良いねえ。ちょうど熱くなりすぎたと思ってたところだったんだ。仕切り直しにはもってこい、ってな」

手を握って開いてを繰り返し感触を確かめているインペリオであったが、相手の調子が整うのを待つ程、彼は悠長ではない。頭上にエアトリックで移動したバーシルが、閻魔刀をしまうと再び右腕を後ろに引き、矢の如く打ち下ろす。

殴打にしては鋭い、まるで空気を裂くような音を控えさせながらバーシルの右腕が頭上を狙うが、インペリオは体を半歩ずらす事にかわす。破片が飛び、タダでさえ脆い床に追い打ちをかける事になったが、外したと解ってから彼の動きは速かった。

右腕を後ろに引き、その反動で体を反らしながら右足を上に持っていく。常識離れた動きで蹴りを繰り返し出し、意表を突かれて動きが遅れたインペリオの顎に、容赦ない一撃を叩きこむ。

だがインペリオもタダでは引かない。蹴られたと理解するより速く、視界の端に僅かに捉えた彼の足を掴み後ろに投げ飛ばす。

何度目になるか分からない穴を壁に空け、その場に崩れ落ちるバーシル。額が割れたのか引っこ切り無しに溢れる血が視界を埋め、無造作に落ちている目を引く銀髪は鮮血で染まっている。しかし、それを拭いながらあくまで獲物を駆るような目で彼女を睨みつける。

一方のインペリオも無事ではなかった。痛烈に顎に打ち込まれた爪先は、彼女の脳を激しく揺らした。そのため体勢が安定せず、今にも意識が飛びそうである。それでも不敵な笑みを崩さないのは、悪魔としての矜持か、闘争者としての意地か。

「グッ……相も変わらないその馬鹿力。驚嘆に値するな……」

閻魔刀を起点にして立ち上がると、荒い息で肩を上下させる。蒼いコートは血と埃に塗れてしまっている。

「はは……バカ言っちゃあ、いけないよ、つととと。私は、まだま

だやれるよ……」

体勢を低くし、倒れても反応できるようにしながら、こちら荒い息のまま立っている。

「その割には、随分足元が覚束ないな。何なら負けを、認めて倒れても、いいんだぞ?」

「それ、こそ冗談。アンタが負けなよ。そうになったら、私は悪魔の注目を、集められるよ……」

皮肉や軽口を言えるほど未だ互いに体力は残っているが、それでもバージルの方が若干不利であった。

先程まで良いように体を使われていた訳だが、その時の“彼”が無茶な戦い方をしたせいで、ダメージを食らい過ぎている。加えて進行形で血が溢れ、止まる兆しを見せない。頭部は主要な血管が集まっているため、当然と言えば当然だ。

（ふむ、マズイな。血を流し過ぎている。これ以上は戦闘に支障が出るな……）

冷静に自分の状況が掴めている辺り、彼は様々な意味で達観している。しかし、どう考えてもこれ以上長引かせてはメリットが無い。決めにかかる。その決意を込めて閻魔刀の鞘に手を置く。

さあ、いざ見せよう。閻魔刀の鋭さをその身を以て味わうがいい。体の重心を落とし、刀身を腰だめに構えて深呼吸をする。吸う事で体に爆発力を溜め、吐く事で余計な物を削ぎ落とす。熱くなっていた体と心は冷え、さらに脱力。

彼の目に映るのは倒れ伏すインペリオに刀を向ける自分。無論幻覚には違いない。だがそれぐらいの自信が丁度良い。自分が勝利する画が見える事こそ、拮抗したパワーバランスを打ち破る手段。

インペリオも彼に反応すべく、その一挙手一投足に目を光らせていた。

左手に持った刀を僅かに傾ける。あれなら恐らく、左下からの逆袈裟が一番効果的だろう。緊張するでもなく至って自然体で彼を視界に納め――不意に視界が埋まる。

「ッ、とと!!」

走る動作どころか動く動作すらしていない、いや、そもそも動くうとすれば目が捉えているだろう。一瞬、まさに瞬く間に彼は距離を詰めてきたのだ。しかも今までのように頭上からではなく、正々堂々正面から。

なんて面白い。一対一で正面からの闘い。こんな血がたぎる展開を待っていた!

不意を突かれたにも関わらず意気揚々としているインペリオ……だが、不意に見えてしまった。まさに今と同じ体勢の自分が、自分の右腕が体から分離し宙を舞う光景が。それが当然と言わんばかりに容易く跳ねられる映像が。

それは、もしかしたら彼女が信ずるカンが見せた妄想かも知れない。彼女以外なら気にも留めない些細な事。

しかしインペリオはそれを信じ、即座に後ろに身を投げ出した。理由は簡単、あまりにも明瞭すぎる。実際に体験したかのような光景が見えれば、人の内外を問わず危機回避能力や反射、本能で動くだろう。

果たして、その未来予知にも似たカンは正しかった。先程見た剣線を寸分違わずなぞっていくバージルの刀。その軌道上には確実に自分の右腕もあった。

あのままいたら、と思うと全身を恐怖に似た寒、気……が?

(……恐怖? 私は今、バージルの刀を……恐がった?)

力を持った退魔師や同族でなくては滅多に怪我すらしない体。幸か不幸か、“それ”を彼女は今し方まで忘却の彼方に置いてやった。

命を守るための本能であり、何かを殺す引き金にもなりうる感情“恐怖”は忘れさられていた間に肥大し、久しい邂逅はインペリオに戦慄きを与えた。

微弱な足の震えが、小刻みに上下する肩が、体表を這うざわめきが収まらない。まるで生を受けた直後の赤子のように、無力な自分。

(ははっ、おいおいバカ言っちゃいけないよ。悪魔がビビったらおしまいだろ)

気迫では負けているつもりはない。相手は“半分”だけ悪魔なのだ。何を感う必要がある? しかし体は正直だ。この震えが武者震いであつてもらいたい。否、武者震いだ。

「どうした。餓鬼のように震えているぞ?」

相変わらず額から血を流しながらバージルは不遜に笑う。発する言葉の一つ一つが彼女の神経を蝕む毒のよう。

先程までとは何かが決定的に異なって、それがインペリオを縛り付けている。彼の視線が射抜くは体か心か魂か。しかし、そんな視線を受けるのは初めてではない。

そう、あれは確かあの時。二千年前、興味本位で魔軍の本拠地に出向いた時、これと似た視線を受けた。今の自分ですら未だ及ばな

い魔力の量と質。圧倒的な剣技とセンス。辛うじて逃げる事は出来たが、あの魂を透かす深い眼は心底肝を冷やした。それが今、自分に向けられている。

（腐っても魔剣士の血族って事か……）

寡黙、冷淡、毒舌、剣閃。この親子はどこまでも似るらしい。違うところと言えば右腕だろうか。

「いい加減飽きたな。一思いに叩き斬ってやろう」

形勢は完全に逆転していた。あれほど圧倒していたインペリオは動けず、バージルは初めの彼女のようにゆっくり歩いて近付いていく。恐怖に囚われているインペリオには、その動作すら恐ろしく思えてしまう。

……恐い。今までの自分が思い出せない。恐い恐い。ゆっくりと歩み寄る彼を見るだけで発狂しそう。恐い恐い恐い。何が怖い？ それは死ぬのが……怖い？

あれ？ 私は死ぬのが恐いのか？ 悪魔でも人間でも逃れられない恒常的生の破綻、それが死。それが早いか遅いかの違い。そんな事に今更ビビってたのか？ ……いや、違うな。むしろ死という結果に至る過程、つまりあの刀が恐かったんじゃないか？

ならどうする？ どうすればあの刀の恐怖に打ち勝てる？ 簡単だ、あの刀を振らせるヒマを与えなければいいだけじゃないか。

「……ツクツク……」

バージルの耳に口の端から漏れるような笑い声が入ってきた。眉をひそめインペリオを見やれば、彼女は左手で顔を覆いながら静かに笑っていた。

「……なんだ、こんな簡単な事すら解らなかったのか……ああ。バカだ、私はバカだよ……」

小さく呟かれた言葉をバージルはしっかり聞き取った。どうやら自分と同じく何かを悟ったらしい。なぜなら目に見えていた震えが止まっているからだ。

「ふへえ。なんか私らしくなかったな。いやはや、恐怖ってのは忘れちゃだめだってよく分かったよ。さてー」

勢い良く左手を振り払ったインペリオには、寸分の迷いすら感じられなかった。何かを振り切った、あるいは悟った者との戦いは気を抜く事は許されなくなる。

「ーこっからは今までみたいにはいかない。全てを振り切ってやんよ!」

「良いだろう。では此方も初めからクライマックスでいってやろう。鬼は地の底に帰るがいい」

削岩機よろしく両腕で嵐を起こすインペリオであったが、バールは既にこの速さに慣れている。その証拠に、先程から突き出された腕を掬い上げるように下から閻魔刀を振るっていた。

だが閻魔刀を振る動作をした瞬間、間合いの外に離脱され一時的に殴打の速さが上がって返ってきていた。その様は振らせる前に潰すというか、攻撃こそ最大の防御を彷彿とさせる。

（なるほど。閻魔刀を危険と認識し、隙を与えない攻撃で牽制しているのか）

右、左、上、下、正面と全面からの攻撃が激しく続いている。それを的確に最小の力でいなしながら、その時を待っていた。

そして一際大きな一撃がやってきた。左から体重を乗せたストレートが正面に飛んでくる。この上なく良いタイミングを逃すほど、バールは甘くない。

胴体目掛けて迫るストレートを、今までより力を加えて後ろに流す。勢いに乗ってインペリオも右に体が流れ、前のめりになる。即座に左に持った閻魔刀を流した右に持ち代え、刃を逆にし下から振り上げる。

そのままいけばインペリオの腹が真っ二つにされていただろうが、辛うじて閻魔刀の範囲から無理矢理体を追い出した。しかし無理な行動の反動で仰向けに倒れこむ。だが悪魔はただでは起きない。閻魔刀を振り切ってガラ空きになった右の脇腹に、インペリオが痛烈な爪先をめり込ませた。

「ツカハ……！」

ミシリという肉に食い込む音が聞こえ、肺が圧迫されたらしく息が抜ける音を出す。上体が崩れ右手から閻魔刀が虚しく零れ落ち――

ーそれを左手でキャッチする。

見上げる体勢からでも何をするか予想がついた。急いで立ち上がろうとしたインペリオだが、逃げる間を与えず逆手に持った閻魔刀を仰向けに倒れる彼女に容赦なく振り下ろした。

刃が肉を貫く感触。それに遅れて血が吹きだす手応えが閻魔刀を通じて確認できた。

「カツ、フォアア……」

位置からして胃の辺りだったのだろうか、口から血を吹き出し薄い金色の髪を赤く染める。咳き込む度に赤い液体が彼女の頭部と腹部を侵食する。

大量の汗を伴って荒く呼吸をするインペリオだが、ダメ押しとばかりにバージルは閻魔刀に力を込め中を掻きまわす。それはある種の淫音にも似た、だが聞くだけで肌が泡立つような不快な音だった。

「イッグアアアアアアアアアアア……!!」

まさに絶叫。娯楽施設にあるような絶叫マシンで発する声とは明らかに一線を画す咆哮が部屋中に響く。誰であろうと耳を覆いたくなる衝動に駆られる悲鳴にもかかわらず、バージルは見る者がゾクツとする笑みを薄く浮かべていた。

「……良いな、実に良い。もっと啼け」

彼女にとってこの悲鳴は心地よいBGMにしか聞こえない。それは性格云々ではなく、もはや悪魔の血のせいとしか言いようがない。

彼女が悲鳴を上げる度に彼は満足そうに嘆息する。抗おうとする腕を踏みつけては嬉しそうに頷く。苦痛に歪む顔を見れば喜びに顔

を歪ませる。その様は完全に常軌を逸していた。

だが、その声も次第に小さくなっていった。体は僅かに痙攣し、声は掠れたように聞こえ、ついには何も発さなくなった。いくら悪魔として体の中身を刀剣に、ましてや閻魔刀に引っ掻きまわされてはこうならない方がおかしいだろう。

バージルも声が無くなった事に不機嫌に眉を顰め、何かが抜け落ちたように目を瞑る彼女の顔を覗き込む。

「おい起きろ。早く起きろ。そして今すぐ哭け」

何らかのアクションが無いか待ってみるバージルだが、待てども彼女に変化は無い。その様を見たバージルは鼻で笑った。

「フン。もう死んだか。如何に悪魔といえど、存外脆いものだな……」

興味が失せたらしく閻魔刀を抜き華麗に血を払う。その動作だけで、刃にベツトリ付着した血は容易く落ち、そして静かに納刀する。チン、と刀身が戻るべき場所に戻った音が聞こえると、見納めと思ったバージルは屈みこみインペリオの顔を眺めた。その距離は、もう少し体を前にすれば唇が触れ合うという際どい距離であった。

あれほど綺麗だった薄いブロンドは、今や血をすっかり吸い込んで硬くなっている。白い肌と赤い血のコントラストは扇情的で死化粧に相応しい。熟れた果実のような唇は未だ流れる鮮血で瑞々しく、恐らく触れたら柔らかいだろう。そんな可愛らしい唇からは甘い吐息が……。

「吐息……だと？」

自分で見ていてバージルは疑問に思った。目の前の悪魔は既に死んだのではないのか？

そんな疑問が浮かんだ瞬間、首筋に暖かい温度と生温かい液体の感触がした。

「ふふ、油断、したな……」

「馬鹿、な……確かについさっきまで、息は無かったはず」

彼が目線を下に向ければ、死んだと思っていたインペリオがその鋭い牙を余分な肉の無い引き締まったバージルの体、もっと詳しく言えば首に突きたてていた。

「悪魔、なんだから息ぐらい、止められるだろ」

食らいついた状態で器用に話すインペリオに若干感心しながら、バージルは自分の詰めめの甘さを脳内で罵倒した。信じられないが、相手は人間の常識が通じない相手なのだ。

体が八割以上吹き飛んでも復活する悪魔や自然現象的な悪魔もいるのだから、瀕死の重傷を負いながらも長時間、息を止められる悪魔がいたとしても不思議ではない。

「さあて、もう決着、はついてるけど、最後まで……足掻かせてもらうよ……!!」

一体どこにそんな力があったのか、インペリオはバージルの喉笛を噛みちぎると蹴り飛ばす。予想外の行動にバージルが一瞬戸惑った隙に閻魔刀を鞘から引き抜くと、蹴り飛ばされて体が流れていたバージルに向けて、今持てる全ての力を掻き集めて閻魔刀を投擲する。空気を切り裂きながら閻魔刀は真っ直ぐ彼に突き進み、そしてその身を心臓に埋没させた。

「カッハハ………これでさっきの分、少しは、返せたかな……」

バージルに突き刺さったのを確認すると、インペリオは嬉しそうに笑った。

ようやく彼に一矢報いる事ができた。ここで舞台を退場しなくてはならないのは残念だが、唯一それだけは成せたのだ。贅沢は言わない。ならば敗者は大人しく臥しますか……。

もう口を動かす事すらできない体でそんな事を悠長に考えているインペリオ。出血が酷く内蔵はズタズタ。いくら悪魔でもさすがに無理だな、と考えたのを最後にインペリオの意識は完全に闇に飲みこまれた。

倒れたインペリオが意識を無くしたのと、ふらつきながらもバージルが立ち上がったのは、ほぼ同時であった。息をする度にインペリオに食いちぎられた喉からヒューヒューと空気の抜ける音がし、胸からは断続的な鋭痛の波が感じられる。

「グッ、くそ。最後の最後で、アジな真似を……」

息も絶え絶えに愚痴るとバージルは自らの胸に生える閻魔刀を見やり、これからやる行動を考えてため息を吐く。

これを並の悪魔、ましてや人間が食らったら百パーセント死んでいる。ダンテに斬られた時もそうだが、つくづく自分の体はしぶとい。心臓を貫かれても生きているなんて生物的にあり得ない。

ドグン、と心臓が跳ねる。彼の意志とは無関係に、早くも生きようと自己治癒を始めたらしい。早くしなくては心臓に閻魔刀が取り込まれてしまう。そうなれば抜くのが困難、かつ激痛を伴う事になる。

「……一思いにやるか……」

再度ため息を吐くと観念して閻魔刀の柄に右手を置き、歯を食いしばると一息で抜く！

「オ……ウア……！！」

声として成り立っていない声を出して悶えるバージル。右手で閻魔刀を持ちながら倒れまいと足に力を入れる。

だがポツカリと黒い穴が空いた心臓部は、既に盛り出てきた肉によって埋まっていた。

「ッ………フゥ」

痛みが収まり動けるようになるとバージルは喉も触ってみる。こちらは大した痛みもなく、いつの間にか治っていた。

今回はバージルの勝ちという事で決着がついたが、かなり危うかった。中の奴には勝手に傷を付けられるわ、骨を折るを通り越して砕く殴打をされるわ……。

インペリオの不調も要因の一端を担っている。途中から目に見えて動きが鈍くなったり、かと言えば良くなったり。それにバージルの目には、彼女はまだ何か力を隠している風にも見えた。

敵を殺すのは簡単だ。仰々しい武器が無くても、身近にある物で

簡単に人の命は奪える。そこに自らの手を殺人に染める事に対する忌避感があるから、万人は殺戮者になりえない。

だがバージルには、そんなものは既がない。故に障害となる物を斬り捨てる事を躊躇わない。

しかしこの状況でバージルは葛藤していた。命を狙われるから殺しておくべきか、偶然出会った強者をさらに強くさせるために生かしておくべきか。

これほどの力を持っているのだ、次に勝てる保証はない。

しかしコイツのようなライバル的な奴がいれば、自分はさらに強くなれるのではないか？

しかし負けたら死ぬぞ？

負けなければいい話だ。そもそも負けを仮定する時点で負けている。

どうやって強くなるつもりだ？

未定。しかし何とかしてこそス親父パーダの息子だ。違うか？

……………。

……決まりだな。

そこまで考えてバージルはインペリオに向き直った。しゃがみこ

み、インペリオの傷口から血をすくって掌に貯める。DTの要領でインペリオの血液を魔力で中和、固形化し即席にして簡易なバイタルスターを作る。

いやはや、スター系統の道具とは作るのが大変だな。スモールサイズですら魔力の運用を間違えると爆発しかねない。なんとも不安定な物だ。しかも有用だから質が悪い。いつそニトロの方がまだ気が楽だ。

彼の性格が出てか、かなり精巧にできたそれを砕いて口の中に流し込む。すると効果はすぐに出てきた。腹に空いた穴は塞がり浅く早い呼吸は、深く遅い呼吸に変わった。そこに悪魔の生命力が加わるのだ、これで死にはしないだろう。

やる事が終わると、疲労感と倦怠感からバージルは彼女の側に座り込む。そして、いつでも手に取れる場所に閻魔刀を置くと、片膝を立てて目を瞑った。

不思議だ、体が軽い。

……ああ、そうか。これがあの世か。てことは私は死んだのか？
まあ、あんだだけボロボロにされりゃいくら悪魔でも死ぬわな。

にしてもバージル、か。強かったな。スパードにはまだ及ばないが、奴はまだまだ伸びる。あんな強い奴、ホントに久しぶりだったな。あれぐらいやったんだから、さすがに死なないまでも大怪我を負わせたろう。ま、あれで許しますか。

それにしても……心地良いな。今は見えないけど、もうすぐ三途の川が見えてくるかな？ それとも今渡ってるのか？ ……どっちでもいいか。

次は何に生まれ変わるだろうか。また悪魔か、それとも人か。もしかししたら動物になるかもな。次の生もしっかり楽しませてもらうさ。

……ん？　ようやく体が薄れてきた。これぞあの世って雰囲気だな。さあ、次は何か楽しみ……………。

「……知ってる天井だ……」

開口一番そんな事が出てきた。

インペリオは不思議に思った。思い出すだけでも痛々しいが、バージルによって自分の内蔵は凄まじい事になっていたはず。あれは悪魔とて致命傷になるだろう。にも関わらず生きている事が全く以て理解できなかった。

と、突然すう、と息を吐く音が聞こえ床に倒れたまま視線を上に向けてると、彼女の頭の近くでバージルが片膝について目を瞑っていた。

「！！　ツ……………」

反射的に立とうとしたが腹部にまだ違和感があり、インペリオは震える息で再び倒れ伏す。

どういう訳か死ななかったが、これは詰んだかと思っていると微妙な違和感を感じた。今みたいに動いたにも関わらずバージルは微動だにしなかった。

これは寝てると思った時には、既にインペリオは右手を握り締め

ていた。ここまで無防備な状態で敵がいるのだ、こんな美味しい場面はあるだろうか。

ひたすらに無表情のまま立て膝をついて後ろに振りかぶり、風を切って豪腕を振るう。

しかし、その手は顔面のスレスレで止まった。インペリオ自身も急に柔らかい笑みを浮かべると、またその場に仰向けになって大の字で倒れ込む。

「どうした、何故止めた？」

「うお！ 起きてたならそう言えよ」

いきなり上から覗き込まれたため飛び退こうとして腹に痛みが走ったのか、インペリオは顔をしかめて呻く。

「あまり激しく動くな。いくら回復させたとはいえ、まだ違和感はあるだろう」

特に表情を変えるでもなく淡々というバールに、インペリオは違和感を覚えた。

先程までの突き刺すような殺気は消えた。それでも冷淡な瞳は変わらないが。

「なあ、何で急に優しくなったんだ？ ていうか私は死んだんじゃないのか？」

「何だ。あのまま放置してほしかったのか？」

それはすまない事をしたと言うバールの皮肉を流し、インペリオは真剣な眼差しで彼を見据える。その雰囲気にもバールも居住まいを正して視線をぶつける。

「貴様を生かした理由だが……そうだな、強いて言えば貴様と似た理由だ」

バージルの言葉に興味を引かれたらしく、インペリオは真剣に耳を傾ける。

「貴様は強い奴を求める。俺も強い奴を求めていた。そして今の戦いで、どちらも強者だと分かった。なら貴様を生かしておく方が面白からう」

「アンタねえ……大きいっていうか考え無しっていうか」

呆れたようにため息を吐くと右手で空間を引き裂き、会った時のように瓢箪の中身を傾ける。死にかけた体で飲むのが堪えたのか、くうー！と嬉しそうに顔をしかめる。それにしても飲むのが早い。

「クハアッ！！ うん、いつも以上に美味しい！ アンタも飲むかい？」

インペリオは手にした瓢箪をバージルに渡そうとするが、彼は首を振って断った。それを残念そうに笑いながら持ち直し、再び口を付ける。

「さて、ようやく終わった。ではな。もう会う事も無いだろう」
「チョイと待ちな」

酒を飲むインペリオを置いて立ち上がり踵を返したバージルだが、その肩を有無を言わさない力で掴まれた。

「何だ。用があるなら手短にしろ。俺は忙しい」

露骨に嫌そうな顔をするバージルに、彼女は瓢箪を傾けて息を吐き出した。それはアルコールがかなり混じっているらしく、かなりキツイアルコールの臭いが鼻を突く。

「桃太郎は鬼ヶ島の鬼たちを退治して、島にある宝物を持って家に帰りました。めでたしめでたし」

いきなり訳の分からない事を悪魔が言ってきたので、彼の脳内はクエスチョンマークで埋め尽くされた。

「何が言いたいんだ？」

「おりよ？ 童話『桃太郎』、知らない？」

「知らん」

じゃあ伝わらないわなと苦笑するインペリオに、ムスツとした顔でバージルが言う。彼女にしても、ちょっとしたネタでやってみたのに全く伝わらなかった事が逆に恥ずかしい。

桃太郎を知らないのでは話を続けようがないので、仕方なくオブラートに包まず率直に言う。

「コイツは私のルールなんだがね。私は誰かに喧嘩をふっかけて、勝てばソイツを喰らった。でも運良く私に勝てた相手には、私が用意できる範囲で好きな物をあげるようにしてるんだ」

聞いていてバージルは感嘆のため息を吐いた。確かに日本の古代史の中には喧嘩を称して人間に挑む鬼、そして勝った人間が金銀財宝を貰うという内容が書かれていた気がした。

なるほど、相手が鬼の起源ならば確かにそうかもしれない。さてどうするか……。

一方のインペリオもバージルの解答が気になっていた。たまに勝った人間は目も眩む財宝や美味なる食物、傾国の美女を頼んできた。それらは確かに人間が生きる上で必要な欲望の塊であり、人の数だけある欲望は見ていて飽きなかった。

では目の前にいる半人半魔は何を願うのだろうか？ 実に興味をそそられる。

「何でもいいのか？」

「ああ、私にできる範囲なら何でも」

それだけ言うとはバージルは無言を貫き、インペリオは楽しむようにニヤニヤと笑って答えを待った。

さあ、早く言うが良い。長いーと言っても、つい先程潰えかけたがー悪魔の生の中で半人半魔の欲望に合間見える。楽しみで仕方がない。

「……よし、決まった」

来た！ 久しぶりに待つのが辛かったが、待ってました！

さあ、何がくる？ 金銀財宝か美味なる食物か、男らしく傾国の美女か、はたまた素晴らしい名刀か。早くアンタの欲望を見せろ。

「俺が欲しい物。それは……」

「それは……」

ヤバい、気持ちが高ぶってきた。私は準備できているんだ、さあさあさあ！

何かを求めるようにスイツと右手を差し出してくる。いざ、ご開帳！

「お前が欲しい」

………は？

何故かインペリオにフラグが立ちそうな気がしてなりません。さあ、とりあえず寝ようか。昨日も睡眠時間が一時間半しかなかったのだから。

この小説では悪魔の血をバージルの魔力で中和、固形化する事でバイタルスターができる。ご都合主義乙。

- ・デビルスター…S & amp; L
- ・バイタルスター…悪魔の血とバージルの魔力で制作可

眠くてあとがきすら全く書けません。神はいるのに、神はいるのに……

I Love is tricky! それは捻れた恋の道（前書き）

よろしくお願いする、我が主^{マイロード}
インペリオ

普通の方が普通じゃないんだよ、きつと
ディエチ

最近の人間は悪魔以上に恐いな
インペリオ

で、貴様は何の用だ？
バージル

そんな答えが聞きてえんじゃねえよッ！！
ノーヴェ

I Love is tricky! それは捻れた恋の道

目の前の悪魔、インペリオは自分の用意できる範囲の中なら何でも用意すると言った。そこでバージルは何か良いかすぐに考えた。始めは『莫大な魔力』に至った。しかし、そんな概念的で抽象的な物が用意できるのか疑問を抱いた。恐らく『物』とは言ったが、狭義では『具体的な形を持った物質』を指すのだろう。ならば一体何が良いか？

人生すら狂わす食物……いまさら食に興味はない。

愛を交わす存在……いずれは、と思うがその時ではない。

闇魔刀を超える名刀……スパードを馬鹿にしていると思えない。

じっくり黙考した結果、出てきた言葉は単純明快であった。すなわち、

「お前が欲しい」

彼女が言った桃太郎は知らないが、西方を舞台にしたランプの魔神の話は知っている。アレに出てくる魔神は言っていたが、この悪魔は『自分の永久行使』を禁止していない。

つまりバージルは悪魔への願いとして、悪魔の叶わせる願いを無限に増やすといった類の願いをしたのだ。願いを叶えるランプを常に使えるようなものである。

そのためにバージルはランプーインペリオを手中に収めようとする。

しかし聞く者によっては誤解を受けそうな事を、バージルは臆面もなく言い放ったのだ。言われた方はたまったものではない。長い年月を生きた彼女ですら、その回答を誤解し困惑していた。

「えっと、その、あの、だから……」

こんな事で取り乱すなど自分らしくない。もっと言えば悪魔らしくない。異性に好きと言われて赤面するなど、思春期の少女じゃあるまいし……。

だが女らしく扱われたのが久しかったせいかなインペリオは内側から来るむずがゆさと、ひたすらな頭部の熱を感じていた。

「どうなんだ？」

少し待ってもらおうと後ろに一步下がるが、その動作を逃走と勘違いしたバージルが右腕を伸ばして抱き寄せ、紺碧の瞳でジッと彼女を見つめる。

そんな狙っているとは思えないバージルの行動によって、彼女の頭は完璧に理性を失った。その証拠にインペリオは「はう、うああ」といった、訳の分からない事までばやき始めた。

「さあ、早く叶えろ」

「う、うるさい！」

バージルがまた問うと堪えかねたインペリオは、そう吼えると彼を突き飛ばした。

だが、ここで忘れてはいけない。彼女の筋力は殴打で床にヒビを入れるほど。今も戦闘時ではないにしろ、かなりの力を込めて拒絶した。

結果、バージルは摩擦音を出しながら床を滑る事になった。

「いきなり突き飛ばすとはな……」

「あの……すまない」

うつむき加減に言うインペリオに近寄ると、バージルは先程と同じように答えを催促する。しかし今の彼女は、今までの慌てようが嘘のように形を潜^{ナリ}め、代わって感情を読ませない飄々とした表情と雰囲気^{ナリ}を纏っていた。

「ああ、可能だよ。アンタが望む物は『私』、それで良いんだな？」

口調まで捉えがたい話し方に変わっている。なんとも移り身の早い事だ。

「構わん」

だがそんな些細な事など、彼にはどうでも良かった。要は自分の仲間になるか敵対するか、それだけにしか興味がなかったのだ。

「ここに契約は完了した。よろしくお願いする、我が主^{マイロード}」

だがインペリオの再確認にバージルが頷くと、急に畏まった態度をとり頭を垂れた。その急変ぶりがバージルには、ひどく滑稽に思えた。

「おいおい。そんな露骨に嫌そうな顔すんなよ。悪魔との契約ってのは、アンタも聞いたことぐらいあんだろ？ 中世のヨーロッパあたりなら良く聞かれた言葉だし」

「ああ、それなら聞いたことはあるな」

言って、バージルは奇妙な違和感を感じた。何だろうか、このもやもやしたものは。本当に些細な、サラッと流してしまうほど小さな取っ掛かり。

だが些細ゆえに次の瞬間には彼の記憶の片隅に追いやられてしま
う。

「……まあいいか……」

「Hun? What did you say?」

「It's nothing. Don't be careful.
」

いきなり英語で訊いたインペリオに同じく英語で返すと、彼女は
「案外、ノリ良いんだな」と嬉しそうに笑う。しかしバージルには
何故笑うのか、全く理解不能だった。

「そうだ。そういや、どうしてここに来たんだ?」

ふと、インペリオが思い出し振り向きながら言うといつの間にか
バージルは存在せず、かろうじてドアがあった場所から、去り行く
蒼いコートの裾が見えた。慌てて彼の後を追って走り、隣に並ぶ。
だがバージルは彼女が追いついても歩調を緩めず、黙ってどこかを
目指して歩を進める。

「なあなあ。どこを目指して歩いてるんだ?」

いつかはバージルが何らかのアクションを起こすだろう。インペ
リオはそう思っていたが、彼は何を言うでもなく小気味良い足音を
廊下に響かせながら歩いていく。

それに飽きたのか単なる好奇心か。とにかくインペリオは思った
事を口に出した。すると依然歩きながら、しかしバージルは思案顔
になった。それを見てインペリオはしたり顔をする。

「おおっと。まさかとは思うが、もしや考えなしか?」

だが彼女の予想した答えとは異なり、バージルはインペリオを軽く一蹴した。

「いや。単純にどう言おうか迷っていただけだ」

「なんだ、つまらんね。で？ 何を言おうとしてたんだ？」

したり顔から一転、今度は期待するような眼差しを向けられ、バージルは若干眉をしかめた。

彼の苦手なもの、それは理屈が通じない、覚えが悪い、頭の回転が遅いの三つであった。必然的に子供はそれに該当する。

言う事は支離滅裂、行動は無計画、五月蠅くわめく。兎にも角にも面倒くさい。

「……良く言えば兵の募集。悪く言えば強制徴収といったところか」

「――？ ダメだ。さっぱりわかんねえや」

ケタケタと笑うと、インペリオは親しげに腕を絡めた。バージルにしてみれば動きにくい上に暑苦しい。しかも閻魔刀を持っている左手に抱きつかれているのでいざという時、抜刀できない。

――ああ、邪魔すぎる。何故いきなり絡みついてくるんだ。

「暑苦しい。離れろ」

「いいじゃないか。私だって人肌を感じたい時があるんだぞ？」

間延びした暢気な声でインペリオは言ったが、恐らく嘘は言っていないと彼には感じられた。腕に込められた力が、明確な拒絶の意を表しているのであろうから。

いかに力が強かろうと、虚を突いてすり抜けたり強引に振り払っ

てもいいと思う。反面、ここで融通を利かせずに振り払うという行為が、バージルには不意に子供っぽく感じられた。

振り払ったら負け、という訳の分からない言葉が頭を埋める。別に気にしなくてもいい、しかしそれでは子供の態度と同じ……。胸中に渦巻く相違した思いに考え込み、出した答えは――

「バージル……」

自分の頭をさすって感触を確かめる。さらさらと指の間を抜けていく銀髪は、我ながら素晴らしいと思う。けど、それは大した意味を持たない。もっと大きな問題、それはバージルが抱きすくめてくれた事だ。

もう、いつぐらいからだったかは思い出せない。初めはバージルを思い浮かべると……胸の奥がムニユムニユするだけだった。

そしてつい先程の出会い。それで理解した。胸のムニユムニユは前より確実に悪化していた。

胸は早鐘を打ち頭はまるで機能せず、今すぐに抱きつきたくなかったのには自分でも焦った。妹達がいなかったら絶対に抱きついて、いや飛びかかっていただろう。

「チンク姉、ブーツとしてどうしたんだ？」

「えっ？ ノーヴェには分からないっスか？」

「ウェンディ。ノーヴェにはまだ早い話なんだよ」

ノーヴェ、ウェンディ、セインが何か言っているがほとんど聞こえない。こんな所を姉上達が見ていたら「弛んどる！」や「あらあら、チンクちゃん可愛い」とか「チンク、貴女も変わりましたね」なんて言われる気がする。

実際どこが変わった、と言われると自分でも分からない。実力は上がったと思う、と言うか上がってはいなくて困る。戦闘経験もかなり積んだし、姉らしい言動もとれるようになってる、はず。強いて言えば、胸のムニムニ感だろうか？ でもこんなもの、無視していれば何の問題もない。別に痛みを与えるものでもないよ。うだし……一体何なんだろうか、このムニムニは……。

「ンク……チンクね……チンク姉！」

「おお！ な、何だ急に？ 別に怖がった訳じゃないぞ。びっくりしただけだぞ？」

「いや、別にどうでもいいから」

ブーツとしていたせいか、いきなり目の前にセインがいて焦った。ずっと目の前にいたのだろうが、いきなり視界に現れるな。

……さっきも言ったが、別に怖がった訳ではない！

「で、どうした？」

「うん。さっきのアイツ、何て言ったっけ……そうそう、バージル！」

「バージルがどうした？」

「それがね、いきなり知らない奴から念話で話しかけられてさ、多分女かな？ そいつがここまで道案内を頼むって言ってきてさ、気になって誰か訊いてみたら“バージルの伴侶です”って」

「な、何だって！？」

待て待て。バージルは監視カメラの視線が気になって向かったは

ずだ。なのに女を連れて帰ってくるとはどういう事だ。

まさか誑かされたか？ バージルほどの男が？ 私の想像する彼なら「死ね」とか言って、逆に手にした刀で斬りそうだが……。本当にそんな事があるのか？

……そうだ、そうに違いない。バージルはソイツに騙されているんだ。ありえないなんてありえないと言うではないか。

ふはは……。良いだろう、ならば戦争だ。目で見て誑かす魔眼のような物に備えて、しっかりと両の眼を抉っておかなければ。もし髪が綺麗だったら、頭皮ごと剥ぎ取ろう。

……やる事がいっぱいありすぎて大変だ。でも安心しろ。必ず私が目覚めさせてやる、バージル……。

「ちょ、チンク姉の目がヤバイよ、デイド！」

「チンク姉、少しでいいから落ち着いて！　そして周りを見て！」

はは。外野が何か言っているが……。まあいい。何を言われようと、バージルを取り戻すまでは止まらんぞ……。

「待ってくれよ、チンク姉！　何であんな奴にそこまで本気になってんだよ！」

ノーヴェが目の前に立ち、私に目線を合わせて話す。ノーヴェは真っ直ぐな妹だから、きつと言葉に偽りは無い。本気で私の事を心配してくれているのだろう。……故に私には、今の言葉が聞き捨てならなかった。

「……ノーヴェ。お前は姉の事を思ってそう言ってくれるのだろう。」

だが、姉とて誰かのために動く時がある事を忘れないでくれ。さあ……退いてくれ……」

私の事を思っていてくれていたのだ。どれだけノーヴェを蹴散らして行きたくても、その心は汲んでやらなくてはならない。

さあて、名も知れぬ雌狐よ。覚悟は出来たか？ 今から目も当てられない状態にしてやろう。バージルの隣にいるのは私だ……。

いやはや、あんなアグレッシブなチンク姉は初めて見たよ。何がチンク姉を駆り立てるんだろうね？

「チンク姉、行っちゃったよ。左腕もあんなに怪我してるのに」「どうするんスカ、セイン姉？」

オットーもウェンディも期待するように見ないでくれるかな。私は楽しければいいだけだし……。

それに、こういうのは私じゃなくてディエチに聞いてくれよ。

「チンク姉……どうして分かってくれないんだよ……あたしは、こんなにチンク姉の事を思ってるのに……」

おっと、なんかノーヴェが面白いぐらい落ち込んでるし。これはチンク姉を追っかけてくかな？ さて止めるか止めまいか。

「何でチンク姉はあんなにおかしくなっちゃったんだ？ ……………」

……そうか……そういう事か。全部あの男のせいか……」

……あつれ〜？　なんかノーヴェが危ない考えを持ち始めてないかな？

「ちょ、ノーヴェ？　あんま早まった事しちゃダメだよ〜？」

「……ああ。あたしは別に大丈夫だよ。早まった事なんてしないよ」

さつきとは打って変わってノーヴェは、にこやかな笑みを浮かべる。

……でも、ここまで危うい笑みって初めて見る。なんか越えちゃいけない線を越えたみたいなの、そんな笑い方。なんか妙に目が座ってるんだよね〜。

「セイン姉、ディエチ姉。あたし、急にやる事思い出したから先に戻ってるね」

「

「お好きにどうぞ」

「そう？　別に構わないけど」

はは、ありゃ止められないね。むしろ止めたら姉でも殺されるね。だって目がおかしかったもん。目だけがギラついてたよ。

「ディエチ。なんか私達の姉妹って、どこかぶっ飛んでる子が多い？　ない？」

満面の笑みで部屋を後にする妹の後ろ姿を見送りながらディエチに聞いてみると、ディエチもため息をつき流し眼で私を見てくる。その中に今更？　みたいな意味合いが含まれてる事に気が付いた。

「何を今更。そもそも親からして、あのドクターだよ？ 普通な方が普通じゃないんだよ、きっと」

どうやら変に思ってるのは私だけじゃなかったみたいだ。普段は冷静でツツコミ役のディエチも諦めてるし。

……ん？ ていう事は私もそうなるかも知れない可能性があるかと？ ……何それ、怖い。

バージルはインペリオを侍らせながら(?)廊下を歩いていた。当初の目的である戦闘機人との接触という、簡単であるはずの出来事。それが数々のアクシデントにより予想外に延びてしまっている。早く片付けてしまわねば管理局、ひいては機動六課が出張ってくるだろう。

バージルとて戦闘はやぶさかではないが、いちいち相手にしていては手間がかかって仕方が無い。

降りかかる火の粉は問答無用で斬り捨てる。しかし率先して襲いかかったりはしない。それでは戦場でしか生きられない狂戦士バーサーカーと同じである。

(それにしても……)

そんな事を考えながら左を見る。腕ごと薄い金髪に取りつかれている。しかも物凄い力でガッチリと。

「ん？ なんだい？」

首を傾げながら彼の顔を見るインペリオ。その雰囲気は見ているだけで悶えたくなくなるような甘々なものである。恋人と勘違いされてもおかしくない。

もつともバージルには、これっぽっちもそんな気はないが。

「離れろ」

「嫌だね」

「刀が抜けん」

「私が代わりに抜いてやるよ」

短いやりとりの後、再び腕に力を込めてバージルに抱きつく。このやりとりも一体何度目だろうか。

そして、そのたびにため息を吐く。何度目？

結局あその後、子供な自分に嫌気が差したバージルはなし崩し的に黙認してしまった。それがいけなかった。

軽い黙認を彼女は当たり前だと思い込み、結果ただ歩くだけでも腕を組んでしまう事になってしまった。目的地に着いたら絶対に、問答無用で引き剥がすつもりであるが。

「……アレは……」

しかし目的地までまだ遠い所でおかしなものに会った。銀の髪を靡かせながらフラフラした足取りで彷徨っているチンクである。動作からして何かを探しているようで、頭が常に揺れている。

その正面がバージルを捉えた瞬間、幽鬼のような足取りで近付いていく。彼と出会うまでの悪魔との戦闘で負傷した傷口が痛々しい。乾いてこびりついた血が毒々しい異彩を放っている。

明らかに手当てが必要な体にもかかわらず、チンクからは妙な覇

気が感じられる。

「ご主人様、アレは？」

「誰がご主人様だ。アレはチンクという戦闘機人だ。しかし何故、奴がここに」

「殺す」

まさに電光石火であった。バージルですら身構えるほどの速さでチンクが駆け、インペリオを手にしたスティンガーで襲った。死に体に見えたのはインペリオも同じらしく若干反応が遅れていた。それでも素手でナイフのような形状の武器を掴んでいるのは、さすが悪魔と言うべきか。

「いきなりやってくれるじゃないか。アンタ、あの時のガキだろ？」

悪魔相手に粘るからやると思ったが――

「黙れ。吹き飛べ」

悪魔である自分の意表を突いた相手を褒めるインペリオであったが、チンクはスティンガーを掴まれた状態でそれを爆発させた。爆

煙が巻き起こるが、それから逃げるようにインペリオが飛び出す。しかし爆発の熱で手が黒く焦げ付いている。

「イッテェ」。最近の人間は悪魔以上に怖いな、つとと」

手をブラブラさせておどけながら痛がる彼女に、銀の風となってチンクが迫る。足の怪我や先程までの衰弱の仕方、そして新たに手に火傷を負うも、それを全く気にさせない動きで近寄り、再びステインガーで突く。

両手に持ったナイフが常人には見えない速さで動かされるも、悪魔であるインペリオには見える。故に全てを捌く。しかもただ捌くだけではない。

また爆破されては堪ったものでない。だからこそチンクが手に持つナイフを壁や床に吹き飛ばす。それでもどこからかステインガーを取り出して襲い来る。

突き、薙ぎ、逆袈裟、首切り、切り上げ、振り下ろし、投擲。ナイフという形状の武器でできる、ほぼ全ての動きを取り入れた攻撃に防戦ながらも、インペリオは内心舌を巻いていた。

――ナイフという形状の武器を今までサイドウェポンと位置付けていた自分は、どうやら考えを改める必要があるな。まさかここまでする戦えるとは。人間も随分強くなったものだ。

だがナイフだけが彼女の武器ではない。一旦後退すると、一遍にステインガーを飛ばしたチンクがそれに混じって突進する。

インペリオもガードする気は無いらしく、正面からナイフの弾幕を弾き飛ばし、迫ったチンクに向けて握りしめた拳を振り下ろす。

交錯するナイフと拳。

拳はチンクの顔を掠めながら後ろに流れ、スティンガーは的確にインペリオの首を狙う。

「しかし当たらない！」

拳を振るい、かつナイフが首に迫るも彼女は無理矢理、体を反らしチンクを後ろに流した。人間が反応できる限界を、超えた反応速度を持つからこそできる芸当である。

駆け抜けざまにスティンガーを投げるも、振り返った悪魔は下に上に弾く。

「さあゝて、お得意のナイフ芸はもう見せてくれないのかい？
…ならとつとと死にな」

「お前がな」

スティンガーを放らない事に弾切れを予期したインペリオであったが、逆にチンクが僅かに口の端を歪める。

その直後、通路を爆炎が舐め尽す。

（なるほど。序盤にナイフを放ったのはコレを狙っていたのか）

爆風に巻き込まれないように移動したバージルは静かに呟いた。

彼の蒼いコートが爆発の余波で僅かにはためく。

何がチンクを駆り立てるのかは理解できないが、彼の目から見ても彼女は格段に良くなっていた。動きは洗練され、振りはコンパクトに、思考は冷静かつ大胆に。戦闘を行う者にとって、これほど進化は羨ましいものである。

バージルは、ある意味完成してしまっている。強くなるためには、次の段階へと至る限界を越えなくてはならない。雛が卵の殻を突き破るように。

それは至難である。元が強いだけに、なかなか限界は現れない。故にバージルは限界を知り、挑み、越えなくてはならない。絶対的な力を手に入れるために……。

「はっはっは、もっとやってみな！　まだまだ暴れたりないぜ？」
「死ね。今すぐ消えろ。全てを置いて、全てを忘れて、全てを捨てろ」

「ならやってみなよ。C'mon, cute girl.」

インペリオの挑発により、さらに激しくなる戦闘音のBGM。インペリオも連闘とは思えない、まさに化物染みたスタミナを発揮している。それゆえに、どこか余裕を感じさせる動きでチンクを追い詰める。

ISによる爆音が骨に響き、拳による打音が鼓膜を震えさせる。

「……で、貴様は何の用だ？」

常人ならば聞こえるはずのない微かな足音。それを爆音の中から拾い上げ、聞き取った彼が後ろに振り向く。

目元が隠れるように僅かばかり乱れた赤髪。そこから覗く瞳は単一色。顔は不気味なまで笑みをたたえ、見る者に寒気を起こさせる。

その足取りは確かながらも、チンクと同じ危うい雰囲気纏っている。

「テメエが悪いんだよな？　テメエが、チンク姉をおかしくしたんだよな？　テメエのせいで……チンク姉は狂っちまったんだよな……」

仮面のように張り付いたその笑顔が、壊れて放置されてなお笑い続ける人形を彷彿とさせる。“コワレタ”笑み。

そんなものを見てもバージルは冷ややかな視線を送る。

「さて、どうだろうな」

無論バージルには、そんな笑みを浮かばせるような行動をしたつもりはなかった。というか覚えもない。

――何より、なぜチンクと俺に関係性があるのかすら理解できない。一体、何を以てその結論に至ったのかを是非とも知りたいものだ。言いがかりにしては稚拙な気がするがな。

「そんな答えが聞きてえんじゃねえよッ！！」

だが、その一言で彼女は劇的に変わった。あくまで瞳は単一色、しかしキツと睨みつけるノーヴェの瞳には途方もない怒りが込められている。

自分の答えを取り合わないバージルへの怒り。姉を誑かした怨敵への怒り。自分ですら制御できないほど黒く大きな、怒り。

――ああ、やっちまおう。コイツを徹底的にやっちまおう。この怒りに任せて、思うままに殺っちまおう……。

「デメエなんか……チンク姉は渡さねえ!」

I Love is tricky! それは捻れた恋の道（後書き）

新しい年が始まり、早三週間。政治も社会も本格的に動き出し、これから先がいろいろ楽しみであろう一年。

しかし言わせてください。

あけましておめでとうございます&三ヶ月も放置してスイマセンでしたあああ！！

ホントこの三ヶ月、いろいろありました。

十一月上旬に学校で携帯を没収され、色事で一悶着あり、聖戦に赴き、年が明け、死にたくなり……。

んなプライベートなんざ興味ねえから早よ書け！ と仰らないでください。いろいろ皆さんにあるように、僕にもいろいろあったんですからww

しかしあまりグダグダ書くのもアレなので、今はこれで。

||||||||||||||||

なんか本編でぶっ飛んでる、というよりイカレてる……ではなく病んでるキャラが多くないか？ とお思いでしょう？

早い話が、まんま僕の趣味嗜好が反映されてしまいました（汗）最近気がつきましたが、どうやら幼少時よりハイライトの無い目が好きだったらしく。しかも病んでる女の子が好きという所謂ヤン

デ（r y

もう“あなたの事を殺したいほど愛しています♪”なんて言われ
たら、速攻で撃墜されますねw w w

――――

スイマセン。久しぶりの後書きだからはしゃぎすぎました。反省
反省。

なかなか話が進まない上に更新も今回のように遅いですが、生暖
かい目で見守ってください。

I Greed in myself 世界の中で欲望を見つめる（前書き）

「まだ終わんねえよ！」

ノーヴェ

「お前に何が分かる!？」

チンク

「歯ア食いしばれ！」

インペリオ

「チッ！ 邪魔だ！」

バージル

—————

長々とお待たせてすいませんでした！ 一応読みつづ書いてはいたのですが、どうにもペースが……。本当に不定期ですよ。しかもだんだん長くなってるし。

今回は所謂、 Yuri 要素が若干あります。ようはガールズラブです。しかしラブってるわけではありません。一方的です。なので警告はあまりしません。

それでもちよつと、という方は……申し訳ありません！ この描写にも、しっかりとした彼女なりの意味があるんです。

その辺りを察していただけると幸いです。

I Greed in myself 世界の中で欲望を見つめる

軽いため息を吐きながら、彼は興奮状態にあるノーヴェエを見る。
そして思い出してみると、この世界に^{ミッドチルダ}来てからロクな事がないことに思い当った。

——まったく。どうして最近の俺の周りには、こんなに狂った輩が多いんだ。対応するこちらの身にもなれというものだな……。

「チンク姉は厳しくて、凛々しくて、大人っぽくて……可愛くて……。なあ、なのはどうしてお前なんかを気にかけるんだよ……。アタシがチンク姉を一番思ってるのに届かなくて、テメエがチンク姉と遠いのに一番心の奥にいる。そんな事、許されると思ってんのか？」

怒涛の如く紡ぎ出される狂った情愛。これの対象が男であれば。せめて他人であれば、まだ救いあっただろう。しかし現実是非情であった。

今まで秘められていたノーヴェエの愛情は、いきなり現れたバージルと、それに付随する形で柔和な態度をとる姉を見た瞬間に許容量を超えた。彼の容姿が、言動が、存在が姉を喜ばせ、自らの怒りを募らせた。

そして先程、チンクに軽い拒絶をされた事により、ノーヴェエの脳内では一瞬で、“バージル＝悪”という図式が出来上がってしまった。ていた。

しかしそんな図式などつゆ知らず、バージルはあくまで「知らん」と言い放った。

「……アハハハ、知らん。知らんだと？ 知らんだとおおお！？」

一気に詰めより、ギアの回転数を上げたガンナックルを振り抜く。顔を狙ったノーヴェのストレートが迫るが、それすら気にせずバージルは左手で掴むと、動かせない程度に締め付ける。

ギシギシと拳が軋む音がする。人間離れたバージルの握力ならば、並の人間の拳ならば容易く碎ける。しかし怒りの形相で殴りかかろうとする彼女は、さすが“戦闘”に特化した“機械”の“人間”と言うべきか。

「テメエッ！ チンク姉に似たその銀髪、頭蓋ごと抉り取ってやるよお！！」

常軌を逸した興奮状態がノーヴェに力を与え、冷静さを奪っていく。それすらも気にならないほど、彼女の視野は狭まっていた。

その目に映るものはただ一つ。姉と似た銀髪を後ろに撫でつけた、剣にも似た男。

「バージル！！！！」

右拳を拘束された状態からの脱出。そのためにノーヴェは迷わず、

その関節を意図的に外した。それまでしっかりしていた感触が急に喪失したことにより、バージルが右拳を放す。その間隙に手首の関節を入れなおしたノーヴェが、赤い弾丸となって突っ込む。

接近と同時に始まる拳のラッシュ。脇をしめ、拳に速度と殺意を乗せ、的確に殴る殴る。

だが殴るだけが格闘戦ではない。直線的、または曲線的な蹴りを混ぜることにより、バージルが攻めにくい大勢を作っている。

こんな芸当など以前はできなかった。確実にバージルとの一戦が、ノーヴェに更なる進化をもたらしていたのだ。

だが右のフックを放った時、またも彼に固められてしまった。しかもさらに固い状態だ。

右腕を掴まれ、しばし硬直した状態。次に繰り出されたのは左のハイキックであった。右手を掴まれた状態からの上段蹴り、ましてや速度と体重の乗った蹴りなど、常人ならば股関節に相当の負荷をかけることになる。

人間の可動域の限界を超えかねない動きであった。にもかかわらず、何事も無かったかのようにバージルは続けて捉える。

どれも、ノーヴェの中では最高にして最重の攻撃であった。それが受け止められている。いとも簡単に。

頭にくるものだ。そして何より少し、ほんの少しの間に垣間見えた、嘲りを含む微笑。

微笑といっても口元を僅かに歪ませただけのモノ。しかし彼女の沸騰した頭でも、その意味が楽に分かった。

——そんな程度なのか？——

「——ツツ！！　まだ終わんねえよ！」

瞬間、閃く次なる一手。

右腕を下に向けて振り下ろし、バージルの拘束から脱出。そのまま彼の手が足を掴んでいるまま体を捻り、回し裏拳でバージルの頭部を狙う。

不意を突くノーヴェの動きに感心しながら、彼は顔をのけぞらせて、それをやり過ごす。目の前を駆け抜けていく拳を見ながら、左手にベオウルフを顕現させようとして――

「グッ……！」

左肩にジェットブーツがめり込む。完全に予想外の攻撃に少したじろぐ。そのせいで右手の拘束も弛み、左足が逃げる。

蹴った反動で流れていた体を立て直すために、ノーヴェは踵落としを決めた状態から、両手で着地し立ち上がる。そのまま間髪入れずに、鋭いミドルキックでバージルを吹き飛ばす。

バージルとは背を合わせる形で進行する、拳とナイフの戦い。チンクがナイフを投じる、斬りつける、突く、果ては爆破するという戦い方をする一方、インペリオはひたすら拳で迎撃、追撃をするという構図である。

しかし互いに実力が同じなのか、それともどちらかが手を抜いているのか勝負が着く気配がしない。

未だに目の前の雌狐を倒せていない事実が、チンクを苛立たせていた。

彼女の想定していた手筈だと、とうの昔に片を付けてバージルに頭を撫でてもらっているはず。そのはず……。

（そのはずなのに……！）

目の前の雌狐は、ニヤニヤ笑いながら自分のステインガーを弾いていく。その事実がチンクをどうしようもなく駆り立てる。

「良いね良いねえ、戦の華だねえ！ ナイフだけで、かつ怪我をした状態でここまでやり合える奴は初めてだ！」

余裕綽々とは、まさにこの事だろう。相手に賛辞を送りながらも、手は休まずにナイフを弾いているのだから。

「いい加減死ね。早く消え去れ」

「ざあゝんねん。せっかく生かされたこの命。最後まで面白おかしく生きなきゃもったいない、そうは思わないかい？」

「思わん。生憎と、貴様のようにフラフラヘラヘラした事が無いんでな」

思い出せるのは、生まれてからの戦いの記憶。戦闘機人として生まれたからには、戦いで死ななくてはならない。平時には絶対に必要な魔導師であり、かつ有事には有能で替えの効く魔導師であれ。それこそ戦闘機人の必要価値であり存在理由。悲しいと思ったことは無かった。戦う以外の生き方を知らない程に、自分たちは未熟なのだ。

ゆりかごの一件以降、さまざま人や考え方に触れた。それで妹たちが生きることに関して前向きになり、以前のような摩擦も殆どなくなった。

少なくとも仲間内で殺し合いにまで発展することは無くなったから、良い傾向だとは思う。

しかしそれでも……。それでも私を境界線にして、見事に姉妹の意見が割れたことも、少なからず関係があたろう。

ドクターが作った戦闘機人は私までが前期、自分から後が後期ということになってはいる。その前期のメンバーは、既にバージルと会っている。

後期のメンバーは偶然にも今日、彼と会うことができた。妹たちから見れば、バージルの在り方は強すぎるだろう。あんな剣のような男は、なかなかいるものではない。

だが私より上の姉たちは、それぞれが譲れない何らかの在り方を持っている……。はずだ。だからこそ管理局に身柄を拘束された時でも、有益な情報を渡そうとはしなかったのだろう。

戦闘機人であれ。それを最後まで実践していた姉たちを、誇りに思わなくてはならない。

そんな境遇の私たちからすれば、この雌狐の在り方は鮮烈すぎる。好きなことをして好きなように生きる。放り出されたはずなのに、こんなにのりくらりとしている。

それはなんて純粹で奔放なことであろうか。とても私たちには真似ができない事だろう。

「……んな身構える必要なんてないんじゃない？」

自分たちが願えど叶うことがない事を考えていたチンクの内面を見透かしたかのような一言が、不意に耳に入ってきた。

前を見れば、インペリオが腕組みをしながらため息を吐いていた。

心底分らない。何をそんなに躊躇う必要がある？ 顔には確かに
そう書いてあり、またその事も楽に読み取れる。

何を言い出すんだ？ そう思うより早く浮かんだ言葉は――

「お前に何が分かる！？」

何よりの心の声がチンクの喉から溢れ、体を突き動かす。懷に忍
ばせたステインガーを手一杯に持つ。その手が抑えきれない感情に
よって震えるのを止められない。

あらん限りに力を込めて投げる。いや、もはや撃つという表現が
あっている。最速を纏った鉛の弾丸となってインペリオに飛来する。

急に湧いた感情が怒りなのか、それ以外なのか。それはもはやチ
ンク自身にも分らなかった。

敵に言われたのが頭に來た、凶星を言われた故の動揺、どうしよ
うもない事に対するやりきれなさ。あるいは違うことか。

とにかく今の言葉が、どうしようもなくチンクを揺さぶった。

「お前に分かるというのか？ 生まれて既に、その在り方を決めら
れており、それがどうしようもなく大きくてッ、自分ではどうしよ
うもなく。でもその在り方に馴染んだはずなのに、急に他人から
変わっていいなんて言われてッ！」

ステインガーを投げて、放って、撃って――

姉だから常に妹たちを纏めなくてはならない。そこに私情を挟む
ことはできない。

いつまでも姉に頼るようでは、下にいる者が不安になる。それではダメだ。

だからこそ妹たちを守る気丈さ、言い換えれば“力”が必要になっていた。

「貴様には分らないッ。貴様のように好きなことしかしていない奴に、この重さは分らない、分らないんだッ！」

呼吸が乱れ、もはやタイミングや投げるコツすらもなく、ひたすらに投げまくり――

自分を押し殺して、後回しにして、何よりも前に立ち、そして……一番傷付いて。

それでも立ち止まるわけにはいかない。立ち止まれないのだ。

「そんな奴に……バージルは渡せない！ 渡したくない！ なにより負けたくない！」

ペース配分を考えないで動かした結果、チンクの小さな体には酸素が足りない。息切れとなり手について、荒い息を吐く。

最後のほうは、彼女の思いの丈が溢れてしまった。それでも自分が何を言っていたのか思い出せない。

それほどまでに彼女は、死に物狂いでインペリオを殲滅しようとした。

「ハッ！ ハア、ハ、クッ……ゲホゴホッ！」

気がつけば、左腕に鉛を巻きつけたような気だるさ、筋肉にズキ

ズキとした痛みが残っていた。

手が動かなくなって、知らずに震える。動かなくなってしまったというより、肩から下が無くなってしまったと言ったほうが適切であろう。さらに、バージルたちと会う前に、悪魔に負わされた怪我が、ここにきて痛みだす。

もはや下半身すら言うことを効かなくなったチンクは、崩れるように床に倒れこむ。

目が霞み、息をすることすら億劫に思え、目を閉じる。

寝るわけではない。少し、少しだけ目を瞑って休むだけだ。そう言い訳をして、チンクは意識を深い闇に手放そうとする。

その間に耳に入った、聞きたくもなかった声が彼女の意識を急速に引っ張り上げる。

「いやはは。さすがに全部のナイフをまともに食らうのは、いてて、いったあ！ このやろ、ていつ！ ……ふう。キツイものがあつたな」

（くそ、まだ減らず口を叩けるほどに余裕があるのか！）

強靱な意志の下、再び体を動かそうとする。節々が悲鳴を上げ、視界が歪み、呼吸が荒ぶる。

結論から言えば、既にチンクの体は休息を取らない限り、動こうとはしたくなかったのだ。体力の消耗を気力で補い、怒りを刃に乗せて暴れ回り、その果てに力尽きた。

その上でもう一度動き、拳を戦え。そんな無理を体は素直に拒否したのだ。

（動け、動け！ あの女を討ち果たさずに寝そべっているなど、ありえないだろう！？）

ここまで来ると、もはや意地の域。

せて立ち上がろうと、全霊を込めて体を動かそうとする。

「確かに良い動きをするけど、やっぱりダメだ、ダメダメだ。その年じゃあ考えられないナイフの技術があっても、それを使いこなすためのスタミナが足りないね」

しかしどんなに力もうと、体が動かせないと遂に理解できた。ならば怨念の籠った視線を送ろうとして、最後の力を振り絞り頭を持ち上げる。

左目にかかる銀髪の間隙から見えた鬼は、赤くない場所が見当たらないほどに凄惨な状態になっていた。薄い金の髪は赤黒く濁っている。上に着ている白いジャケットは元色が判らないほど染まり、露出した肌からはまだ液体が流れている。

その彼女はもう戦意が無くなったのか、不敵にもチンクの傍に歩み寄っていく。その歩み寄る様には、疲労した様子は見受けられない。

そこまで理解して彼女の目は閉じられた。もはや目を開けるのすら億劫に感じ、活力を投げ出した。

何も見えなくなって聴こえてきたのはゴッ、ゴッ、ガッ、という拳と蹴りの打撃音。恐らくバージルとノーヴェが戦っているのだろう。

（バージルを探すために捨て置いたのに、わざわざ追って来るとはな。ノーヴェには、あの対応では足りないというわけか）

どうでもいいことを考えながら、床の温度を髪越しに頬で感じる。火照った体と暴走していた思考回路が、徐々に冷まされていくのがわかる。

そのなかに規則正しい足音が聴こえ、チンクは諦めの籠ったため

息を一つ吐いた。

いくらバージルの隣にいるのが許せなかったとは言え、いきなり襲いかかるなど言語道断。そんな事すら、先程までの自分は解らなかった。

リズム正しい足音は、そしてピタリと止む。

インペリオに屈するのは悔しいが、それでも頭を打ち碎かれたところで文句を言える立場でもない。そのことを彼女は重々理解している。

「さて、面白いモノは無さそうだから……終りにするか。言い残す事はあるかい？」

上から降ってくる軽やかな声。反して威圧感冷え冷えとするもので、体が震えだすのを隠すので精一杯である。

それでも隠し通し、言わなくてはならない。「何もない」と。

「ほお、何もない、か。じゃあ一思いに消し飛ばしてやるから安心しな。痛みもなく一瞬だ」

インペリオの配慮に若干感謝しつつ、チンクは走馬灯を見ていた。しかし奇妙なことに走馬灯にも関わらず、思い浮かぶのは姉妹の事とバージルの事だけ。

下手したら彼に関する方が多いかもしれない。

それらはチンクが想像した仮の彼。想像でしかないのに笑いかけてくれず、どこまでも先を見つめている眼差しを変えてはくれない。自分は常に後ろにいるだけ。彼には自分など眼中にもない。

でも構わない。彼の後ろにいと胸がムニムニユして温かくなって、その瞳に映る寂しい色を自分が打ち消したくなる。

今は理想でしかなくとも、理想だからと諦めて手の届かない所に置きたくない。手を伸ばさなければ死ぬほど後悔する。だから手を伸ばした。

ゆえにこうなったのだ。もはや悔いは無いはず。しいて言えば、もう一度バージルに頭を撫でもらいたかったことぐらいだろうか。

「イクぜ！ 歯ア食いしばれ！」

（死ぬのに歯を食いしばるも何もないと思うんだが……）

最後の最期までツツコミを入れたチンクの頭めがけて鬼の腕が振り下ろされた。

パァーーンという、この場所に不釣り合いな軽く鋭い音。目を閉じて最期を迎えようとしていたチンクは、何が何だか解らなかった。

生きている、だとか何故？ と思う前に至った感情は“痛い”であつた。後頭部にジンジンといった痛みが巢食っているのを感じる。

「なんてな」

ゆっくりとチンクが顔を上げてみる。そこには大きなハリセンを肩にかけながら、ニヤリと笑うインペリオがいた。

その笑顔は、例えるならば悪戯をした子供のそれだ。相手に他愛

のないドッキリをしかけ、それが上手い具合に成功した時のあどけない微笑み。

「え……？ いや、でも……え？」

無邪気さが強調される笑顔を、なぜ悪魔が使うことができるのか。そんな事を思いもしたが、やはり口から出る言葉は気の抜けた言葉。それもまるで要領を得ない言葉ばかり。

「アンタは強い。私相手にここまでの立ち回りなんだ、これからさらに強くなる。もしかしたら私を殺せる程に。そんな相手をみすみす殺すわけにはイカンだろ」

それはとてつもなく危険な行為である。

殺されかけた人間はその相手に対し、大なり小なりの殺意を持つ。その殺意が、体を突き動かす原動力になる。

精神は肉体の奴隷と言うが、けんさん肉体もまた精神の奴隷なのだ。

そうして強固な精神に裏付く研鑽が、体を止めどなく進ませ、人はさらなる極みに辿り着く。

自分に敵対していた相手の息の根を止めない。それにより彼女は遠からぬ未来で、手痛いカウンターを貰う事にもなるだろう。

いや、むしろ暗に言っているのかもしれない。殺れるもんなら殺ってみろ、と。

こんな奴の気まぐれで命を救われてしまった。その事実が、私の

胸の内を焼き焦がす。でもこいつは強くなって、またかかってこいと言っている。

強者として、勝者としての絶対の優位性が、その言葉を出させるのだろう。

その驕りを突いて、次は私が勝つ。今の言葉は受け手によっては、死にたがっているようにも聞こえる。

良いだろう。そんなに死にたければ私が殺してやる。今は無理でも……必ず後悔させてやる。

生命が助かった事への純粋な喜び。

負けたのに死ねなかった事への悔しさ。

その狭間のチンクは、両方から感じる想いで頭がどうにかなりそうだった。

姉上たちだったら……こういう反応をしてくれただろうか……。

戦いの内容を大事にするかもしれない。どんな形であれ、生きていることを大事にするかもしれない。

兎にも角にも、まずはこの気持ちを忘れない事が大事かもしれない。

そう思って目を瞑ろうとして、体がビクンと跳ねる。

得体のしれない強烈な眼差しを感じ、体が防衛本能によって震える。

「……さて、んじゃあ恒例のアレ、行ってみよう！」

何を、と言う前に体を抱きかかえるようにして持ち上げられた。体が密着したことによって、より濃密な鉄の臭いが鼻をつく。

上体を屈め、私の頭の隣にやってくる。私の銀髪とこいつの薄い金髪の対比は、見ていて感嘆するかもしれない。

そんな事を考えていると不意に、ハァと、左耳に息を吹きかけられる。戦闘の後ということで体が火照っているのか、熱い吐息が妙に艶めかしい。

「ひうつ！」

その吐息がかかった場所はゾクゾクしてしまい、思わず声が漏れてしまう。その声もまた、自分自身聞いて事のない高い声であり、顔が熱くなるのを感じる。

経験したところのない感覚に、視界の端が潤んでいる。体が弛緩し、抵抗することができない。

息はもう止めてくれ。そう言おうとして、今度は耳を甘く噛んでくる。耳に適度な刺激と、熱く蠢く何かを感じる。それだけで頭がポーツとなってしまう。

「ふっう、うう、やつ……！」

「ずいぶん可愛らしい声で鳴くんだな。とても良い反応だ。そんじやあ……いただきます」

霞む目で前を見れば、あいつの唇が近付いてくる。血で彩られた唇はとても赤く、思わず異性であつたら触れたくなるだろう。

だがしかし！

私は女であり、そんな同性と口づけをするような趣味嗜好はない。私は至って正常の人間(?)だ！

やめろ、近付いてくるんじゃない！ どうせならバージルが良い

！……そんなバージルが良いなんて……うう。ではなく！

「やっ……め……」

「だが断る。今は力こそ正義の時間なんだよ。ま、大人しく食われな」

何でだ！　と言いたいの、口が上手く回らない。脳内に霧が立ち込めているみたいだ。普段のように考えることができない。

不味い。このままじゃあ、私の初めてがこいつに奪われる！　頼む、やめてくれ！！

「あべしっ！」

もうダメかと思って目を瞑った時、妙な浮遊感を感じた。方向的にはこいつの背中から、だっただろうか？

続いて床に叩きつけられ、上に何か重い物がのしかかる。

危うく大事なものを奪われるところだった。そう思い目を開くと、視界の下に銀髪。

さっきまでとは、うって変わって冷たくなった頭が、この場にいます私以外の銀髪が存在を理解させる。銀髪で蒼いコートと言ったら？　思考が冷静に状況を判断した。体はそれを見て熱くなっていった。結論。パールが私の胸にうつ伏せていた。……胸で……うつ伏せ……。

「クッ。この世界の人間というのは少しの戦闘で、あそこまで成長するのか？　それとも奴限定なのか？」

バージルが息を吐いて起き上がる。

その挙動だけで分かった。今の私は絶対に変だ。ただ息を吐いただけなのに、それを艶めかしく思った私の脳は、それを喘ぎ声と取ったらしい。

バージルの喘ぎ声……喘ぎ声……はう！

血管という血管が沸き立ち、血流が荒れ狂った結果、私は意識を放り出した。

「チンク、どうした。チンク……気絶したか」

起き上ったバージルの視界に真っ先に入ってきたもの。それは熟れすぎたトマトのように、顔を赤くしたチンクだった。

何がそうさせたのか分らないバージルは、ひとまず戦闘で昂った頭を落ち着けるために吐息を一つ。

それだけでチンクは糸の切れた人形のように、フツと意識を失ってしまったのだ。その様は、いかに百戦錬磨のバージルと言えど、わずかに腰を浮かさせるものだった。

「っ痛えな。いきなり飛び込んでくるじゃねえよ。無粋だな。これから可愛い果実を頂こうと思ってたのに」

「……俺が奴と闘っている間に、貴様はずいぶんとお楽しみのようなだな。別に同性愛をどうこう言うつもりはないが、少しは真面目という言葉の意味を知れ」

見る者を凍てつかせる氷の如き冷たさ。刃を肌に当てた時の薄ら寒い怖気。それらを含んだ眼光ですら、彼女は柳や暖簾のれんも顔負けの

スルースキルで受け流す。

それどころか、出来の悪い生徒に教える教師のようにわずかに肩を竦ませる。

「バージルバージル、バージルー！　よもや私のルールを忘れたとは言わないよな？」

「一度言えば分かるから連呼するな。刻むぞ」

闇魔刀の柄に手を添えたバージルの威嚇を、彼女は両手をあげて笑う。闇魔刀は彼女にとっても脅威のはずなのだが、そんな事をまったく悟らせない。

降参するだけでも、そのおどけた態度がダンテと重なる。どこまで行っても彼の姿が離れない事を考えると、図らずも悩ましげなため息が漏れてしまう。

——ふむ。俺を主と言っておきながら、主をおちよくるとは。これはどうしたことだ……。

「そして今更ながら質問。なんで急にダイブしてきたんだ？　そんなにこの娘の事が好きなのか？」

後ろは見ず、親指でチンクを指さす。ちなみに気絶してなお、チンクの顔は恍惚としたものである。よほどバージルという刺激が強すぎたのだろう。

その戯言を鼻で笑い、バージルはノーヴェに向き直る。

「馬鹿を言え。なぜ俺がチンクに飛びつく必要がある。奴に蹴り飛ばされただけだ」

「ぷっ、蹴り飛ばされてここまで飛んでくるとか。それ、何てタイトルのゲーム？」

「……それより、奴の動きを止めるにはどうすればいいだろうか。できれば五体満足の状態で拘束したいが……」

いちいちインペリオの相手をしていては心労が募るだけ。そう理解したバージルは、華麗なスルースキルで話を強引に変えた。

差しあたって今の問題は、目の前の少女をどうするか。全力を出していいならば、または生死を問わないのならば簡単に事は済む。閻魔刀の一薙ぎで即終了である。

それができないのも、ひとえに考えがあつてこそ。ではどうするか？

興奮状態の魔導師。しかも武闘派ともなれば、間違いなく難易度があがる。閻魔刀で肉を削ぎ落とすように、じわじわもアリではある。

さてどうするか？

「なあ。その右腕はどうなんだ？ 悪魔を握り潰せるぐらいなんだから、人間の拘束ぐらい楽なもんだろ？」

意外にも答えはあっさり出た。確かに彼の右腕ならば斬傷をつける恐れもなく、かつ掴んだまま維持できる。

馬鹿と鉄も使いよう。いや、この場合は瓢箪から独楽だろう。

「なんだ？ 今、凄え馬鹿にされた気がするぞ……」

「なるほど、確かにコレがあつたか。……貴様も、偶には良い事も言うな」

会って間もないが、普段仏頂面のバージルに褒められるのは、とても希少価値のある物に思える。

ゆえにインペリオは得意げな顔で親指を立てる。

やったぜ。だろ？ 行ってこい。様々な意味を込めたそれを嬉し

そうにやっている彼女を見ることなく、バージルはノーヴェに肉薄する。

「あれで終わりだと思ったじゃねえかよおお!!」

「安心しろ。あの程度では準備運動にすらならん」

「なめんじゃねえッ!」

もはや一度でも、修羅場を潜り抜けた人間ならば容易く見切れるほどの大振り。当たれば必倒の威力を秘めた力の旋風。

だが、当たらない攻撃には意味もなく、捉えきれない風に力は意味を持たない。

大振りな右のフックを振り切った、その刹那。まさに一陣の蒼い風になったバージルは右腕を伸ばし、彼女の顔面を掴む。その勢いのまま床に叩きつける。

そして今こそチャンス。心の中に現れた自分の言葉を瞬時に思い出し、それに呼応した右腕が光る。

——見せろ見せろ見せろ。汝の隠したる想い、なるはずだった先の姿を解放しろ。今こそ、表裏交わり対極に出でよ……。

それを頭の中で紡いだ直後、右腕を介して吸い込まれる感覚が彼を覆いつくした。

辺り一面暗く、かと言ってまったく周りが見えないわけではない。^{もや}靄が立ち込め、少し先を見ることすらも難しい。

足元に目を向ければ、足の裏だけで浮いている感覚に陥る。そう錯覚するほど、視界的に不安定なのだ。

この場所に長時間いれば、間違いなく精神が崩壊する。並の人間では、簡単に狂気に飲み込まれてしまうだろう。

だがバージルは、この雰囲気を感じたことがある。厳密には“似たような”雰囲気を。

それはかつて、ダンテと最後の別れを果たした狭間の空間。その奥に存在していたであろう魔界の雰囲気。もう一人の自分と出会った、あの氷剣の山々。

それは心の世界。知能と理性を持つ者ならば、誰しもが持っている自分だけの世界。

その誰もが持ちながら、どこよりも安らぎ、何よりも残酷な空間。そこは時に、魔界よりも昏い空間となる。

そして今。まさにこの空間は、魔界のそれと同じドス黒い感情によって占められていた。

「これがこいつの心象風景。なるほど、道理だな。あれだけの感情を爆発させるためには、これほど暗い感情を持っていなくては」

この異界においてなお、バージルの態度は変わらない。悠然と辺りを睥睨し、冷たい視線で斬り裂く。そこには恐れなど、微塵も感じていないゆえの余裕がある。

そのまま、しばらく辺りを見渡すが目当ての者が見つからない。こんな右腕の使い方は初めてだから、もしかしたら失敗したのでは？　しかし自分は間違えてはいないはず。では何かを抜かしたのか？

黙り込んで考えながらも、足だけは何を目指すでもなく、ぐいぐい進んでいく。わずかな確信が、彼の足を動かしていたのかもしれない。

——なあ、どうして……？

不意に耳元で囁かれる、嫉妬の色を含んだ声。頭が状況を理解する前に、体が先んじて動いていた。

身を翻しながら、手にした閻魔刀を抜刀。背後にいるであろうものを斬り裂く。だが——

（手ごたえがない……）

斬ったはずの感触。肉を断ち切った感覚が感じられなかった。若干の抵抗はあったが、それでも違和感を感じない程度だ。

そのまま返す刀で下から斬り上げ、エアトリックで後ろに下がる。距離をおいて今いた場所を見る。が、そこには何もいない。

——ずるい、テメエだけずるい……。

「後ろ……いや、上か！」

気配だけはしっかり感じられる。自分の感覚を頼りに、今度は上方への斬撃を繰り出そうとする。

それよりも早く、赤い液体がバージルへと降り注ぐ。そのまま、

地面だと思っていた場所よりも下に、巻き込まれる形で落ちていく。

「チッ！ 邪魔だ！」

周りに纏わりつく液体を力技で払おうとするが、予想に反してしぶとい。閻魔刀を抜こうにも、腕ごと封じられている今、簡単に抜刀することもできない。

首の周りの液体が、バージルを絞め殺そうと力を込める。その力は凄まじく強く、彼の首を容赦なく締めていく。

彼の力を以てしても拘束を解除できない。そこから判ることは、どうやらこの拘束は、腕力でどうこうなるものではないこと。

ならば魔力で引きちぎるのみ。そう思い、まずは顔の周りの液体を剥ごうとした時、右腕が液体に触れた。

ただそれだけで右腕が触れていた液体から、粘性が無くなり流れ落ちる。よく見れば、右腕の周りだけ液体が存在しない。

悪魔の如く仰々しい右腕。凄まじい力と心象に入り込む能力。そしてここは、ノーヴェの心象世界。

ならば今の右腕は精神を、心象世界を侵食できるのでは？

（まさかな……）

右腕で左肩から下を撫でる。すると左腕に纏わりつく液体も剥がれていく。バージルの思いつきが、確信に変わる。

（ならば右腕を……拡散させる！）

右腕に意識を集中させ、薄く延ばして散らすイメージを、頭に浮かべる。それに呼応するように、右腕が薄く発光する。

その光は主の思い描いた通り、辺りを侵食し埋め突くように拡が

る。右腕が触れた所から液体が剥がれおち、空間の歪みができていく。

そして綻びが限界に達したのか、ミシッという音と共に空間が崩れ落ちる。と同時にバージルの落下も止まり、足が床らしき所に着いた。

そこではノーヴェが座り込んでいた。下を向き、俯いているため表情が読み取れない。

本来ならば、ここは警戒して彼女に接近するのが当たり前なのだが、バージルは何事もなかったかのように歩いていく。その様は、英雄の凱旋のように悠然とした足取りである。

近寄って見ると、なにやらブツブツと呟いている。冷めた目で見下しながら、緩慢な動作でしゃがんで聞き耳を立てる。

「アイツが悪いんだ……。アイツがチンク姉を……。あんな奴がいなければ、こんな事にはならなかったのに……。みんな一緒に楽しかったのに……」

呪詛の如く紡がれる言葉。それら全てに、何もかもを乱したバージルに対する怨念が詰まっているように聞こえる。しかしその一方で、己の不甲斐無さ、弱さへの怒りといったものが含んでいる事も、バージルには理解できた。自分もそうだったから。

だからこそ――

「いつまでそこで這いつくばっているつもりだ？」

怒りと苛立ちのこもった声を投げかける。それでもノーヴェは微動だにしない。恨みつらみは吐かなくなったが、それだけだ。

そんな態度に何か思うところがあったのか、バージルは顎を掴ん

で自分に向かせる。そこには虚ろな眼があった。

何もかもに絶望し、それでも言うだけで動こうとしない、意思のこもらない目。それがなにより氣に触ったのだと、理解できたからこそ言葉を止めなかった。

「自分の身を嘆くだけで動こうともしない。相手を恨んでいるのに、それに見合う力を求めない。……貴様は本当に、今を変えたいと思っているのか？ 身を焦がれるような欲望を持っているのに、ここで燻らせたままにするのか？ ……欲望を抑えてまで、先に進もうとしない奴は——」

——ここで這いつくばってろ。

それだけ言うとはージルは立ち上がる。その眼には、もはやノーヴェは映っていない。踵を返して歩き出し、しかしコートの裾を掴まれる。

不快感を露わにした表情から分かる通り、彼の苛立ちは募っていた。なにより今更なんだ、という思いがある。

俯いたまま、ノーヴェは絞り出すように声を出す。

「アタシだって……アタシだって、強くなりたい。強くなって……みんなを、チンク姉を……守りたい。守れるような強さが欲しい」

それは彼女の、身を焼き焦がす程の欲望であり、彼女自身の決心でもあった。

自分の好きなもの全てを守りたい。なんて傲慢で、自分勝手に、無茶苦茶な願いだろうか。しかし、だからこそバージルには、見ていて好ましかった。

命の危機に際した時、欲望に駆られた時こそ、人は爆発的に進化する。それら全てが人を構成し、思考させ、行動させる。

「それならば……」

ノーヴェを上から眺めるバール。その顔には、普段見せない表情が浮かんでいる。僅かな愉悦に歪む顔。

口角を釣りあげながら、不敵に笑うその姿は悪魔のそれと同じ。妖しくも苛烈な微笑み。

人は魔を恐れる。されど人は、しばしば魔に魅入られる。

今のノーヴェもそうだ。その眼には妖しい色が見え隠れしている。その色はただしく魔に魅入^{アークム}られた者と同じだ。

「ここで燻っていて良いはずがないだろう？」

「……ああ」

ノーヴェは確かに自分の欲望を認めた。全てを、チンクを守りたいと認識した。だからこそ、また彼女も力を欲した。

それを彼女が理解した時、世界が光に包まれた。

ビクンとバールの体が跳ねた。それを見て「おお！」と、思わずインペリオの口から零れ出た。いきなり床に叩きつけたと思ったら、まったく動かなくなったのだ。思わず見入ってしまった。

バージルが立ち上がって首を回す、その後ろから近寄って背中にダイブする。羽交い絞めにするように、外側から腕を回し抱きしめている。

しかしそれも束の間、すぐにエアトリックで逃げられ、逆に襟首を掴まれてしまう。

「ちよちよちよ、首！ 首が締まってる！」

「いきなり抱きついてくるからだ。そんなに人肌が恋しいのか？」

「おう！ 今すぐにでも、誰かに抱きつきたいね！」

「お前は女が好きなんだろう？」

「違う！ 女が、じゃなくて女も、ってことだ。所謂バイセクくくく首イイイイ！」

堂々と変態発言をするインペリオの首を、さらに締め上げる。しかも右手まで使うという徹底ぶり。いかに悪魔と言えど、いささか辛いものがあるだろう。

首を絞められ苦しそうな顔をしながら、ふと一言彼女が漏らした。

「で、どうだった……？」

「……上々、と言ったところか」

それだけ聞くとインペリオは腕を組んで、うんうんと頷いていた。それに対して何か言おうとしたが――止めておいた。

特に理由があったわけではない。ただ、しいて言えば深い欲望が垣間見えた事に対する歓喜、とでも言うべきか。

「チンクとノーヴェを回収して、早く他の奴らがいる所に行くぞ」

「はいはい」

I Greed in myself 世界の中で欲望を見つめる（後書き）

――混沌とした舞台裏？――

「そう言えばチンクやノーヴェには、何もしていないだろうな？」

「お、唐突だねえ。いんや、特に何をしたわけでもないさ。本当は舐めたり揉んだりしたかったんだけどね」

「貴様、本当に駄目な女だな……」

「まあ女であると同時に、悪魔でもあるわけで。それに色欲の悪魔だっているわけだし」

「ああ、あの赤いのか」

「そう、あの赤いの。あれ見ると、どうしてもデスⅡサイズが浮かんでくるんだよな。あの竜巻のムカつく事」

「そうか。よくわからんが、まあそういうことなのだろう」

「まあ肉欲の魔人も目の前にいるわけだしね」

「肉欲？ ……………まさか、な」

「ちょ、刀を鏡代わりに使うなよ……」

「……どうやら貴様は、本当に、死にたいようだな」

「まあまあ。軽い冗談って取ってくれると嬉しいぜ」

「無理だな。その首をここで置いていってもらおうか……！」

「うお！？ たかがイタズラの復讐だけで、右腕と刀と空飛ぶ剣を使うなよ！」

「知らん！ こんな典型的なことをするな」

「う、ん……バージル……そこは、だめ……」

「チンク姉……可愛いよ……」

l B o r d e r o f l i f e l 全ての物事には境界線がある（前書き）

「まあーた現実逃避かい？」
インペリオ

「この先は、まさしく戦いしかない茨道となるだろう」
バージル

「もう一度、バージルさんと会って……お話しなくちゃ、ね」
なのは

l Border of life l 全ての物事には境界線がある

チンク、そして遅れてノーヴェもいなくなり、どうしようかとディエチは悩んでいた。稼働時間で言えばチンクの次に長いディエチとセインが、その場の指揮官のようなものにあたる。

だがセインは、何かあってからでも良いというスタンスで動こうとしない。所謂、事無かれ主義というやつだ。

自動的に、ディエチが指揮官の真似事をするのは必然だった。

集団を指揮するものとして確固たる情報が無い以上、迂闊な行動はできない。しかしチンクや戦闘の強いノーヴェまでもがいなくなったとあれば、何か二人の琴線に触るような出来事があったのだろう。

自分も勇んで二人についていきたかったと思う反面、下の者達を纏めなくてはならないという背反した感情が彼女の中で渦巻いていた。

そんなディエチの考えなど気にした様子もなく、セインを筆頭にした四人は久しぶりに手にできた自分の武器に喜んでいた。

「ISは禁止されてるから使えないっすけど、やっぱ固有武装は手にシツクリくるっスねー」

「あ、僕のステルスジャケット、良い匂いがする。誰かが洗ってくれたのかな？」

「良かった。私の剣にも異常はなさそうです」

「ほら、イノーメスカノンもあるよ〜？」

はあ、と一つ溜め息を吐き、肩を落とす。

自分がこんなにどうしようか考えているのに、どうしてこうまで能天気に行っているんだろうか？ 思わずそう思ってしまふ彼

女は知らない。自分が、知らず知らずに苦労人属性を手に入れてしまっている事を。

思えばクアットロと一緒に現れた頃からそうだった。

始まりはヘリに砲撃を食らわせた時だろうか？ 六課襲撃の時も、まだ良かった。問題はその後だ。

ゆりかご内での出会いがしらの砲撃戦。十分にチャージしたはずなのに、高町なのはに迎撃されて一足早く退場。固定砲台VS移動砲台は後者に軍配が上がった。

あの時か？ あの時なのか？ こんなに気苦勞が絶えなくなったのは？

床に手をつき、ガクリと肩を落とす。これまでの自分の在り方を思い出し、改めて疲れてしまった彼女は、ブツブツと呟きながら自分の世界に引きこもってしまった。

そんなディエチの事など、周りはまったく気にしていなかった。セイン以外の三人は既に、オットー対ディードとウエンディでの模擬戦を始めていた。

JS事件の時は、コンビネーションの僅かな隙。そしてオットーの個人戦能力の低さが仇となった。だからこそオットーの戦力強化を見越して、既に個人での動きを模索していた。

近接戦闘ができるディードが前衛を、射撃魔法が得意なウエンディが後衛をしての布陣。対するオットーはISが使えないため、攻撃する事ができない。だからこそ全ての基本である、回避を重点的に行っている。

身内といえど、戦闘になれば即座に本気の動きができるのは、彼女たちが戦士だからこそ。容赦のない斬撃と射撃の二重奏が、なまっていた三人の体を解していく。

戦闘機人ゆえに精密射撃はお手の物。前衛が攻撃し相手がかわず、その短い瞬間を狙った弾丸がオットーを狙う。

体勢が崩れた後、回避の難しい状態が迫りくる弾丸の脅威を濃く

する。

しかし攻撃するのが戦闘機人なら、回避するのもまた同じ。人間には決して無理な反応速度で動き、弾は身を掠るのみ。

だが気を取られていいのは一つだけではない。後衛が仕損じたものを討ち取るのも、また前衛の仕事。

手数が多い二刀での攻撃は、文字通り攻撃の嵐。範囲内での行動は、どうしても無理がある。それをかわそうとした先で、またも後衛が舌なめずりをして待っている。

終わる事無いループから脱そうと後ろに下がり、前衛が距離を詰めようと構え、後衛が得物を構えた時、唐突に模擬戦は終わりを告げた。

「そういえば、音がしなくなっただっスね」

射撃体勢でライディングボードを構えていたウエンディの小さな呟き。それが聴こえた二人も耳をすますと、あれほどの爆音がいつの間にか止まっていた。

それと同時に、彼女たちのいる部屋に向かっている、複数の足音。そのうちの一つはブーツの音だろうか？

淀みなく等間隔で聞こえるそれは、その人物の冷厳な性格を表しているのかもしれない。

やがて入ってきたのは、やはり彼らだった。

「皆、心配させたな。今戻ったぞ」

そう聞こえて五人が目を向けると、真っ先に見えたのは自分達と分かれた時以上にボロボロの姉。よく見ると手の火傷などが増えている。幼い風貌に血まみれの姿は痛々しいものしか思わせない。

その後ろに「いやー、皆の衆、出迎えご苦労。はっはっは」なんて言いながら、ポニーテールを揺らしてインペリオが入ってくる。

彼女も薄い金髪や着ている服、肌に至るまでチンクと同様、黒く変色した血で濡れている。しかしそれが、不思議な艶やかさを思わせる。まるで血色こそが自分の化粧とでもいうように。

次に入ってきたのはノーヴェ。彼女も怪我はしているが、それでも二人ほどではなかった。ムスツとした表情は普段と変わらない。何も知らない人間は彼女が怒っていると勘違いするが、普段があの顔なのだ。

最後に入ってきたのは、例の蒼い剣士。彼も例にもれず怪我はしているのだろうが、それをまったく感じさせない。鋭利な瞳で前を見ながら、しかし腕を組んで壁にもたれかかる。特に何をしようと考えるはいないのだろう。

「チンク姉、大丈夫ですか!？」

「うわ、凄い血……すぐに手当てするからね!」

チンクに駆け寄ったオットーとセインに、彼女なりに大丈夫とアピールするも聞いてもらえず、彼女は奥に連れていかれてしまった。その慌てぶりからして、おそらく相当焦っているのだろう。

事実、大丈夫と言いながらも、彼女の腕は痛みを感じさせないほど疲弊していた。見た目は酷いのに、痛みなく動かせる事がチンクを驚かせていたりもする。

「ノーヴェ! 大丈夫ですか?」

「いきなり行ってしまうから心配したんですよ?」

ウェンディとデイドは、チームメンバーのノーヴェの下に行く。彼女も疲れているらしく、隠そうとはしているものの上手く隠し切れていない。手の僅かな震えなどが、蓄積された疲労を表している。

しかし彼女にその事を言うと怒りだしてしまうため、分かっている。

ても言わない。それは三人でチームを組み始めた時から理解していることだった。

「ワリィな。少しばかり心配をかけた」

二人に心配をかけた事に対して、ノーヴェはバツが悪そうに、しかし大人しく頭を下げた。

意表を突かれ、しばし思考が停止してしまうウエンディとデイード。しかし無理もない。彼女の性格だと、この場面は「うるせえ」とか言っとうやむやにしてしまうはずなのに……。

「ノーヴェ、何かあったんですか？」

「……いや、何も、なかった」

「――？」

分かれていたメンバーが全員そろった事で、周りは湧き立っていた。特に戦闘機人で姉妹ということもあり、七人は各々話し合い、その場が良い塩梅に和み始める。

蚊帳の外にいるバージルは一人、それを見る。彼女たちの誰にも姉妹と会えて、話せて嬉しいという思いが溢れている。

それは家族の絆？ それとも親友との繋がり？ 答えは彼の中にない。

誰も彼をも利用し、利用されないように目を張り、罠に嵌める。討ち向かってくる敵には銀の一閃を、逃げようとする者には魔剣の弾丸を――

そうして築き上げた屍の山、流血の川、濃厚な鉄の臭い。今更それを掘り返して答えを探すなど、彼はしないし、するつもりもない。そんなものは、とうに埋もれて押し潰されただろう。

「まあーた現実逃避かい？」

「俺はそんな事をしていたつもりはないのだが」

「いやいや、私には分かったさ。だってバージルは私のお兄ちゃんだからな」

「俺は貴様を妹に持った憶えはない」

取りつく島もないとは、まさにこの事だろう。バージルにべったりのインペリオだったが、しかし彼には何の感慨もなかった。

しかも先程からどうにも変わった呼称を付けたいらしく、いろいろと呼び名が変わっている。彼に言わせれば、その全てがくだらない。

「で、そろそろなんじゃないか？ 可愛い弟の芝居でも、じっくり見させてもらおうかね」

——今度は弟か……。

いい加減飽き飽きしてきた彼は彼女の戯言をスルーすると、壁から離れてドアの前に立つ。

その双眸に見えているのは、彼女たちが戦士として決断できるかを見極めようとする、ある種の教官のような光が宿っている。

そして唐突に閻魔刀を抜き、一閃。バージル、インペリオの前に深く鋭い線が走る。

それはちょうど、魔剣士と戦闘機人を分ける境界線ボーダーラインのようである。

「お前達。お前達に聞きたい。もう一度暴れたいとは思わないか？ 戦闘機人としての使命を全うしたいとは思わないか？」

低く、されど聴かずにはいられない声が場を支配する。

気付かぬ間に忍び寄る病のように、スルリと言葉が侵入する。

芝居と言ったインペリオは、とても楽しそうにバールルの事を見ている。ニヤリと笑った姿が、とても絵になる。

「俺はこの事を言うために来たのだ。俺やスカリエッティと共に、再び戦わないか？ 管理局や地上本部相手に戦いたいという奴は、堂々と線を越えてくるがいい」

先程、床を斬りつけてできた線。それはやはり一種の境界線だった。彼がここに来たのは、なにも意味が無いわけではなかった。彼がこれからやろうとする事は、ほぼ確定的に管理局を敵に回すことになるだろう。

「この先は、まさしく戦いしかない茨道となるだろう。それを理解してお前達の名称を全うしたい奴はこちらに來い」

数は力、とはよく言ったものだ。仮に幾千、幾万もの敵が来ようと、それが悪魔でなければバールルにとっては事もない。いや、たとえ悪魔の軍団が襲いかかってこようとも自身の全体力を代価にして全滅する事も不可能ではないはず。

しかし局地的――戦術的――勝利が多くもたらされようと、大局的――戦略的――勝利を得られなければ意味がない。個人の戦闘力が高かろうと、それに何かがあって動けない、または不在の時。はたして一軍突出の大隊はどうなるだろうか？ そんな事、いまさら言うまでもない。

だからこそ魔導師とは関係がなく、かつそれなりに強い分類に入るのは……戦闘機人という結果に落ちついた。

この施設に来る前の彼は、もう一人の自分に体を奪われていた。しかしそれでも自分が考えていた事をするために動くあたり、思考パターンは同じなのだろう。

「俺達はこの場を去る。そろそろ奴らが気付く頃合だろうからな。……覚悟を決めて――」

――ついて来たい奴だけついて来い。

バージル達がチンクたちと遭遇したその日の早朝。ミッドチルダの病室で一人の女性が目を覚ました。

彼女の名前は高町なのは。言わずと知れた、管理局のエースオブエースである。

その彼女は昨日、嵐のように表れ、そして消えていったバージルによって深手を負わされ、この病院に運び込まれた。痛々しいまでに包帯を巻きつけられ、頭にも同じく清潔なソレが巻いてある。

運び込まれた時、彼女の白いバリアジャケットは赤い血で汚れていた。顔面にすら赤い筋がいくつもあったが、幸か不幸か、額を割られた時に流れ出たものだった。全身に裂傷や擦過傷、青あざなどが数え切れないほど存在し、見るも痛々しい姿に変わった。

しかし奇妙な事に、骨折や内臓破裂などの重傷は見当たらなかった。

ミッドチルダにも車をイジリ、所謂モンスターマシンにまで魔改造して一般道を爆走する輩がいる。そのため事故を起こした運転手が担ぎ込まれてくる事も間々ある。

高速で走る鉄の化物が何かにぶつかった時、双方に凄まじい衝撃を与える。ゆえに運び込まれた時には既に手遅れというのが大半だ。

そんな事例を長年に渡って見てきた医者は、高町なのはが信じられなかった。

医者が診た時、確かに全身に無数の軽傷を負っているのは確認できた。しかし重傷らしき重傷がどこにも無かった。見立てでは、今まで見てきた化物車の事故並に酷かったはずなのだ。

信じられないのは彼女の頑強さ。人間にあるまじき肉体の強さが彼女を守ったとしか、医者には考えられなかった。

そしてなのはは、またしても予想の範疇を軽々と越えて復活していた。

「ここは……」

痛い。まだ、体が痛い。動かすたびに節々が悲鳴をあげ、頭がもう少し寝ていろと注意している。

まだあまり深く思いだせない。私、たしかバージルさんに――

――迫りくる蒼白い巨腕。

――未だ感じた事のない、背筋を走る魔力の冷たさ。

――圧倒的な暴力によって叩きつけられた瞬間、薄れゆく視界に映る剣の眼光。

……大変だ。こんな所で寝ている暇なんてない。早くバージルさんを探して、どうにかしないと。

あの右腕は危険すぎる。バリアジャケットやレイジングハートのプロテクトを打ち破り、直接やってくる衝撃、ダメージ。

どうやってあんなものを手に入れたのかは分からない。けど強すぎる力には、なにかしらの代償がつくって昔からお父さんとお兄ち

やんが言っていた。バージルさんのリスクが何なのかはまだ分からないけど、きつとそれなりの反動を受ける。ううん、もう受けているのかもしれない。

でもそこまでして、あの人は何がしたいの？ 力だけを求める人は、必ずその力に溺れて身を滅ぼす。

小さい頃、ユーノ君がよく言っていた。魔法の力にしろ、それ以外にしろ。何かをするならそれに見合った心が必要になるって。その時はよく分からなかったけど、今は分かる。まさに私が考えている事と同じ意味だったんだ。

「もう一度、バージルさんと会って……お話しなくちゃ、ね」

言って、思わず笑いがこみ上げてくる。こんな体でどうしろって言うの？ 全身ボロボロで痛くない所が無いぐらいなのに。

JS事件の時もブラスターシステムをたくさん使ったけど。もしかしたら……今回も派手に使う事になりそうだなー。

にやはは、またフェイトちゃんや皆に心配かけちゃうかも。でもそれぐらいしないと、あの人は止まらない。止められない。私の全力全開で挑まないと、あの人は何もかもを壊しにくるのだろう。

そんな事、絶対にさせない……！ みんなで笑っていられる未来を作るためにも、私が全てを救う。フェイトちゃんも、はやてちゃんも、六課の皆も。そして、

——バージルさんも。

「いや、参りましたよ。まさかあのような場面で、六課の皆さんが保護対象にしていた人物と出会う事になるとは」

グラナ・ダリアス、シグナム、フェイトは昨日の情報などを共有しようということになった。そこでなのは容体を確認しに行きやすい屋上、という事になった。ここならば院内に比べて、幾分か気兼ねなく通信などができる。

「本当にすいません。こちらの不手際で、あのように危険な場面に遭遇する事になってしまい」

申し訳なさそうに頭を下げるフェイトに、しかしグラナは朗らかな笑みを浮かべて頷く。危険と隣り合わせの任務が多い管理局で、いちいちそんな事を気にする人物はあまりいない。入局当初の新人ならば慌てるが、ある程度の場合数を踏むと、それもやむなしといった具合だ。

無論、危機感とは命の危険を表す警告。ゆえに無視しすぎるというのも考えものであり。

要は臆病と蛮勇の境界を見極められる者が、この世界では長生きできる。

「いえいえ。管理局に入局した以上、ああいう事態になる事も想定していますよ」

なので彼女もバージルと鉢合わせになった事を気にしていない。むしろ彼女としては、彼とあ場で遭遇した方が都合が良かった。そんな事を思いながらも、決して顔には出さずに笑みをたたえる。

「それにしても、よく彼を相手にして我々が来るまで持ちこたえら

れましたね。機動六課も、彼には手を焼かされたのですが」

「ええ、そこはまあデバイスのおかげ、という事もありますね。どうにも私自身には、そこまで誇るような所が無いようです」

戦闘狂のシグナムからの賛辞すら、グラナは薄い笑みを浮かべて謙遜している。どうにも彼女は、自分への手柄や誉れというのを軽視しているように思われる。まるで自分にはそこまでの価値がない、とでもいうようである。

「おう。俺が使える奴だからこそ、ここまでグラナをサポートできてんだよ」

そう言っただけ主張したのは、彼女のデバイスであるカンヴィクト。ミッドチルダでは珍しい戦タイプのインテリジェントデバイスであり、謙遜する主とは裏腹に、とても自己主張の激しいデバイスである。

そして隠してはいるが、バージルの欲しがる魔具でもある。なぜ彼が魔具を欲しがるのか、明確な理由は分からない。しかし彼の狙いが魔力を内包した物であり、カンヴィクトが手元にある以上、バージルが接触を図ってくるのは目に見えている。

彼との対話は、別にその時でも構わない。場合によっては……彼女の助けになってくれるかもしれない。

思い描いた構想のためにはカンヴィクトと、その他の魔具。そして何より原初の存在が必要不可欠。

なればこそ、とにもかくにも彼と出会わなくては。

（大丈夫。私には相棒がいる。心強い相棒が）

腕に着けてあるアクセサリ型で待機する相棒をさする。それは、これからの出来事に耐えるかの如く身を抱いているようにも見える。

その動作を肌寒いと勘違いしたフェイトが、彼女と一緒に院内に戻ってしまう。必然的に、後に残るは烈火の将のみ。

柵へと歩み寄ったシグナムは、片手だけ添えて眼下の風景を見下す。若干吹きだした風は心地よく彼女の髪をすき、しかし留まる事を許さない。一つに縛った髪も僅かに後ろに流れる。

目を細め、空いている片手を日避け代わりに目の上に持っていく。そうすると思ひ出されるのは、なぜかグラナの微笑み。それは作り物のようで、他人との交流をさけるように、ひたすらな笑顔を作っていた……気がする。

——あの笑み、どこかで見た気がする。誰だったか、そう遠くない者がああいう感情をしていた……。

思ひ出そうとして目を閉じるも、やはり思ひ出せない。もう、すぐそばまで出かかっているのだ。

あと少し、この停滞する霧さえ払えれば、思ひっきりその人物が出そうなのだが……。

——ふむ。今は無理、か。

やはり思ひ出せなかった。とにかく、彼女に似た人物は見た事があるのだ。

きっと。きっと、その人物は彼女と似ているに違いない。そういう根拠のない自信が、シグナムの中にはあった。

l Border of life l 全ての物事には境界線がある（後書き）

――病室にて――

「それにしても、これだけやられたのに何で動けるんだろう？ もしかして歩けたりして……きゃ！」

「なのはっ！！」

「あ、ありがとう。フェイトちゃん」

「まったく。目を離すとすぐこれなんだから。少しは体を労ってよね？」

「う、うん。ごめんね、フェイトちゃん。……でも、なんでちょうど間に合ったの？ 普通はこける人間を支えるなんて無理だよ？」

「なのはが危ないって電波を受信したからに決まってるでしょ？」

「え？ 電波って何？ ていうか近いよ、フェイトちゃん……」

「それは、なのはが良い匂いだからだよ」

「な、何で手を怪しく蠢かせているの？」

「それは、なのはが可愛いからだよ」

「じ、じゃあ、何で今にも押し倒そうとしているの？」

「それはね……なのはを食べちゃうからだよ！」

「あ、ま、待ってフェイトちゃん！ 私まだ怪我人だから、ひゃあ！ そんなにしたらまたひどくな、ああ……」

「テストタロッサ執務官は同性愛者だったようですね。……ちなみに良い子の皆は真似しちゃダメですよ？ ん？ 何をしているのか気になる？ 残念ですが、ここから先はいわゆるR指定です。お子様はお家に帰りましょう」

『なのは！』

『ま、待って！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7660k/>

力への無限の欲望 -I need more power!!-

2011年10月9日23時38分発行